

日本への回帰

大学教官有志協議会 編
国民文化研究会

第 8 集



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会
編

日本への回帰 (第八集)

—第十七回学生青年合宿教室の(阿蘇)記録より—

は し が き

「平和と民主主義」といふ、戦後をリードした原理が、「創造」の原理ではなく、「解体」の原理であったことは、誰の目にも明白になった。連合赤軍事件や、テルアビブ空港乱射事件の主役を演じた青年たちは、その大部分が国民の血税によつてまかなはれてゐる国立大学の学生であり、戦後教育の中で育てられた秀才たちであつたことは改めて注目されねばなるまい。彼らの出現の原因を独占資本の人間疎外とか、都市化現象とかに求めようとする発想には、知識人特有の巧妙な責任回避の姿勢があらはに見える。それは、まぎれもなく、戦後日本の思想の総体が生み出した必然であつた。この「平和と民主主義」といふ原理によつて国家といふ全体が個人といふ最終単位に解体され、殆んど無制限な欲望の解放が、それこそ人間性に忠実な所以だと謳歌されるやうな風土を作り上げて来た。かういふ風潮は、今こそきびしく反省されねばなるまい。「国のいのち」に感ずる能力を培ふことは、いづれの国においても自明な教育の原理であるはずなのに、それが悪であり、反動であるときめつけられる雰囲気支配的であるといふのは、世界で稀有な例外であらう。あれほど「アメリカ帝国主義」を攻撃する左翼が戦後思想のこの核心については、口を緘して語らぬとは奇妙なことである。彼らが「平和と民

「主義」の擁護者をもって任ずるのは、日本弱体化のこの原理が、彼らが意図する独裁体制実現のために有効であるといふ打算以外の何ものでもない。いはばこのスローガンは「独裁と共産主義」といふ中味をつつむオブラートである。おのがじし、むき出しのエゴを主張して、乱世の様相が深まれば深まるほど、そのフラストレーションを政治的エネルギーに組織する機会は多くなる。戦後の占領政策を彼らが「原点」として死守しようとする意図は、全くこの一点にかかってゐるといつてもよい。青年の心の「飢ゑ」と「甘え」は暴力革命を激発する起動力である。彼らの心の荒廃は一刻も放置することを許されないのである。

昨年一月のニクソン訪中以来、世界政治はもっぱら中国を軸にして動いたやうに見える。中国当面の最大の敵はモスクワであり、中ソ国境線の核ミサイルの砲列である。いはゆる「日中国交回復」が急がれたのも、「北」が停戦協定締結に追ひこまれたのも、この二つの共産帝国の鋭い対立に原因がありさうである。それにしても、日本人は未だに太平洋戦争は侵略戦争であったといふ断定的な史観の呪縛から解き放されてゐないため、特に中国に対しては余りに感傷的な外交感覚が支配してゐるやうである。だが中国は安保に対しては、内政不干渉の立場でとかくの批判はしないといふ。米軍の戦力が対ソ抑止戦力として働く限り、それはむしろ好ましいといふべきなのであらうか。微塵のセンチメンタリズムも寄せつけぬ冷酷さである。

昨年末の総選挙で共産党の議席が大幅に増大した。プロレタリア独裁の綱領と議会制民主主義との矛盾を、彼らはあらゆる詭弁で糊塗しようとするが、その政治的体質は発足以来毫も変化してゐない。民族主義と結びついた後進地域の共産主義の力は、ベトナムで実験済みだが、青年の心の空白を埋める「民族」の問題を最も効果的に利用してゐるのは、外ならぬ彼らであることは注目されねばなるまい。イデオロギーの対立がいかにかに大国の戦争介入をまねき、小国を悲劇のどん底に追ひこむかをわれわれはベトナム戦争の教訓から切実に学ぶべきであらう。終りに、講義要旨の掲載についてご配慮頂いた諸先生方に、深甚の感謝を申し述べる次第である。

昭和四十八年三月

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき……………1

一、国のいのち

われらにとって国家とは何か……………福岡教育大学助教 山田輝彦……………3

マルクス主義の超克……………鹿児島大学教授 川井修治……………27

人間本来の心を取り戻さう……………国民文化研究会理事長 小田村寅二郎……………49

一、講義

世界の動きとその解釈……………世界経済調査会理事長 木内信胤……………79

日中国交正常化の問題点……………経済学博士 山本勝市……………111

大自然の法則と文明……………評論家 胡蘭成……………135

一、和歌創作と輪読

参加者全員の創作短歌についての全体批評……………

亜細亜大学教授 夜久正雄……………169

輪読を班別で行なふについての導入講義……………

修猷館高等学校教諭 小柳陽太郎……………193

一、青年研究発表

私の中に息づいてゐる国家……………新日本製鉄 労働部 今林賢郁……………217

合宿教室の中から見つけた私の生き方……………

東急建設建築部技師 奥富修一……………233

第十七回「合宿教室」のあらまし

(附) 合宿教室における学生の創作短歌

鹿児島大学法文学部四年 徳丸雅信……………247

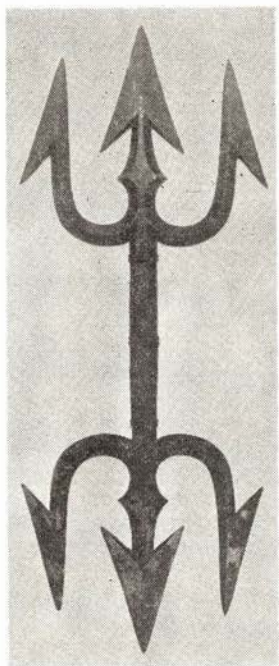
あとがき……………297



国のいのち

われらにとって国家とは何か

山田輝彦



はじめに

近代化の問題

思想史の曲り角

戦後思想との訣別

正倉院・三鈷金剛杵

はじめに

人間存在の根本に関するいくつかの条件の中で、国家の問題は最も重大なものの一つです。ところが、第二次大戦における敗北の後、この国家といふ言葉は不当に軽蔑され、嫌悪されて来ました。否定、嘲笑、揶揄といふやうなマイナスの意味で使はれて来た。あるひは、使はずにすむならそれにこしたことはない、危険な言葉として回避されて来ました。国家といふ問題が日本ほど無視され、マイナスの態度でしか論じられないやうな国はないのではないか、せめてどこの国でも行はれてゐる程度の関心をもって、もう一度その内容を再検討してみたいと思ふのです。

われわれが国家といふ言葉から受取るイメージは、それぞれの人の体験によってニュアンスが違ふと思ひます。私にとって、国家はまづ「外なる国家」として考へられます。それはいふまでもなく、制度・組織・機構・権力構造といった側面です。さういふやうに客観化して、認識することができる対象としての国家があります。この側面は社会科学の領域に入るべきものと思はれます。私が国家といふ言葉から受け取るもう一つのものは、「内なる国家」とでもいふべきものです。これは、客観化し、対象化して、知性の力で認識するといふものではなく、それは一つのいのちであり、価値であり、それを味はひ、感じる外につかむ方法がない。つま

り知的認識だけではどうにもならぬものが、国家といふ言葉の中にこめられてゐるやうに思はれます。

さて、私どもの愛する祖国日本は、戦前までは「東海の君子国」とか「神州清潔の民」とか言はれて来ました。日本を訪れる外国人が世界でこれほど道徳的に高い民族はないと讃嘆したものでした。しかし、現在の私どもの周囲に起るさまざまな事象は、何といふ猥雑、無秩序な状態であらうか。これで果して国家といへるだらうか。むき出しの自己主張をもった人間が集つて、無秩序な集団をなしてゐるに過ぎないのではないかといふ痛憤を禁ずることができません。最近の話題をさらつた連合赤軍の一連のリンチ事件とか、テルアビブ空港の乱射事件とかいふやうな、常識的な思想や感覚の水準では理解できぬ途方もない事件が新聞紙上にぎはしてゐるのです。来るところまで来たといふのが現代の思想状況だと思はれます。

ある社会学者は、最近のショックな事件の主演を演じた人達は、二十三才から二十七才までの世代、つまり終戦直後から五年間の間に生れた人たちだと指摘し、その約一千万といはれる世代の特徴を次のやうに分析してゐます。第一にこの一千万の中には、史上最高の数といはれる大学生の一部を含んでゐる。彼らは知的な観念論者であるといふこと。第二に五年ごとに区切つて行くと、この世代の人口密度が最も高い。彼らは就職、結婚、入学試験等において、終生一番激しい競争にさらされるといふこと。第三に、都市化の現象に伴つて、都市集

中の現象が出てゐますが、その都市集中度も、五年
きざみで算定した場合、最高のパーセンテージを示
してゐること。第四に、これらの世代は、年令的に
家族集団から自立できる世代ではあるが、自分では
まだ家族を構成してゐない。さういふ意味で、脱社
会脱家族の世代であること。第五に、よきにしろ、
あしきにしろ、物心ついてから圧倒的なテレビの影
響下に人格形成をした世代であること。第六に、そ
れらの青年たちが住んでゐる日本といふ空間は、不
正義の支配する空間であり、彼らは一刻も早く脱出
すべき空間といふ認識をもつてゐること。第七に、
彼らの親に当る人は、かの皇軍兵士、横井庄一の世
代であること。彼らと息子との間には越えることの
できない断絶があること。かういふいくつかの例を
上げて、これらの要因が、従来の人たちの常識的な
認識や感覚の範囲を越えた「非日本人」を産出した



のだ。彼らはどこにもよりどころとなるべき準拠集団を持たない。だから彼らは、さういふ準拠集団を求めて放浪する、孤独な、国際的な流れ者になる。そして砂漠の果でおのれの信ずべきものにめぐり合ったのだ。少くとも主観的には彼らはそこで生き甲斐を見出したのだから、それでいいではないか。かういふ動きはこれからも続々でてくるだらうといふ分析なのです。

非常にジャーナリスティックな鮮かな分析ですが、では一体誰がさういふ国際的な、孤独な流れ者をつくり出した責任者であるかといふことについてはその指摘がどこにもない。その社会学者の分析によれば、以上にあげたやうな諸条件の中から、自然発生的にさういふ人間が生れたといふ結論になります。現代文明の生み出した一つの必然であるといふ結論で、かういふパターンの発想は、思想界の主潮とさへ言へると思ひます。

私は一番責任をとらなければならぬのは、やはり戦後の教育であらうと思ひます。自分も教職にあつて、新しい学校制度のもとで多くの生徒を育ててきましたが、戦後教育がすべてマインスだったとはいへません。しかし、何か根本的なものが、そこには欠けてゐたのではないでせうか。現代の青年の心を占めてゐる一種の空虚感、虚無感のよつて来るところは何か。それは戦後教育の中から、意識的に「国家」が排除されたところにあると思ひます。新しい教育の出発点は占領政策であり、戦後の大義名分であつた「平和と民主主義」が最初に出て来るのは、アメリカの教育使節団の勧告書の中です。その中には、今までの旧日本はすべてこれ戦争

と全体主義の日本であった。これからの日本は、さういふものを全面的に否定して、「平和と民主主義」でいかうといふやうにうたつてあります。そこで、国家といふものは否定すべき悪であるといふ前提のもとに、徹底的にそれは排除されてゐます。そこに、現代の青年の心の癒しがたい空虚感の、最も大きな原因があるのではなからうか。どうしてもここで、国といふものを、負ひ目のある発想のもとに、ただ否定の対象として論ずるのではなく、堂々と正面から考へ直すことがなければ、現代の青年の空虚感を埋めることは、できないといふやうに思ひます。大体さういふところが、私がこの大きな標題を選んだ理由なのです。

近代化の問題

現代を支配してゐる思想状況は、政治上の保守とか革新とかいふ区別を超えて、おしなべて虚無的、退廃的なものが浸透してゐるといふやうに把握されます。その第一の原因は、いふまでもなく戦争の敗北です。敗戦といふものが、いかに大きな精神的な傷になつてゐるか。巷には目の眩むやうな華やかな文明があります。個人的な欲望をみたすさまざまな施設は至るところにあります。けれども、繁栄の中の貧困といはれるやうに、何かむなし。そのむなしさのよつて来るところは何でせうか。私どもが当面してゐる思想的混迷を打開するためにも、やはりわれわれが選んだ「近代化」そのものまで遡つて考へてみる必要があらうと思ひます。

明治維新について、例へばマルクス主義の歴史家はブルジョワ革命であるといふ。これは労働派の規定ですが、講座派の連中は、幕藩体制を再編成した絶対主義の確立であるといふ。いづれにせよ、幕藩体制のもつ内的矛盾によって必然的に起ったといふ観点をとりまします。しかし果してさうであらうか。明治維新といふものは強ひられた近代化であった。日本の上に加へられた力とは何であったか。それは言ふまでもなく黒船や大砲によって象徴されるやうな、ヨーロッパ民族の東漸の意志であった。さういふ意志に対する日本人の自衛本能を抜きにして、明治維新といふものはあり得なかつたと思ひます。近代化とは何かといふ問題は、なかなか容易に論じ尽されませんが、ヨーロッパ近代が生み出した技術文明によってひき起された内的、あるひは外的な現象を概括していふのだと規定できるでせう。それがどのやうな害悪を伴なはうとヨーロッパは自分自身が生み出したものであるから、それを克服するだけのものを持ってゐます。しかし、日本の近代化は、ヨーロッパの場合とは違って、それは西洋化と全く同義であつたといふ点が重大です。さういふ宿命の重大さに最も早く気がつき、それを警告した一人が夏目漱石です。彼は明治四十四年の八月に和歌山で「現代日本の開化」といふ有名な講演をしました。その中で「西洋の開化（すなはち一般の開化）は内発的であつて、日本の現代の開化は外発的である」といつてゐます。更に続けて「ここに内発的といふのは内から自然に出て発展するといふ意味で、丁度花が開くやうにおのづから蕾が破れて花卉が外に向ふのをいひ、また

外発的とは外からおっかぶさった他の力でやむを得ず一種の形式を取るのを指したつもりなのです」といひます。ここに、ヨーロッパの武力に強ひられた、近代化といふ鋭い指摘があります。そこに日本の近代化といふものの非常な無理があった。しかし、私どもの祖先は、無理を承知してこの道を選択したのです。もし選択しなかったらといふ仮定も立てられますが、その場合、インドや昔の支那のやうな状況になつてゐたことに間違はないと思ひます。

トインビーは、二つの文明が接触する場合、優勢な文明は劣勢な文明を吸収してしまふ。劣勢な文明は消滅してしまふと言つてをりますが、われわれの祖先は異質な文明と血みどろな戦を戦ひながら、緊張した異常な意志力でもつて、その困難を見事に克服して行つたのです。いつの時代でも必ずプラスの面とマイナスの面がありますが、明治の達成のすばらしさを認めるのは、むしろ外国人の方が多いのです。幕末の志士の佐久間象山は、東洋道徳、西洋芸術といふことを申しました。この西洋芸術といふのは技術といふ意味です。つまり東洋道徳を倫理や行動の中核として西洋の技術文明をどんどん採り入れて行けばよいといふ発想で、西洋文明移入の一つの判断を示してゐるわけです。しかし、一つの文明の中で、技術文明だけ切り離して、大砲とか電信電話とか、汽車汽船とかいふものを輸入する。しかし、それをうみ出した源であるヨーロッパの精神は別であるといふわけには行かなかつた。やがて、その精神をもふくめた異質な文明との全面的な対決が必至となるわけです。

そこで、東と西の文明はどのやうに異質であるのか、といふ問題になります。学習院大学の
大野晋さんは、ヨーロッパ語と日本語を比較して一番気がつくのは、ヨーロッパ語は一人称と
二人称が非常にはっきりしてゐて、それが混淆されることは決してない。我と汝の間は完全に
切れてをり、一人称と二人称は丁度契約の場合の仕手と受手の関係に相当する。そして、かう
いふ関係が出て来る根本には、ヨーロッパ民族の起源が遊牧民族である点にある。遊牧民族と
いふものは絶えず移動して未知の人間と接触する。人間関係はさういふ場合、相互不信といふ
前提で契約関係ができる。これがヨーロッパの人間関係の最も基本的な型であり、それが言語
における一人称、二人称の峻別になると説かれるのです。ところが日本語の場合一人称と二人
称は容易に混淆する。相手を手前といったり、おのれといったりしますし、一人称はしばしば
省略されます。また一人称、二人称とも対人関係や性別によって実に多称である。これはやは
り日本人の起源が農耕民族であり、一所に定着するところから来るものであって、人間関係の
基本は契約ではなく、親疎によって区別される。それは定着的な農耕民族といふところから来
る人間関係の反映だと説いてをられます。つまり西洋と東洋では、文化の型が根本的に違ふと
いふことになります。

一体文化の型といふものは、神の概念に非常にはっきり出てまゐりますが、遊牧民族のうみ
出した神は、超越的な絶対神であります。ゴッドは、唯一最高で全能の神様です。人間の上に

君臨し、支配し、処罰する神、それは、遊牧民族的形態を統一するためには絶対必要だったのでせう。ところが、日本の神といふのは、さういふ唯一神ではない。むしろ神々と呼ぶべきです。和辻哲郎博士が「日本倫理思想史」の神話のところを分析してあるやうに、日本の神は神聖なものを媒介する人、あるひは神聖なものを担ってゐる人、これがすべて神である。だから日本の神は、祀られる神であると同時に、自分もまた神を祀る存在である。例へば天照大神は人に礼拝される神であると共に、天津神をいつき祭る神である。さういふやうに順次に神聖なもの源に遡って行くと、一番最後にあるものには名前がつけられない。つまり「無」であるといつてをられます。名前をつけるといふことは相対化してしまふことであつて、本当に絶対的なものは名前をつけられない。強ひて言ふならば、神聖性そのものともいふべきものが源にあつて、それを媒介するものが神である。だから和辻さんの結論は、神とは「神命の通路」であるといふことになります。このやうに考へれば、天皇は神であるといふことは何の抵抗もなく受け入れられるので、日本の古い世代の人たちはそのことを信じて疑はなかつたのです。ゴッドと考へるからこそ恐しい抵抗感が起つてくるのです。

さういふ異質の文明、技術によって武装された次元の高い文化の侵入に真正面からさらされたのが明治です。それを主体的に摂取するといふことが、いかに大きな事業であつたかその苦闘した人びとの心情をもう一度ふりかへつてみる必要があると思ふのです。漱石は先ほ

どふれました「現代日本の開化」の中で、かういふ異質文明の波の中で、国民が味はねばならぬ「空虚の感」を指摘し、「皮相上滑りの開化」であることを熟知しつつ、涙を吞んで上滑りにすべってゆかねばならぬ悲劇を見抜いてゐます。これは文明の戦の中で血を流した人の言葉であつて、その沈痛なひびきには今日の状況へのいみじき予言があつたと思ひます。

思想史の曲り角

西洋文明が日本人の精神に決定的な影響を与へ始めるのは、日露戦争前後からです。具体的に言ふと、それは自然主義の思想です。自然主義は単に文壇の風潮であつただけではなく、日本の思想史で非常に重大な曲り角でもあつたと思ひます。それは従来 of 共同体的な人間観を徹底的にうち砕いた思想であつた。同時に人間といふものを生物的存在であるといふ次元で把握しようとした思想です。自然主義の有名な評論家の一人である長谷川天溪は、猿と人間とにエックス光線をあてると、同じ骸骨の姿が映るといふ意味のことを言つてゐます。これは非常に幼稚な思想ですけれども、従来 of 日本人の価値観を徹底的に否定したのです。例えば田山花袋のやうな人は、私は今まで天上を憧れてゐたけれども、これからは地上を這ひ廻る動物にならうと宣言して「蒲団」といふ小説を書きました。それがすばらしい告白としてもはやされるといふ状況が既に出来上つてゐたのです。このやうに、自然主義の思想は、ただ文芸上の思想と

いふだけではなく、日本の知識階級を無神論者にする上で破壊的な力をふるった時代思潮であったと思ひます。ところが、この人間を性欲の奴隷として概括するやうな自然主義思潮に対して、最も強力な批判者であったのが、漱石と鷗外であったのです。彼らが明治四十年代の二つの衝撃的事件——大逆事件と乃木殉死事件——にどのやうに対処したかといふことは、思想上の注目すべきポイントであらうと思ひます。

周知のやうに、大逆事件とは、当時の無政府主義者幸徳秋水が中心となつて明治天皇の暗殺を企てたといふ事件です。（この事件の實質上の主謀者は秋水の内妻であつた菅野スガといはれてゐます）この事件がいかに衝撃的であつたかは、これにふれた文学作品が五十篇近く存在してゐることによつても分ります。この大逆事件の起つた明治四十三年、海軍大尉佐久間勉を艇長とする潜航艇が訓練中に沈没して十三名の乗員が殉職するといふ事件がありました。佐久間艇長は次第に苦しくなつてゆく息の下で、最後まで冷静に沈没の経緯を記録し、部下の遺族の生活について天皇にお願ひする遺書を書き記しました。漱石はその遺書のなまなましい写真版を見て非常に感動して「文芸とヒロイック」といふ文章を書きました。自然主義の諸君は、義務と本能の二つを並べた時、圧倒的に本能の方が強いと言ふ。現にイギリスで同様の事故があつた時、乗員は争つて明り窓の下に殺到して死んでゐた。日本の場合でも同じやうな現象があるのではないかと心配したが、引き揚げてみると一人残らず持場を守つて、立派に死んでゐ

た。人間はあるときには義務の力が本能を圧倒するやうな不思議な動物なのだ。自然主義の諸君は事実を尊重するといふが、ここには義務心が本能にうちかつた事実があるではないか。これを自然主義者はどう思ふかと反論してゐるのです。

かういふ片言隻句から漱石といふ人の自然主義に対する立場が分ると思ひますが、今の歴史的教科書には、大逆事件は書いてありますが、佐久間艇長の殉職のことはどこにも書いてありません。その遺書を調べようと思つても、どこにもその資料がない。解釈をする人の主観によつて、価値のウエイトはあるかも知れませんが、明治四十三年といふ時点を生きた人の事実としては、ともに等しく歴史的事実である。その一方を大きくとり上げ、一方は全く抹殺するといふ歴史叙述の仕方には大きな問題を含んでゐるのではないでせうか。

ともあれ、明治といふ時代は、圧倒的に優勢な異質文明に対して、国民全体が全力をあげて死闘した時代であつた。その時代の象徴である明治天皇が、明治四十五年の七月になくなられます。そしてご大葬のある九月十八日に乃木大将夫妻が殉死されます。これは一人の人が死んだといふことではなく、非常に象徴的な事件だったのです。大逆事件が天皇を暗殺するといふおぞましい思想の表現であつたのと全く対照的な事件だったのです。殉死の報を聞いて鷗外は直ちに「興津弥五右衛門の遺書」といふ小説を書き上げました。大逆事件以後、鷗外は日本の国家の危機を敏感に感じとして思想的に動揺しました。しかし、乃木さんの殉死によつてびた

つと姿勢がきまつたのです。以後彼はひたすら歴史小説を書きついでゆくのですが、これは一切の価値が相対化され、功利の念だけで動いてゆく、世の中に対する鋭い批判であったわけです。漱石は大正三年に書かれた「こころ」の中で、主人公の「先生」に「明治の精神に殉死する」と言はせてゐるのは周知の通りです。殉死とはいかにも封建的のことのやうですが、殉死に価する価値を持つてゐたといふことは、考へ方によっては幸福なのです。逆説的に言ふならば、私どもの不幸は、殉死に価する価値がどこにもない時代に生きてゐるといへなくもないのです。漱石や鷗外のやうな、近代化の中で主体的な役割を演じ、ヨーロッパ文化と悪戦苦闘して血を流した人であつたからこそ、心から乃木殉死を悲しむことが出来たのでせう。

それでは、漱石や、鷗外の次の世代、明治の二代目たちは、どのやうな反応を示したでせうか。「白樺」の指導者であつた武者小路実篤は、殉死後三ヶ月後の大正元年十二月に「三井甲之君に」といふ文章を書いてゐます。その中で彼は、乃木大将の殉死は伯夷叔斉や屈原の死に比して「世界的の分子が欠けてゐる」と言ひ、又、ゴッホの自殺に比して「人類的」でないこと批判してゐます。そして「西洋思想によつて人間の本来の生命を目ざまされた人の理性はそれを讚美することを許さない」とも言つてゐます。つまりここでは乃木殉死といふ歴史的事件を判断する基準が、世界的、人類的、西洋的といふ基準で評価されてをり、新しい世代において国民的共感の世界といふものは既に失はれてをります。これが当時最も進歩的といはれた人

の思想だったのです。一体「白樺」の思想では、個人と人類は垂直に結びついてゐます。中間項である家族や国家といふものがない。家族と国家といふのは非常に重苦しい。なぜかといふと、そこにはどうしようもない責任といふものが結びついて来るからです。さういふ重苦しいものを抽象して、個人と人類を結びつける思想は、非常に論理的で、スマートで、開放的でもある。しかし、それは空漠たる楽天主思想です。古来、偉大な文化といふものは、みなある特殊の民族がつくり上げたもので、その次元の高さによって普遍性を獲得したものが、人類の文化、世界の文化になっていったのです。個人と人類を直接的に結びつける発想は、いつの時代でも流行思想の先端を濶歩しますが、民族的、国家的なものとのつながりを体験的に真に理解するところがなければ、いつまでたっても感傷的な理想主義を脱することができないのです。

「白樺」の次の時代、大正期の後半で一番中心的な役割を演じた象徴的な文学者は芥川竜之介です。彼の処女作「羅生門」には、彼の生涯の人間観が集約されてゐます。その中で、人間が生きるためには各人各様に持たざるを得ないのがエゴイズムだ。それは人間が生きてゆくための必然的な力であり、人間を動かす終局的な単位であるといふことを言つてゐるのです。芥川には自我を越える価値がないのです。漱石は晩年に則天去私といふことを言ひました。人間はどうしてかうも自我に執着する存在であらうか、何とかして自我をこえる次元はないであらうかと生涯苦しみました。さうして儒教的な「天」といふ言葉で私をこえる原理をからうじて

つかんだのだと思ひます。しかし芥川には最初から最後までエゴを越える価値はなかったのです。かうした一種の風化したエゴイズムは、大正期そのものの一つの本質であつたと思ひます。先ほど述べました抽象的な人類主義と、徹底した個人主義といふものが、大正の思想史を動かした二つの要素だと思はれます。そして、日本のインテリ層がよるべを失ひ、空虚感にさいなまれてゐる時代に、マルクス主義といふ一つの絶対的な強烈なイズムといふものが入つて来たわけです。

近代といふものは、価値の相対性を容認する時代ですから、絶対的な価値といふものは否定されてゆく。お前はお前、俺は俺だといふふうになつてゆく。漱石は「私の個人主義」の中で、個人主義といふものは非常に孤独で淋しいものだといつてゐます。さうして、青年たちが「私」をこえる価値を模索してゐる時に入つて来たのがマルクス主義である。マルクス主義はその論理的な正しさといふやうなものより、青年の精神的空虚感を埋め、私をこえる価値を求める人間の本性に訴へかけたといふ意味で非常に大きな力をふるつたと思ひます。そして、唯物史観とか唯物弁証法とかいふものが、インテリの心の中に根深く浸透してゆくのです。小林秀雄さんが『歴史と文学』の中で言及されたやうに、現代人は歴史の客観性とか必然性とかいふ言葉を覚え込んで、もっぱら冷たい眼で歴史を眺めることに熱中するやうになつてしまつた。歴史は人間がつくつてゆくものだといふ最も重大な点が無視されてしまひます。そして、歴史

といふものを社会のしくみといふやうに考へていく。有名な「存在が意識を決定する」といふマルクス主義のテーゼがありますが、人間はあくまで下部構造、つまり経済的な機構・生産手段・生産関係の生み出した受動的産物に過ぎないといふ考へ方です。だから、偉人や英雄の持つてゐる人間の意志力に対する讃嘆の念といふものはない。芥川の歴史物などによく出て来ますが、偉人や英雄の持つてゐる人間的な次元の高さを、凡人のところまで引きずりおろすといふ役目をする。かういふ考へ方が特に戦後は圧倒的になりました。一切の古い日本の歴史といふものが、いかにあしざまに、口ぎたなく罵られたことでせうか。ある人はさういふ史観のことを自虐史観と言ひましたが、教壇の上から、君たちの祖先はかくの如くつまらぬ存在であると繰り返しまき返し教へられた若い人たちが、どういふ精神状態に陥るか、もはや明白なわけです。虚無感に陥らない方がおかしい。ただ戦争中の一ころのやうに誇張された皇国史観はいけないと思ひますし、ある民族のいいところばかり選んで来て、それを恣意的につなぎ合はせるやうなものであつてはならないでせう。人間のやることですから、プラスの面もあるし、マイナスの面もあるでせう。できるだけ事実の忠実に、いいところはいい、悪いところは悪いと教へればこそ、歴史は鏡になるし、後から来る人のエネルギーにもなつてゆくのです。さういふ点で、現代の青年のアーキーな精神状態を作り出した戦後の歴史教育のあり方、とくにマルキシズムの史観によつて青年を教育した人たちの責任はまぬかれなれないと思ひます。

戦後思想との訣別

それでは、戦後の思想の脆弱性はどこに起因するでせうか。端的に言って、それは国といふこと、死といふことを人間が考へなくなった。少くとも第二義的にしか考へなくなったといふ点にあります。私たちの命といふものは有限なものであって、やがて死んでいくからこそ、国といふものが必要なのです。自分の志を托してゆくべき場、自分の有限の生命をつないでゆく永久の命としての国といふものが大事になってくるのです。人間の生命が有限であるといふ痛感がないから、国のことが思想の領域から脱落してしまふのです。一体、死を前提としない思想はすべて楽天的な虚偽の思想です。この問題を凝視し、直視した思想でなければ本当の思想ではない。この生きてゐる現世だけがすべてだ。その現世で自分の本能を満足させることが生き甲斐だ、最高の価値だといふのが、戦後二十五年の間、日本人が生きてきた平均的な生き方であったと思ひます。このやうな徹頭徹尾、この私といふもの、しかも私のこの現世の生といふものがすべてであるといふ考へ方からは、過去の時代にどういふ苦闘をして国が守られて来たかといふことも、われわれの将来にどういふ思ひを託して、この国を譲り渡していくべきかといふことも、全然念頭に浮んで来ない。「平和と民主主義」といふスローガンが風靡しましたが、非常に次元の低い、政治的なスローガンにすぎません。平和とは戦争がない状態であり

民主主義とは話し合ひといふやうな常識的な考へ方から、議會制民主主義といふやうな政治形態までもふくむ、思想とはいへないやうな実に曖昧な思想です。これが戦後のたてまへであり大義名分であつたのです。しかし、「平和と民主主義」といふスローガンに若い人たちが命を賭けることができるでせうか。賭けられないからこそ、三島さんのやうな人が出て来たのではないでせうか。三島さんは自決の直前に「革命の哲学としての陽明学」といふ文章を書かれましたが、その中で大塩平八郎の「身の死するを恨まず、心の死するを恨む」といふ言葉を引いてゐます。今の時代は、心の死んだ人々で充滿してゐる時代ではないでせうか。戦後思想は虚偽の思想であるから、若い人の心魂をゆさぶることができない。だからその虚偽に生命的に反撥する人たちが、もっと過激な、生命的なものへと動いて行つたのも当然といふ気がいたします。

さういふ意味で、国こそはわれわれの思想の原点の一つであると思ひます。最初に申しましたやうに、国とは制度や機構や権力構造や、さういふ外的な知性によって認識するだけのものではない。「内なる国家」とは、価値であり、命である。私どもの命の源であるのです。マルクス主義者は、国家の本質は国家権力であり、人民支配の道具であり、打倒すべき悪であるといひます。しかし、マルクス主義者が国家を作つてゐる国で、果して国家イコール国家権力イコール悪といふ定式が通用するでせうか。中国でかういふ言論を吐いたら、直ちに林彪の二の

舞を演ずることは明白です。今の時代に「祖国」といふ言葉を誇らかに使つてゐるのはマルクス主義者です。祖国とは「内なる国家」であり、命であり、仰ぐべき価値、献身の対象です。独ソ戦のときスターリンは「大祖国戦争」「祖国防衛戦争」といつてゐます。祖国といふ言葉を使はなければ、本当に民族といふものの力を結集することができなかつたのです。だから、マルクス主義者の国家の定義は、権力奪取のための理論武装の言葉であるとしか言へないので。林達夫氏が「共産主義的人間」といふ文章の中で、ソビエトが戦後衛星国を作つて行つた過程がフェアでない」と批判してゐます。まづ周辺の国々では、国民的な偉人や英雄を抹殺してできるだけ国家意識を稀薄にする。そして、中心のソビエトでは強烈な国家主義、ナショナリズムの立場を貫徹してゆく。世界のすべての画期的な発明はすべてロシア人の手になつたやうに歴史教科書が書かれてゐる。中心に非常に強いナショナリズムの国があつて、周辺に全く国家意識のない国があつたらどうなるか。これは物理的に周囲は衛星国になる。今の世界で一番緊張度の高い国、一番ナショナリズムの強い国は中国です。そして、世界で一番国家観念のない国は日本です。国なんてどうでもいいじゃないか。国は国民生活が便利なやうに配慮してをればいい。個人生活を保証したり、充実させたりする手段に過ぎないじゃないかといふ考へ方が圧倒的なのが日本です。よくもかういふ配列がなされたものだと感じるくらい、国家観念の違つた国が隣接してゐます。かういふ状況の中で日中復交といふやうなことを考へると憂慮

に耐へない思ひがいたします。

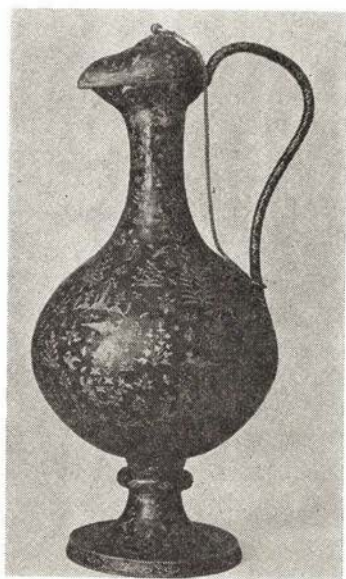
私どもは、現代における生き甲斐を求めてここに集ひ、お互に勉強してゐるのですが、昨年のこの合宿教室で、戸田義雄先生が述べられた言葉が強く印象に残つてゐます。それは「いのちあるものが、いのちあるもののために、いのちを捧げる」そこに本当の生き甲斐があるといふ言葉でした。自分の命ほどこの世でかけがへなく尊く、いとしいものはない。しかし、その命を捧げることによって本当の生き甲斐がでてくるといふ、いのちといふもののもつ不思議な矛盾を指摘されたのです。なぜかといふ説明はできない。たださういふふう人間といふものをつくられてゐるといふのです。もちろん私どもは一人一人の個人であり、私の生活、私の欲望といふものはかけがへのないほど大切です。しかし、それだけで本当の生き甲斐ができるかどうかもう一ぺん考へて頂きたい。「私」の次元に執着する限り、決して本当の生き甲斐はでて来ないであらう。それでは「私」を越える価値とは何であらう。その時、国家といふものが、全く違つた新鮮さで諸君の中に浮び上つてくるのではないだらうか。今ごろ国なんていふのは古くさい、もう世界と人類の時代だなどと言ふ人は、いかにその人が思想的に無知であるかを表白してゐるのだらうと思ひます。そんな簡単なものではありません。「祖国のために」といふ言葉が訴へかけてくるもの、これはただわれわれだけでなく、中国の青年でも、ソビエトの青年でもその言葉は魂をゆり動かさずにはおきません。なぜだらうか。それはやはり、「私」

の次元だけではどうしても解決できない、命といふものの欲求があるからだらうといふ感じがしてなりません。国とか国家とかいふとすぐ反動だ、右翼だといふ、そんな簡単な問題ではないのではないでせうか。さういふ意味でもう一度、国家といふものを徹底的に洗ひ直して欲しいと思ひます。吉田松陰先生は、『講孟余話』の中で、理想的な師弟のありやうを論じて、「必ず真に教ふべきことありて師となり、真に学ぶべきことありて師とすべし」といはれました。これから提起される重大な問題について、火花を散らして磨き合ふ学問の場を、この合宿教室の中に作り出して頂きたいと念じて、拙い導入講義を終りたいと存じます。

（福岡教育大学助教授―近代文学専攻）

マルクス主義の超克

川井修治



- 一、共産革命こそ最重大問題
- 二、自覚されない危機こそ最大の危機
- 三、マルクス主義の思想的素質
- 四、マルクス主義理論の根本的欠陥
- 五、歴史の検証に堪へないマルクス主義理論
- 六、超克への道―精神性の回復

「マルクス主義の超克」といふテーマで話をする事になってみますが、ご承知のやうにマルクス主義の体系そのものが大へん大きなもので、その説明ばかりでなく、それを批判し、更に乗り越えて行くところまでの話を一時間半でしなければならぬのですから、至難の業わざと言へませう。いきほひ重点的、ないし概括的に話を進めざるを得なくなることを御諒承ねがひます。

一、共産革命こそ最重大問題

現在の日本にとって、何が一番重大な問題であるかと言へば、私は卒直に『共産革命の問題』と申したい。物価問題や公害問題も、それなりに重大な問題であるとは思ふけれど、その処置が若干おくれたからといって、日本全体がひっくり返るほど深刻な問題ではないやうに思ひます。無論、ほったらかして置いていい、といふものではありません。しかも物価や公害を口実にして、大々的な市民運動へと煽動しようとする向きもあるのですから、これが効を奏して怨嗟の聲が巷に満ちるといふやうな状態になれば、危険なことになるのです。しかしさうな場合、それはもはや物価や公害の域を超えて、一種の反体制運動になるわけですから、前述の『共産革命の問題』の中に包含されることになります。物価や公害の問題が、政策と技術の問題として冷静に受けとめられる限り——私はそのやうに受けとめられることを切望しますが

——さう大した問題にはならない、といふのが私の見方です。これにひき替へ、共産革命の方は超重大です。

もし仮に日本に共産革命が実現したとすれば、政治体制は一党独裁制に急転し、経済構造も一転して全面的計画経済を強ひられ、思想状況もまた国定イデオロギーの強力な統制下に窒息状態に陥ってしまふでせう。これは失敗^しった、と思つても、も早とり返しがつかないのです。

何故なら、先頃のチェコなどの実例が示すやうに、一度共産体制を受け容れたならば、それから脱却することは殆んど不可能と思へる程の圧力がかかるからです。

共産治下の惨澹たる生活状況については、皆さんは言葉では知ることができても恐らく想像もできないでせう。私には幸か不幸かシベリア抑留の体験があり、その惨烈さは身にしみて解るのです。実際私達が経験した抑留生活



——ソ連の最下層の生活もほぼ同じ——は、およそ人間の生活とは言ひ難いものでした。物質上の不如意や、強制労働の苛酷さについては言ひますまい。一番辛かったのは、自分の思つてゐることを他人に話せないといふ苦痛でした。何しろ収容所の中に、G P U のスパイ網が張りめぐらされてゐるのですから、うっかり本心を漏らさうものなら、忽ちマークされてしまひます。マークされた本人については、日常の言動が逐一監視され、筆記報告され、のみならず旧軍時代のことまで根ほり葉ほり調べ上げられます。そして材料が揃つたところで例の『吊し上げ』が始まるのです。

『吊し上げ』といふ陰惨な言葉は、元来シベリア抑留者が日本へ持ち込んだ言葉なのです。皆さんは大学紛争の過程で、学長や教授達がゲバ学生に吊し上げられ、精魂尽きて屈伏してしまふ情景を目撃されたことでせう。まづあの情景を想像してもらへばいいのですが、少し異ふのは、日本では吊し上げと言ってもせいぜい一晩か二晩、やがて解放される可能性があることです。日本はいやしくも法治国ですから、ひどい状態になれば警察力で救出されるし、解放されたら家族や友人から慰めを受けることもできます。だが共産治下ではそれができない。ここでは、権力者の命令とは独立した良心の持主は、完全に孤立させられ、逃げ場のない袋小路に追ひつめられてしまふのです。いたはってくれる人など、一人もあり得ないのです。生命を永らへようと思ふならば、良心を覆ひ隠し、誇りを投げ捨てて、始終監視の目にびくびくしなが

ら生きて行かねばならない……といふのがこの国の現実です。

しかし皆さんの中には、たとへ共産革命が起つたとしても、何もソ連や中共の真似をしなくてもいいではないか、と思ふ人があるかも知れません。現に新左翼は反スタ・反毛を唱へ、自分達は独自の理想的な革命をやつて行くんだと宣伝してゐます。日共・民青もまた自主独立路線を唱へて、柔軟な革命構想を打ち出してゐます。けれども私は、さういふ理窟はまことに青臭い理窟だと思ひます。仮に日本に体制変革の革命動乱が起きた場合、その発生時点ではソ連や中共と関係がなかつたとしても、その起きた結果をソ連や中共が黙って見過ごすはずはありません。これはソ連や中共など国際共産主義の伝統的な外交政略であり、歴史の事実がこれを証明してゐます。隣の国に、一寸手を伸ばせば支配できるやうな混乱状態が出現した時に、「貴国は自主独立を標榜してゐるから、その意志を尊重して手を出さないでおきませう」と言つてくれるやうなお人好しの相手で、国際共産主義はあり得るでせうか？ソ連か中共か、或ひはその両者の分割による衛星国の運命に転落するのは、まづ必至だと思はれます。その衛星国の運命とは、昨日ここでペマ・ギャルポ君が懸命に訴へたあのチベットの惨状に似たものになることは、改めて言ふまでもないことでせう。

要するに、もし日本に共産革命が実現したと仮定した場合、日本民族は生物的には日本人であり続けるとしても、精神的にはもはや日本民族ではあり得ないやうな状態に陥つてしまふこ

とになります。何故なら、我々の民族が昔から受け継いで来た文化伝統・道義観・社会慣習などの一切が、共産イデオロギーのふるひにかけられ、革命にプラスするものだけが残されて、あとはすべて押し潰されてしまふことになるからです。これを私は敢て人間破壊だと申しますが、この人間破壊が権力の背景の下に大量に実行されるといふ状況は、想像を絶するものがあるでせう。日本にとって、これを重大と言はずして何と言ひ得ようか……と私はつくづく思ふのです。

二、自覚されない危機こそ最大の危機

もう一つ付け加へておきたいのは、この超重大の問題が一般にはそれ程重大だと認識されてゐない、といふことです。認識され、自覚されてをればこそ対策も立ちますが、自覚されてゐなければそれこそ手の打ちやうもありますまい。私はよく、特に保守系の人から「いくら何でも共産革命など起きはしませんよ。それは貴方の思ひ過ごしでせう」と言はれます。私自身、思ひ過ごしであればこれ程気楽なことはありませんが、こんな言ひ草を耳にする度に、それだからこそいよいよ重大だ、といふ感を深くさせられるばかりです。

例へばここに俵孝太郎著『裸の日本共産党』といふ本があります。この著者はあまり傾向的ではなく、まづは良識派と思へる人物で、宮本体制下の日共の現状から将来を展望した一寸面

白い本です。しかしこの著者の結論も、日共は今平和革命路線をとって党勢拡張、特に国会の議席増に腐心してゐるけれども、彼らが豪語するやうに七〇年代にたとへ連合政権の形にせよ政権をとることは困難であらう、といふことになってゐます。残る方法は暴力革命だけでも宮本体制下の日共は次第に前衛党的性格を失つて大衆政党化して来てゐるから、そんな乱暴なことはまずやらないであらうし、またまかり間違つて政権が転げ込んで来たとしても、せいぜい現憲法下に若干の社会化を進めて行く程度であらうと判定してゐます。

私はこの本を、昭和四十七年現在における一つの判定として興味深く読みました。しかしこの多分に楽観的な結論が将来に亘つても有効であるか、どうかには、疑問を抱かざるを得ません。私は職業柄、いささか西洋の革命史を研究してゐますが、例へばロシア革命史に見られるボルシェヴィキの変幻自在の戦略戦術を見ると、とてもこんな平板な観測では共産主義者の本質を捉へることは覚束ない、といふ気がしてなりません。例へばレーニンドレーニンは一九〇七年以後、合法路線と非合法路線の使ひわけといふことを喧しく言つてゐます。つまり国会を通じての合法的・平和革命路線の推進に力をいれるのは勿論だが、同時に非合法・暴力革命の準備を決して怠つてはならぬといふ方針で、このどちらかに傾かうとする同志をきびしく叱責してゐるのです。言つてみれば、平和革命路線で大衆を引きつけ、広く不満を煽り立てて混乱を惹き起こし、程よい条件が熟したら、一挙に本命たる暴力革命方式に切り換へるといふ戦略で、しかも

それを文字通り実行し、そして成功したのです。かういふ歴史的事実にかんがみると、宮本委員長がどう考へてゐるか知りませんが、いやしくも日共がマルクス・レーニン主義を旗印とする限り、このレーニンの成功の教訓に学ばないはずはない、としか思へません。状況いかんで巧な変貌ぶりを示すのは、マ・レ主義者のお家芸で、これを計算に入れてかからないと、とんでもない見当違ひをすることになりませう。

今の日本の現状を見ると、政界・官界・財界などでは共産勢力はまだ弱いと言へます。しかしマスコミ・教育界・労働組合等に目を転ずると、かなり共産勢力が優勢であると見られます。人数からすればさ程ではないとしても、大学紛争で皆さんも経験されたやうに、組織と資金をもった狂信的分子の団は、多勢の無関心者をわけなく圧倒することができます。要するに政財官界など現在の日本を指導する部門ではまだしもであるが、マスコミ・教育・組合そして各種の市民運動といった将来に影響を持つ部門では、容共勢力の方がはるかに強いのが実状です。そして彼らの逸脱の歯止めとなるべき司法界が、既にガタガタです。このやうに見て来ると、現在とはも角として、将来における共産主義浸透の度合は、強まるとしても弱まりはすまいと見られます。そしてこの事が、前述の共産革命の重大さを一段と倍加するものであることは、言ふまでもありません。

三、マルクス主義の思想的素質

マルクス主義がいかに残酷非道のものであるかは、かの連合赤軍のリンチ事件やロード空港の乱射事件が遺憾なく示してゐます。これら一連の事件は、マルクス主義の正体、その思想的素質をはしくも白日の下に曝したといふ点で、まさに教訓的であるとさへ言ふことができま

す。ところが一部のマスコミ（特に日共系）は、これが追ひつめられた者の異常心理であるとか、新しいタイプのアナーキズムである（法政大学の中村総長の如き）とか言つて、ことさらマルクス主義とは縁のない出来事のやうに言ひふらしてゐますが、これは全くをかしたことで

す。大学紛争を経験された諸君には自明のことなのでせうが、他人を殴ったり傷つけたり、場合によっては死に至らしめたりすることは、何も連合赤軍に限ったことではなく、中核でも革

マルでも、いや日共・民青だってやつてゐることなのです。ついこの間私の鹿児島大学でも、民青の方が革マルを包圍して殴りつけ、革マルの一人が脾臓破裂の重傷を蒙るといふ事件が起

きました。平素は「学内民主化・暴力反対」を旗印にして、いかにも良識派のやうな顔をして

ゐながら、自分達が優勢だと知ると俄然相手に襲ひかかるのが、小ずるい民青の常套的なやり

口です。しかも相手に一生片輪になるやうな重傷を与へておきながら、あれは「正当防衛」だ

つたとぬけぬけと宣伝するのが、彼らの欺瞞性をよく現はしてゐます。日共の宮本委員長は、

戦前同志をリンチして殺した下手人の一人ですが、今もって相手がリンチで死んだのではなくて「ショック死」したのだ、などと強弁してゐるのは、これと軌を一にしてゐると言へませう。

要するに、このやうな兇暴な行為を繰返して恥ぢない連合赤軍—新左翼—日共・民青に、共通する思想的基盤は何かと言へば、重点の置き方に多少の差異こそあれ、つまるところは共産主義（＝マルクス主義）なのです。連合赤軍にしてからが、元来は日共の黨員であつた連中が主軸をなしてをり、この間彼らが裁判所に提出した上告文を見ても、いささかも自分達がマ・レ主義の正統を受けつぐ者であるといふ信念を変へてはるません。彼らは決してマ・レ主義を逸脱したのではなく、むしろマ・レ主義に忠実であつたからこそ、あのやうな残虐行為を敢てしたのだと言ふことができます。これを逆に言へば、実はマ・レ主義といふイズムそのものに、人間をあのやうな非道な行為に赴かしめる素因がひそんでゐるのであつて、この点が重要だと思ふのです。

マルクス主義者達は、「人間の解放」とか「搾取の廃絶」とか、いかにも人道主義的な観念で自分達のイズムを粉飾するのが常です。しかしこれらの観念は、地上に共産主義体制が完成されたあかつきに初めて実現されるスローガンで、遠い未来のことに属します。共産体制をもたらずまでは、階級闘争を闘ひとほさねばならないわけで、およそこんな人道主義的観念は無

用のものになります。共産革命達成までのマルクス主義者の思考ならびに行動を特徴づけるものは、①現世に対するあくなき憎悪、②自分以外の改革理論を蔑む傲慢な独善、③階級敵に対する仮借ない闘争、④徹底した暴力信仰、⑤道徳や愛情に対する非情な拒絶……で、しかもその実行方法について言ふならば、往々にして欺瞞や偽装をこととするマキャベリズムの信奉者でさへあります。このやうに言ふと、皆さんの中には、私がマルクス主義をあまりにも悪者のやうに言ふ、と反撥される人があるかも知れません。しかし私は、少くとも前述の諸点については充分の典拠文献を示して証明できる自信があります。時間さへあれば……。だがそんな事をしなくても、実際に始祖マルクス（彼の憎悪と独善にみちた文章や傲岸な対人関係は周知のこと）以下、レーニン・スターリン・毛沢東・カストロなど、名だたるマルクス主義の指導者達の行なつて来た事実——これならば皆さんも大体ご存知であらう——を見るならば、今マルクス主義の思想的素質として挙げたことが、いかに明白な事実上の結果を伴つて現はれたかを承認しないわけには行かないでせう。彼ら共産主義の指導者達が、革命達成と権力維持のためには流血も犯罪も、独裁も虐殺も辞さない、悪魔的狂信の持主であり、現実は何百万何千万の無辜の国民を、そして屢々同志先輩をさへ肅清の非命に追いやったことは、かくれもない事実ではありませんか。これに較べれば、赤軍派の行為などはほんの序の口に過ぎませんが、事柄としては小さくとも、やはり共通した思想的素質の上に立ってゐるのは争へない、と思ふのです。

日本が直面してゐる共産革命の危機は、今のところこの序の口程度のものが相手です。と言つて油断は禁物です。これに対する警戒心を失なひ、現体制に対する不平不満ばかりを言ひ立ててゐる中に、序の口はいつしか巨怪にまで成長して行くでせう。これが社会の混乱に乗じて一度政權を握ったならば、それこそ恐るべき事態に立ち至るでせう。共産主義の犠牲者は、共産主義者が政權を握る前よりも、握った後の方が何百倍何千倍も多いのは、史実の示すとほりなのですから……。いかに相手は小さくても、彼らのマルクス主義者としての根本的な素質が変らない限り、この恐れを打ち消すことはできないと思はれます。

四、マルクス主義理論の根本的欠陥

マルクス主義の体系の中には、哲学から経済学、或ひは階級対立を中心に置く社会学や階級革命遂行のための政治学に至るまで、さまざまの分野が含まれてゐますが、その土台をなしてゐるのは独特の歴史観、つまり唯物史観であることは周知の事実です。私の見解では、この基礎理論たる唯物史観に歪みがあるから、マルクス主義の体系全体に狂ひが来てゐると思ふのです。この唯物史観の理論的欠陥については、既に拙著『歴史と人生観』（国文研叢書No.9）に一通りことを解説してゐますので、詳しくはそれを見てほしいのですが、ここではそのいろいろな欠陥の中で最も重大であると思はれる一点について、説明することにしませう。

それは端的に言へば、人間の歴史を物質によつて構成されたもの、従つて物質の運動法則によつて必然的に律せられるものと見做すこと、逆に言へば、人間には人間としての独立した正当な場を与へられず、単に物質に従属するものとしての地位しか与へられない、といふことに尽きます。大体マルクス主義は、十八世紀の啓蒙思想の末流たるにふさはしく、やたらに理論化といふことを重んじ、理論構成において自らが優れてゐることを誇りにしてゐます。しかし理論化といふ方法には、どうしても抽象化と必然論化が伴ひます。つまり複雑多岐な歴史事象を論理的に整合配列するためには、どうしても事象そのものを抽象化し、共通項に集約し、共通項以外のものを捨象するといふ知的作業が行なはねばなりません。その際、人間の精神のやうな眼に見えない不確定のものは何とも抜ひ難い。それよりも眼に見える物質の方が、はるかに基本概念として捉へ易い。だから精神などは物質の反映として処理した方が、理論的にはよりすつきりしたことになる。しかも物質といふものは、必然的な運動法則に従つて運動する（自然科学がそれを探求する）ものであるから、因果関係を設立しさえすれば、物質の変化発展を予測することができる。かうして物質を歴史の基本概念として定立すれば、人間の歴史は非常に単純明快となり、その未来さへも見通すことができる。歴史の理論化はかくして全きものとなる、といふわけでせう。

だから唯物史観の文献に目を触れる人は、マルクスが、人間の意志ではどうにもならない社

会関係（Ⅱ生産関係：基本的には物質的生産力によって規定される）を受け容れねばならないと強調する箇所にとりかかるといふのでせう。或ひはまた『資本論第一巻序文』の中では「個々の人は経済的範疇を人格化した者としてのみ……本書では問題にされる」と麗々しく揚言してあります。これによってみれば、マルクスにとつては、人間とは経済的事情の人格化したもの、言ひ換へれば経済の変形物と捉へられてゐることになります。資本家とは人間の形をした資本であり、労働者とは人間の形をした労働力といふことになるのです。数量経済学の分野でならば、このやうな抽象化が方法的に許されるかも知れませんが、人間活動全体を取扱ふ歴史学の分野において、こんな馬鹿馬鹿しい『人間の物化』が許されないことは、誰にも解る道理でせう。この『人間の物化』は、マルクス主義が唯物論の立場に立つ限り免れ難い制約なのであって、この出発点からの歪みが理論全体を救ひ難い程硬直した、融通のきかないものにしてしまったことを、先づもって強調しておきたいと思ひます。

このやうな理論的立場に立つて、マルクスは彼の生きた時代（Ⅱ古典的資本主義の時代）とその将来を、次のやうに把握したのです。年代は十九世紀の半ば頃、産業革命の波がイギリスから大陸諸国へ滔々と押寄せてくる頃です。その結果、一方では大資本を擁するブルジョアジーが大工場をどんどん建てて行く。他方ではこれらの工場に生活の依拠を求め、苛酷な労働と劣悪な生活条件下に呻吟するプロレタリアートの大群が発生する。ラビの家系にふさはしく、抽

象的思考の名人マルクスは、この状態を一定の物質生活のメカニズム、人間の意志によって左右され得ない必然的な社会関係（Ⅱ生産関係）として捉へました。そしてこのメカニズムは基本的に物質的、それ故必然的なものですから、人間の力で変形したり後戻りさせたりするのは絶対に不可能で、拡大発展の一途を辿るのみ、それにつれて階級対立はいよいよ深刻化して行くのみ……とされます。特にひどいのは労働者の状態で「窮乏、隸属、無知、獸化、墮落」（資本論）が一般化する。かくして極点に達した社会は、弁証法の論理に則って一転して否定の否定を生み出す。つまり追ひつめられた労働者階級はどん底から立ち上って一挙に革命を断行し、資本主義の息の根をとめる……。これが所謂貧窮革命説としてマルクスの脳裡に描かれた歴史発展のスケッチであつたのです。その際、人間の歴史を物質生活の必然性において捉へるといふ大前提が正しいとする限り、この理論的帰結はまことに首尾一貫してゐる、と言ふことができません。

五、歴史の検証に堪へないマルクス主義理論

だがしかし、歴史学上の真理とは、自然科学のそれとは違つて、実証性そのものにあります。自然科学では合理性・理論性が身上とされますが、現実を扱ふ歴史学においては、いかに理論的に首尾一貫してゐても、歴史の事実と合致し、史実による検証に堪へるものでなければ

正しいとは言へないのです。それではこのマルクス主義の理論的帰結は、果してその後の歴史発展の事実によってきちんと実証された、と言へるでせうか？ 残念ながらその後の歴史の現実には、この正しいはずの理論的帰結を見事に覆へしてしまつた、と言ふほかはありません。

どうでせう。資本主義の進展と共に、労働者階級はいよいよ「窮乏・隷属……」状態に陥つて行つたでせうか？ 誰が見てもさうではありませんね。実質所得は漸次上昇し、労働組合の法的承認により地位は向上し、「無知・獣化」などの用語はもはや現代の労働者には無縁のことになつてしまつたでせう。同様にどん底から立ち上つて、成功するのが必然だとされた階級革命（Ⅱ社会主義革命）も、先進諸国のどこにも実現を見てをらず、却つて国家の手による社会政策や福祉政策の実施が、資本主義の持つてゐる欠陥の多くを解消してしまつたではないでせうか。反対に社会主義革命が起つたのはいづれも、理論上起るはずがないとされた後進国に限られてゐますし、そこで実現された社会主義社会とやらも、「人間の解放」や「搾取の廃絶」とはおよそ程遠い現状にあるではありませんか。結論的に言へば、歴史は人為の理論の「必然性」などでは到底捕捉できない不可測の展開を示すことが、ここに証明されたと言ふことができませう。

それではこの見込違ひの生じたのは、一体何故でせうか？ それは一言にして言ふならば、共産主義の基礎理論たる唯物史観が人間の側からする改革可能性、換言すれば人間固有の英知と

努力の有効性に目を塞ぎ、これを歴史展開の重要な要因の一つに取り入れることをことさら排除した、といふことに尽きます。実際十九世紀後半以来のヨーロッパ各国の歴史を見てみますと、所謂古典的資本主義のもたらした社会悪、例へば階級隔差・富の偏在・労働者の苦境・恐慌・失業等々——これを明確に指摘したといふ点で、マルクスの業績は充分認めることができますが——を克服するために、多くの人道主義者や宗教家や愛国的政治家が懸命に努力した跡が見受けられます。これを実行に移したのが人道主義的政治家グラッドストーンであり、国民主義的政治家ビスマルク（彼の背後には、ワグナーやシュモラー等社会政策学会の力が陰然として動いてゐます）であり、更にこのやうなやり方が典型的に現はれたのが次の世紀のニュー・ディール政策であつたのです。かうして人間は、その本有的な理性や愛情や協力によって社会環境を是正し改革する（＝所謂資本主義の修正）能力のあること——勿論、一挙にはなく時間をかけて徐々にではあります——を、歴史は遺憾なく証明してゐるのです。

唯物論の立場に固執することによって、自らの視野を狭めてしまつたマルクス主義は、つひに人間の理性や愛情や、そして意志や行動の持つ役割を歴史認識の中にとり入れるすべを知らなかつたのです。すべてを物質の運動法則、つまり自然科学的因果關係に隷属させてしまつて恰も目覆をされた馬車馬のやうに、唯物論的必然性だけしか見ようとしなかつたのです。かうした人間の精神性に対する無理解と蔑視が、マルクス主義理論の難破といふ応報を受けること

になったのも、また当然であると言ふことができませう。

六、超克への道——精神性の回復

マルクス主義の超克と言ふからには、マルクス主義に負けないやうな尠大な理論体系を創るべきである、といふ人があるかも知れません。でなければ、ものは言へないではないか……と。しかし私はさうは思ひません。無論、さうすることが無意味であるとは申しませんが、ただ理論体系を創り上げ、理想社会の構想を描いてみるだけで、『超克』ができるとは思はないからです。要は我々が、いや私自身が日々の生の体験の中で、マルクス主義理論の呪縛を解き放つて行くことが大切なのです。そのための第一歩が、マルクス主義理論から不当にも除外された『精神性の回復』である、と申したいのです。精神性をおき忘れたところに、つまり人間本来の理性や愛情に目を閉ざしてしまったところに、かの赤軍派の狂気が発生したのですし、その狂気が拡大蔓延して日本全体をおし包み、共産革命への途を開かうとしてゐるではありませんか。

精神性の回復とは、単なる言葉や概念思弁によつて達成されるものではありません。先に何か絶対無謬の巨大理論が^{グラント・セオリ}あって、それに他律的に自分の思考や行動をはめ込む……といったやうなことで果されるものではありません。「論語読みの論語知らず」では駄目なのです。さうで

はなくて、先づ人間が本来具有してゐる情意を心の中に確認し、その上に自らの生を創造して行くこと、これなのです。皆さん、こころみに胸に手をあてて、自分の心の声を、自分の心の中に湧き動きつつある自然の情意を、探り求めてみて下さい。ソクラテスは、人間には疑つても疑ひ切れない「良心」があると云ひました。釈尊は「一切衆生は仏性を有す」と言ひました。我々の心の中にも、個我や欲望にのみ執着しないで、誠実に、潔白に生きたいといふ気持ち、脈々として生動してゐるではありませんか。ソクラテスの「良心」に、釈尊の「仏性」に通ふものが、我々が虚心に心の中を覗きみる時、確認されはしませんか。この心の中に湧いて尽きない瑞々しい情意をこそ指針として、真摯に清純に日々を生きること、これこそが文字通りの精神性の回復の実内容であるのです。

我々が真摯に誠実に心魂を傾けつくすべき対象は、ある場合には家族であり、友人先輩であるでせう。けれどもその範囲をこの種の身近なものにだけ限つてしまつてはなりません。ある場合には、それは歴史と伝統につつまれた民族共同体Ⅱ祖国日本でありませうし、間接的には世界人類全体にも向けられるべきでせう。いや、そればかりではなく、山川草木すべての自然物ですら、その対象に組み入れられるべきだ、と私は考へます。要するに、自分自身を生かして、めてくれる一切の万物に対し、これをいとほしみいつくしみ、感恩と奉仕の真情を胸の裡によびおこすこと、これなのです。そしてできるならば自分の周囲にも、このやうな和らぎの世界

を拵げて行くことなのです。マルクス主義のアキレス腱は、先程から繰返し言つてゐるやうにこの精神性への無知なのであり、この精神性をさへ我々の内心に体験的に確認され得たならば超克の第一歩が既に踏み出されたといふことになりませう。次は第二歩、第三歩なので、この段階では概念理論や統計数学も、場合場合に依じて道具として駆使されることになりませう。唯大切なことは、第一歩で確認された瑞々しい情意を、全過程に通じて一貫させることで、道具にふり廻されて初一念を見失つてはならぬ、といふことです。

さて、現在のあまりにも知識に偏した大学生活は、いつしか我々の瑞々しい情意を枯渇させてしまつてゐるやうです。何しろ棒で殴り合ふのが日常茶飯事で、さういう事態を当局は手を束ねて傍観してゐる……これではまともな人間社会とは言へませう。のみならずエゴ万能、享楽至上の風潮が滔々として流をなし、不真面目な氣風を漂はせてゐます。鹿大信和会の学生諸君から聞くとところによると、学生同士の間で少し真面目な話を持ち出さうとすると、「そんなにブルな」とか「キザじゃないか」とか、てんで受けつけないやうな雰囲気があるさうですね。学問の府もここに至れば退廃きはまれり、と長嘆せざるを得ません。しかし、このやうな周囲に圧倒されて、もし皆さんが自分の心を立て直す努力を、先程来申しました瑞々しい情意の回復への努力を怠つたとすれば、冷やかなマルクス主義の必然論が世の中を制圧することになりませう。そしてその事が、共産革命への近道を開くことにもなりませう。私が最後に申し

たいのは、皆さんが今日只今からあのやうな冷酷無残な憎しみを心情的基礎とするマルクス主義理論から訣別し、もっと暖かな人間らしい思想と体験を求めようといふ気をおこして下さること、これに尽きます。レジメに「発憤して立つべき時は、現在只今を措いてほかにない」と書いたのは、そのことなのです。

(鹿兒島大学教授—西洋史専攻)

人間本来の心を取り戻さう

小田村 寅二郎



はじめに

松陰先生の外交論

——「対策一道」——

歴代天皇のみ歌について

をはりに

正倉院・密陀絵小箱

はじめに

ここにかけました「人間本来の心を取り戻さう」といふ題の意味でありませんが、「人間本来の心」とは、動物とは別な、人間としての誇りといふやうなものも当然含みますけれども、実はそれだけではありません。一体人間の中に隠されてゐるたくさんさんのいいところ、強いところ、あるひはもっと広やかなところ、さういふものは心の持ち方一つによって生き生きと蘇り、動き出してくるものだと思はれてをりますが、そのやうな生き／＼した心を蘇らせよう、さういふ意味もこめてこの題をつけました。従つてもし皆様がたが、今日まで自分自身を妙に固苦しく考へ、心を閉ざしたやうな雰囲気の中で日々を送つてゐらっしゃつたとすれば、それは人間と生れて非常に残念なことだと思ひますし、さういふ方々にとって何らかのお役に立つことができればうれしい、さういふ意味でこの題をつけた次第です。

松陰先生の外交論——「対策一道」——

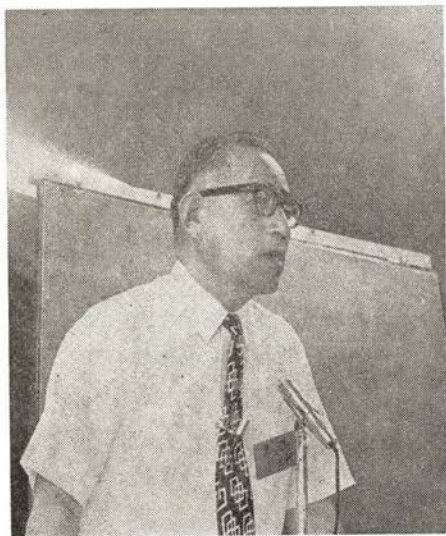
さて、この合宿でこれまで一番たくさん出た問題はマスコミの問題と、日中正常化の問題でした。現在マスコミの意識的な報道の仕方はまことに目にあまるものがありますが、日中正常化に関するマスコミの問題に一言ふれておきたいと思ひます。お持ちいただきました今年八月

の月刊「国民同胞」の巻頭言のところ、私は標題に次のやうに書いておきました。「報道用語を勝手に造り変へそれを流行させることによって読者、視聴者のものの考へ方を一方的に誘導する『意識的なやり方』について、新聞・放送・諸言論機関に猛省を促したい」といふのはマスコミでは、使つてゐる言葉を勝手に変へてしまふのです。さうして自然に読者がその編集者たちの考へ方になじんでゆくやうに導いてゆく。たとへば北京の政府をそれまで中共または北京政府と呼んでゐたのを、数年前のお正月からNHKが中国と呼ぶことに踏み切るのですね。それから全部中国といふやうになつて、その次に「二つの中国」といふ言葉がわれわれの前に提示されてくる。さらに今日になつてみると、「日華平和条約」がいつのまにか「日台条約」となり、日本と台湾との間の条約といふ、在りもしない条約の名称が公然として流布されてゐるのです。なぜそんなことをするかと言へば「日華条約」を過少評価する雰囲気を作るためなのです。すなはちこの条約を日本と中国ではなく、日本と台湾との条約であるやうに扱つてしまへば、部分的な条約のやうな感じを国民が持つであらうといふマスコミの人達の意図によつて、こゝにいふ言葉が流行させられつつあるわけです。

このやうないい加減なマスコミの報道を前にして、それに惑はされることなく正確に国と国との関係といふ問題にとりくむにはどうしたらいいか。とりわけ現在日中問題についてのわれわれの関心事は、日本の国が初めてつき合ひを開始する外国との間はどんなふうになつてい

たらしいかといふことに集まってゐる。そこで、その問題にも深く関連があり、現在自分がおかれてゐる立場を考へるのに役立つさうなものは何だらうかと考へて、吉田松陰の「対策一道」といふ文章を読んでみることにしました。

話にはいる前に、これはどういふ文章なのかを先きにお話しておきます。吉田松陰は、アメリカの黒船に乗らうとして捕まり、江戸に送られた後、山口県の毛利藩の城下である萩の野山獄といふ獄に入れられ、しばらくして獄を出されて蟄居を命ぜられますが、その間に「戊午幽室文稿」といふのがあります。戊午といふのは安政五年、一八五八年、明治維新からちやうど一〇年前の時点ですが、この時に幕府はアメリカの脅しに屈して和親条約を結んでしまふ。それで京都の孝明天皇並びに全国の心ある人々は、さういふ屈辱的な条約を結んではだめだ



と考へ、さらには天皇のお許しを得ないで外国と条約を結ぶことは道を踏み違へてゐるといふことで喧喧囂囂とした意見がおこる。その時に吉田松陰は自分ばかり考へるといふ文章―「対策一道」―を書いて、毛利の殿様に出すのです。これを読んでゆきますと、ちやうど今日本が中共と条約を結ばう、あるいは国交を開始しようとしてゐる問題にかなり類似したケースがこの中にうかがはれるのです。

…今墨夷は相を置き市を縦にせんと欲す。蓋し相を置くは吾が国を馭する所以なり、市を縦にするは吾が民を誘ふ所以なり。又天主堂を立てて吾が国の妖禁を除き、及び商館を建て吾が民を備ひて之れを用ひんと欲す。其の、国を馭し民を誘ふことを為すや甚し。夷謀此くの如し、而して幕府は方且に和を講じて謀と為す。其れ果して雄略を資くるか、抑々苟も戦を免かれんとするか。戦を畏れて和を講ずる、是れ、聖天子の軫念したまふ所以なり。一旦幕問吾が公に及ばば、吾が公宜しく答言したまふべし。「天勅は奉ぜざるべからず、墨夷は絶たざるべからず」と。是くの如きのみ。幕問必ず重ねて及びて曰はむ。「天勅は固より奉ぜざるべからず。然れども向に已に墨夷と条約せり、今何の辞もて之れを絶たんや」と。吾が公之れに答へたまふこと易々たるのみ。

「墨夷」の「墨」はアメリカの意味です。「相」は総領事などの代表者を日本の領土の中に置くこと。「市」といふのは貿易、商売のことで日本に代表の役人を駐在させて、日本人々と物の売買をやるといふことです。「蓋し」、思ふに「相を置く」のは日本の国を思ふとほりに動かさうとするためだ。貿易や商売をしようとするのは、「吾が民を誘ふ所以なり」、日本人の好奇の目を自分達に向けさせようといふことだ。「又天主堂を立てて吾が国の妖禁を除き」といふのは、キリスト教を禁じてゐるのを解かせるために教会を建ててゆくといふことです。「及び商館を建て吾が民を備ひて之を用ひんと欲す」、さらにいはゆる領事館みたいなものを建て、日本人を備って使ふ。「其の国を馭し民を誘ふことを為すや甚し」さういふ意味で日本の国を虎視眈眈と狙つてゐるのが見えすいてゐる。「夷謀此くの如し」アメリカの魂胆はこのやうなものだ。「而して幕府は和を講じて謀と為す」ところがさういう積極的な外交攻勢をかけてきてゐるアメリカに対して、幕府は平和な態度をもつて、和親条約を結ぼうとしてゐる。それを吉田松陰は指摘するのです。

「其れ果して雄略を資くるか、抑々苟も戦を免がれんとするか」、一体幕府がやってゐることは、日本が独立の精神をもつて、諸外国と対等につきあつてゆかうとする雄々しい姿勢を助けようとしてゐるのか。アメリカがこはいから屈辱的に条約を結ぼうとしてゐるのか、どっちなのかといふことを松陰先生は問ひかけてゐるのです。

「雄略を資」けるといふならそれでいい。しかしもしも「戦を畏れて和を講ずる」といふやうなことであればそれは現在孝明天皇が最も心配してをられることだ。切羽詰った幕府はどのやうな方策をとったらいいのか、わが主君毛利公に下問して来るかもしれない。その時は公は次のやうにお答へになるがいい。「天勅は奉ぜざるべからず、墨夷は絶たざるべからず」、さうすると幕府は必ず重ねて下問するであらう、「天勅は固より奉じなければいけない。しかしわれわれは向に己に墨夷と条約を結んでしまつてゐる。今さら何と言つて之れと絶つことができようか」と。これに対して藩公がお答へになるのはいとも簡単なことだ。

今墨夷の禍心は洞とうとして火を覩みるが如し。然れども其の辞には乃すなはち曰く、「統領は日本の為めに謀はかるのみ、統領自ら為めにするには非ざるなり。使臣は日本の為おもに慮んばるのみ、使臣自ら為おもにするには非ざるなり」と。吾れ従つて之れが答辭を為して曰く、「大統領は吾が國の為おもに謀ること深し、貴使臣は吾が國の為おもに慮ること厚し、吾れ固より其の辱じよくを拜す。但だ吾が國は三千年來未だ曾て人の為おもに屈を受けず、宇内うないに稱して独立不羈の國と為す。今貴國の命を受くれば乃ち其の臣屬となり、今貴國の教を奉ずれば乃ち其の弟子となること勢や已むを得ざるなり。三千年獨立不羈の國、一旦降りて人の臣屬弟子となる、豈に大統領・貴使臣、人の為おもに謀慮するの意ならんや。果して吾が為おもに謀慮せば、願はくは引き去り

吾れの往きて答ふるを待て。

アメリカが日本を狙つてゐる心は「洞として」、はっきりして火を見るやうなものだ、「然れどもその辞には乃ち曰く」ところが表向きに言ふには、「統領は日本の為に謀るのみ、統領自ら為めにするには非ざるなり。使臣は日本の為に慮るのみ、使臣自らの為にするには非ざるなり」、アメリカの大統領はアメリカのためになど考へてはゐない、日本のためを思つてゐるのだ。日本に常駐するハリスその他の人達も日本のために心を砕いてくれてゐるのだ、領事達自らのためにしてゐるのではないと、表向きには言つてくる。「吾れ従つて之れが答辭を為して曰く」、よしそれなら我輩はそれに対して答へよう。自分だったらアメリカに対してかう答へる、と松陰先生は次のやうに言はれるのです。「大統領は吾が国の為に謀ること深し、貴使臣は吾が国の為に謀ること厚し、吾れ固より其の辱を拝す。」大統領は日本のために大變心配して下さるのださうそうですね。あなたのお使ひの人達も日本の国のために大變厚く考へて下さるさうだ。それはまことに、かたじけない。「但だ」、そこから以下が、松陰先生が自分の考へを述べられる部分です。内容をざつと申しますと、日本の国は三千年来いまだかつて、「人の為に屈を受けず」、外国に屈服したことはない。「宇内」というのは世界です。世界に向つて日本は完全に独立した国なのだ。その国が「一旦降りて、人の臣屬弟子となる」、「人」といふのは、

この場合アメリカですが、その家来になるやうになつてしまへば「豈に大統領・貴使臣、人の為に謀慮するの意ならんや」、大統領やあなたのお使ひの人達が、日本のために深く慮つて下さるといふ御氣持にそむくことになるではないか。「果して吾が為に謀慮せば」、ほんたうに日本のために考へてくれてゐるといふなら、「願はくは引き去り、吾れの往きて答ふるを待て」、どうかこのところは引き退つてくれ、日本のはうから出かけていって条約を結ぶ準備をするから、それまで待ちなさいといふことです。

近日の約はこれを天子に奏せしに、天子震怒したまひ、これを四国に敷きしに、四国憤懣して兪謂へらく、貴国は人の為めに謀慮する者に非ず、甘言美辞もて人を陥穽に陥れんとする者なりと。吾れ貴国の為めに謀慮す、去らざれば禍將に及ばんとす」と。是くの如くにして去らざれば、其の禍心已に著はる、名を正し罪を責めて、宇内に暴白すとも、其れ孰れか然らずと謂はん。然れども墨夷猶ほ謂はん、「吾れ宇内を合せて之れを同じうせんと欲す、貴国独り梗ぎて従はざれば兵を尋ひざるを得ず」と。吾れ之れに對へて曰く、「方今未だ貴国に同ぜざる者、特に吾が国のみに非ず。今汝と約せん、亞細亞諸国盡く貴国に同じて、而も吾れ未だ答ふる所あらざれば、吾れ甘んじて其の曲を受けん。諸国にして未だ同ぜざれば

吾れの同ぜざる、何ぞ独り梗と為さんと」と。辞命是くの如くならば、墨夷は退かざるを得ず。退かずんば之れを擒にし之れを誅すとも、吾れ皆名あり。苟も吾れ名あらば、戦ふに於て何かあらん。

「近日の約は」、つい最近、幕府がアメリカと約束をしてしまった和親条約は、幕府が孝明天皇に申し上げたところ、天皇は、「震怒したまひ」、「これを四国に敷きしに」、日本中の諸大名に知らせたところ、「四国憤懣してみな謂へらく」、日本中の大名達も怒って言ふには、「貴国は人の為に謀慮する者に非ず、甘言美辞もて人を陥穽に陥れんとする者なりと」、「アメリカのやり方は日本のために慮ってくれてゐるのではなくて、うまいことを言つて、きれいな言葉を並べて陥れようとしてゐるのだ。「吾れ貴国のために謀慮す」。そこで吉田松陰が言ふには、今度は自分がアメリカに対して申し上げたい。「去らざれば禍將に及ばんとす。」かういふうまいことを言つて、そして実際にごまかしてゆくやうなことをすれば、大変なことになるまいよ。早く帰りなさい。「是くの如くして去らざれば、」かういふふうにやってもなほアメリカが去らなかつたならば、「其の禍心已に著はる」もう腹の中は見えずいてゐるではないか。さうなれば、「名を正し罪を責めて宇内に暴白すとも、其れ孰れか然らずと謂はん。」正しいはうはどちらにあるかを明らかにするといふのを「名を正す」といひます。さうなれば正しいのは日

本だといふことを明らかにすることは出来るし、アメリカの罪を責めて、世界中にはつきり知らせるやうにしても、「其孰れか然らずと謂はん」、どこの国だつて日本のはうが筋がとほつてゐるときつと言つてくるに違ひない。「然れども墨夷猶ほ謂はん。」ところがアメリカもさう簡単に引下るはずはない。今後はかう言つてくるだらう。「吾れ宇内を合せて之れを同じうせんと欲す。」アメリカの本心がそこで暴露してくるわけです。アメリカは世界中を自分の国に併呑しようとしてゐるのだ。「貴国独り梗ぎて従はざれば兵を尋ひざるを得ず」、日本だけが頑固なことを言つて自分の言ふことを聞かなければ、武力を持つて弾圧するぞ、ときつとかう言つてくる。「吾れ之れに對へて曰く」、そう嚇かされた時には今度はこつちはかう言つてやる、「方今未だ貴国に同ぜざる者、特に吾が國のみに非ず。今汝と約せん、亞細亞諸國、盡く貴國に同じて而も吾れ未だ答ふる所あらざれば、吾れ甘んじて其の曲を受けん。諸國にして未だ同ぜざれば、吾れの同ぜざる何ぞ独り梗と為さん。」この意味はかういふことです。あなただの國の言ふことを聞かない國はまだたくさんあるはずだ。日本だけではないだらう。だから約束しよう。アジアの諸國が日本を除いて全部アメリカの言ふことを聞くやうになつたなら、その時は曲つた言ひ分でもうけてやらう。ところが、アジアの諸國が一国でもアメリカの言ふことを聞かないである間は、日本だけが一人頑固だといふことになりはしないではないか。「辞令是くの如くならば、墨夷は退かざるを得ず。退かずんば之れを擒にして之を誅すとも、吾れ皆

名あり。苟も吾れ名あらば戦ふに於て何かあらん。」さういふふうに言つてなほかつアメリカが引き退らなければ、これを討伐しても日本のやつてゐる立場のはうが正しいといふ大義名分が立つはずだ。大義名分が立つならば、「戦ふに於て何かあらん。」アメリカが武力をもつて攻めて来てもきつと助けてくれるものもあらうし、日本人だつておめおめアメリカの言ふことで屈服するやうなことはない。かういふことなのです。

然りと雖も、空言は遂に以て驕虜を懲すべからず。宜しく今日より策を決し、上は祖宗の遺法に遵ひ、下は徳川の旧軌を尋ね、遠謀雄略を以て事と為すべし。凡そ皇国の士民たる者、公武に拘らず、貴賤を問はず、推薦拔擢して軍帥船司と為し、大艦を打造して、船軍を習練し、東北にしては蝦夷・唐太、西南にしては、流蚪・対馬、憧々往来して虚日あることなく、通漕捕鯨以て操舟を習ひ海勢を曉り、然る後往いて、朝鮮・満洲及び清国を問ひ、然る後広東・咬啗吧・喜望峯・豪斯多辣理、皆館を設け将士を置き、以て四方の事を探聴し、且つ互市の利を征る。此の事三年を過ぎずして略ぼ弁ぜん。然る後往いて加里蒲爾尼亞を問ひ、以て前年の使に酬ひ、以て和親の約を締ぶ。果して能く是くの如くならば、国威奮興、材俊振起、決して国体を失ふに至らず、又空言以て驕虜を懲するの不可なるに至らざるなり。……

簡単に内容を申しますと、「然りと雖も、空言は遂に以て驕虜を懲すべからず。」しかし、さういふ大きなことを言っても、空威張では遂には驕り高ぶつてゐる敵を懲らしめることは出来ない。「宜しく今日より策を決し」、今から策を定めて、「上は祖宗の遺法に遵ひ」、古来日本の国が外国とつき合ったいろいろのつき合い方を学んでゆくとともに、「下は徳川の旧軌を尋ね」、徳川の幕府が出来た時の古い時点におけるやり方も尋ねて、「遠謀雄略を以て」事をなさう、計画の基本線としよう。そこで実際にはどうするかといふと、日本の国の侍であり臣民である者、幕府方であらうと朝廷方であらうと、金持ちも貧乏人も、もはやいままでの階級は問はない。船を動かし、あるいは軍を進めることの出来る技能者を抜擢し、そして大きな船を造つて海上の軍隊を作り上げる。そして東の方は蝦夷・樺太、西南のはうは琉球・対馬の間で、海上輸送の運搬を頻繁にして一日も船が動いてゐない日はないやうにする。その勢ひを以つて「通漕、捕鯨」鯨を捕りながら遠くの海に出かけて行く術も習ひ、海の形勢も知り、しかる後朝鮮、満洲、清国を問ひ、更に広東、咬啣吧、喜望峯、オーストラリアまで行って、方々のことを探知しながら常駐者を置く。そして世界の情勢を学びとりながら三年後にはカリフォルニアに出かけて行って、アメリカと条約を結ばうといふのです。

これを一緒に読んでみて、いくつかの、問題に気づくと思ふのです。一つはかういふことです。諸君が中学、高校で歴史をお習ひになつた時に、吉田松陰といふ人はどういふふう

のイメージに残った人であったか、それをちよつと思ひ返して下さい。おそらくだれでも吉田松陰が下田からアメリカの黒船に乗らうとした話を聞いてゐるだらうと思ふのです。また、日本は西洋のことを知らないから、一日も早く知ってそれを学ばなければだめだといふ、進取の気性の強い人であったといふふうに印象に残っただらうと思ふのです。しかし松陰に学ぶべき大切な点は別のところにある。すなはち吉田松陰は、黒船に乗っていつて勉強しようとするそのアメリカではあるが、事がいやしくも日本の国の存立にかかはってやることになれば、あくまでも対等につきあつてゆかなければならないとはつきり考へてゐたといふことです。しかも松陰はいま具体的に問答をやつてゐる。アメリカの大統領はかういつてくるだらう、さうしたらこつちはかう言はうではないか、また向ふは言ひ返してくる。その時はかう言はうといふふう

に問答をくり返してゐるのです。といふことは、国と国との関係はデリケートなものであり、その中で自分の国は独立を守らなければならぬ。アメリカにはアメリカの言ひ分もあるだらうけれども、それは聞けない。むしろ当時の日本は、吉田松陰がこんなことをまともに言へるような国力なんか全くありはしないし、国内ではいろいろの内乱的な紛争の徴が出てゐるし、さういふ日本の国の実態を吉田松陰は誰よりも良く知つてゐたはずで、でありながら、こと外交に関しては全然別の立場に立つて論議してゐるでせう。この文章の中には、日本の国の独立をほんたうに守るためには、自分の国は弱からうが武力がなからうが何であらうと外国の嚇

しにのつてはだめだといふことがはっきり出てゐます。

かういふことを私は是非一緒に考へたかつたわけです。吉田松陰はまだ二十幾つの若い青年です。その青年が堂々と述べてゐるこの所見は今日の政治担当諸氏も謙虚に読み直して然るべき文章だらうと思つたのです。中共と日本の国交についても、ほんたうにこの吉田松陰の精神をうけついで欲しいと思ひます。相手はいまままでつき合つてゐた国と縁を切るならつき合つてやるといふ、このやうに驕り高ぶつた氣持でゐる国に頭を下げることは、あの幕末の全く武力も、近代文明の力もない日本の青年ですら命をかけてそれを峻拒してゐるわけです。このやうな文章に接しますと、一人の人間がその「本来の心」を生き生きと働らかせるといふことはどういふことなのか、また物事を正確に考へる力とはどういふもののかなど、いろんな意味で勉強させられる思ひがします。

歴代天皇のみ歌について

この「人間本来の心をと戻さう」といふことに関連して、お持ちいただきました「日本の回帰」(第七集)の九頁から十頁のところをちよとあけて下さい。これは昨年合宿における戸田義雄先生の「物を思ひ感ずることと生き甲斐と」といふ講義の内容ですが、この中で戸田先生は「機械的決定論」といふ言葉を使つてゐます。これはどういふことかと言ふと、九頁の

終りから二行ばかり読みますが、「近頃の人々は前時代の人々と違って、伝統といふものから生き方やふるまい方を学ぶことが出来なくなりました。ふらふら横を見て他の人々がする通りにしようとする。あなた任せのコンフォートミズム、適応主義といふ生き方をします。」適応主義といふ言葉をそこに出してあります。それがだんだん定義されていって、「機械的決定論」といふことに繋ぐていくのです。すなはち自分自身が直接感じて受けとめたものを一番大事にするよりも前に、周囲はそれをどう扱ったかといふことを先づ考へ、自分もそれに従って適当に判断を下していかうといふ生き方なのです、それが最近非常に強く出てきたと思ひます。そこにはやはり私が言ふ人間本来の心の働らきは失はれ、自分の心の働くべきところを自分自身で軽蔑してしまつて、他の人はどうするのだらうかといふことが気になつて自分の考へ方を決めていかうとする姿勢がある。人間としてせっかく生きてゐながら、そして人の話を受け止める力を皆平等に持つてゐながら、周囲の動きに自分を簡単に託してしまふ。人間が自分の行動について自分自身深く考へるのを停止してしまひますと、いはゆる群集の一人になつてしまふのです。群集の一人にならないやうに世界の人類は生きてきた、その積み重ねが文化なのです。ところが群集の一人というのは、自分自身の判断行動をすべて一つのマスの中に隠してしまふわけですから、人間としての自分の尊貴さを自分で放棄してしまふことになりまふ。さういふことにならないためにも、人間本来の心を取り戻し、人間自身の尊厳性といふことを自分

自身で確認してゆきたいものだと思ひます。

国といふものを考へる時に、抽象的に考へられた国家と、自分自身が所属する具体的な運命共同体としての国といふものとを、ゴツチャにしてしまつて論議をすれば随分話がをかしくなつてきます。そこだけは是非わかつていただきたいのです。諸君はみんな親をもつてゐるわけですが、親といふものを抽象的に論ずることがあるかもしれない。しかし諸君のご両親と諸君自身との間に結ばれてゐる縁といふものは切ることの出来ない具体的なものなのです。それを切つたと仮定したところで永続性はないのです。事実でない所に事実を押し込めようとするから永続性がない。したがつて、「仮に親でなかつたとしたら」といつて自分の親の顔を眺めてみたつて、どこにも収まりのつくところはないはずです。いくら理屈でとやかく言はうとも実在するその親子関係は切れない。さう考へてくると日本といふ国を否定するとか、軽視するなどといふことは、抽象的な論議としての国家論が、具体的な自分自身の国の問題の中にかまてはいつてきたために起きた混乱だと思ひます。それは現在の日本の思想界、教育界の現状から言つて無理もないけれども、しかしそんなところにいつまでも引つかかつてゐるとほんたうに困つたことになると思ふのです。そのやうに自分の所属してゐる国そのものについて疑惑の目を持つといふやうなことはまず止めて、自分の所属してゐる国の実態を歴史的に、あるひは

現実的に詳しくよく知らうとする努力を一日も早くスタートしていただきたい。私にはその方がはるかに人間らしく生きることが出来る道だと思ふのです。「人間本来の心を取り戻さう」といふ意味は、胸の中に何か割り切れないで残つてゐるものを自分でつかみ出して、自分自身の行動の中にそれをもう一度位置付けてみることだとお考へになつていただきたい。

そこでプリントの七番目、そこを讀ませていただきます。「かくて登場せざるを得なくなることは、日本における天皇のことであり、二千有余年に涉つて天皇を大切にしてきたわれわれの祖先たちの生き方の問題である。」日本といふ国に問題をしばつて考へれば、天皇の問題を避けて通るわけにはゆかなくなつてきます。「天皇を避けて国家を語る日本人は人間的にも学問的にも公正な立場に立つ者ではなくなる。すなはち、日本にはなぜ天皇がをられ、かつ皇位継承の御事が可能であつたのか。」すなわち、二、〇〇〇年も天皇がなぜ続いたのかといふことです。「その理由追求にもつともつと国民の努力が必要なはずである。ことに天皇が馬鹿らしいもののやうに見える教育を受けてしまった青年たちや、教職にあつてそのやうに思ひ込んでしまつてゐる教師たち、学者たちにおいては、一層そのことの必要性が自覚されて然るべきである。」天皇が日本に存続したのはなぜかといふその「なぜか」をはつきりさせたい。「この点における跛行は人間としても問題となりはしないか。」といふことであります。

この問題に関連して、私共国民文化研究会が時事通信社の要請を得て発刊致しました「日本思想の系譜—文献資料集」上下二巻について一言ふれさせていただきます。この資料文献集には歴代の天皇の御歌が取り上げられてゐますが、これは日本思想史の資料文献集としてはおそらく唯一のものかもしれない。従来日本思想史が語られる時に、歴代の天皇方がおよみになった和歌は日本思想史の正式の文献として扱はれてゐないのです。それを扱った書物は全くなかったのです。天皇政治のいい悪いは別にしても、歴代の天皇が実在し、それが消えることなく続けられてきたといふ事實は、疑ふ余地がない。さうすると、天皇といふ方がどういふお心で生きてをられたかといふことを、日本思想史を語る者が資料の中にも入れないといふことは学問としてはをかしいのではないか、といふ考へを私共は持つてゐたわけです。私共がこの本の編集をするについて取り上げたものは、大正三年か四年頃に出来ました二五巻に亘る列聖全集と、それから二年後、大正六年頃に出来た歴代天皇御製集といふ六巻とその二つでしたが、その他に天皇の御歌に関する文献は殆んどないのです。五〇数年にもわたつて天皇のお歌に関する文献が殆んど出されてゐなかつたといふその事実の中にも実に大きな問題が横たはつてゐると思ふのです。

さて、「日本への回帰」(第七集)を出していただきたいのですが、この中に私の昨年の講義

内容が書いてありますので、後日またお読みになっていただければ幸だと思ひますが、この中に天皇問題について一つの調査結果がのつてをります。平安の中頃から幕末近くまで、ちやうど約一、〇〇〇年の間に六四人の天皇が登場になってゐらっしゃるのですが、一一六頁には、その六四人の天皇方が天皇の位におつきになった年令が書いてあります。五才以下で天皇になった方が一〇人、一〇才以下で天皇になられた方を勘定すると二五人ゐらっしゃる。一三才以下で勘定すると六五人の中五四%、二一才以下になると何と七三%にも達し、非常に若くして天皇になってゐらっしゃることがわかるでせう。また天皇をおやめになってゐる平均年令は三〇才です。これはほんの一つの統計的な調査にすぎないのですが、一、〇〇〇年と言へば日本の歴史の中核をなす期間ですが、その期間にずっと天皇政治が存続してゐて、しかも歴代の天皇のお年はこんなに若い、少年のやうな方々であった。その一、〇〇〇年の殆んど大部分は臣下の人々が政治権力を掌握してゐる幕府が続く時代です。幕府の前には平安時代の摂政関白時代がありますから、いづれにしても殆んど天皇が政治の実権をもってをられない期間が一、〇〇〇年も続いてゐるんです。さういふふうが続いてゐるといふことは、なにかそこに天皇についての価値評価が日本国民全体の中に潜在してゐる、さうでなければそんなものは続くはずはないのです。天皇は政治権力をお持ちになつてをられた時もあるし、また行使なさることあつたけれども、しかしそれが天皇といふものを存続せしめたポイントではない。ポイントは

権力ではないと思はれます。

そこで、具体的な天皇のお心にわれわれが触れようとする時にぶつかるであらう問題と、その考へ方のポイントのいくつかを、天皇方のお歌に触れながらお話ししたいと思います。最初はいまの天皇がおよみになったお歌で終戦直後のものであります。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

このお歌は大変な字余りです。一首の中にこめられないあふれるやうな作者の思ひがかういふ数多い字余りを作ってしまったふことがある。字余りだけ見ても、このお歌をよまれた時の天皇のお心といふのが本当に押へ切れないものであったといふことを多少とも歌をよんだ経験を持つ者は知ることができるのです。ところが、今の日本にはこの歌についてかういふふうと言ふ人がある。すなはち爆撃に倒れてゆくやうにしたのは天皇じやないか、倒れてゆくのはかはいさうだから戦争を止めた、といふが結局は因果応報ではないか——このやうにしか考へられない人がたくさんゐるのです。かういふ天皇のお歌を引用してこのやうなお話をするのは本当に心が痛む思ひがしますが、お許しただきたいと思ひます。いまのやうな意見が出てくるのは一つには、さっきの国家の論議の中で指摘した、抽象的な国家論と自分自身が生きてゐる立場

における国とが混同されて論議されたと同じ論法の、論理的な混乱がある。それともう一つは歌といふものに対する認識の欠如です。歌といふものの価値は、その中で生きてゐる人の心の切実さ如何にかかってくるのです。すなはち、すぐれた歌はある人が激しい緊張の一瞬に、身も心も震はせるやうな思ひがした時に、そのあふれ出るやうなおもひを言葉に綴った時に生れてくるのです。この天皇の御歌にはこのやうな切実な思ひがさながらに表現されてゐると思ひます。その時の日本は誰も戦争を止めることは出来なかつた。誰一人どうにも出来ない時に、天皇御自身が自分は死んでもいいといふ決意をなさつてをられたからこそ、戦争を止めることが出来になつたのでせう。誰一人相談することも出来ない孤独な中で、日本の国民の命が失はれてゆく現実を直視され、身を捨てて終戦に当たられたご感慨がこのお歌に溢れ出たものと思はれます。

私はいまの二首のお歌の次に「大御心を偲ぶことができるかどうか。こちらの心を働かせなくては憶念し奉るよすがもない」と書きました。このお歌をくり返し読みながら、この歌をよみあげた作者の心の中に自分を投入すれば、この歌を作った人の心境の中に自分自身が立ち返ることが出来ます。それを「憶念」といふのです。憶ひ念ふといふことです。そのやうに思つていかなければ天皇のお心を理解する道はない。外からだけ見てゐて天皇制が良いか悪いかといふ論議をいかに繰り返しても全く天皇を語ることは出来ないのです。なぜならば、天皇が存

続したといふ事實は、国民が外から天皇を眺めて天皇の価値を評価したから続いたのではないからです。もっと内面的なもの、心から天皇の心を仰ぐことの出来る国民によって存続したのであって、体制上の観点からだけでは、天皇の問題は決して解明できないと思ひます。

次は明治天皇のお歌です。

虫声非一

さまざまの虫のこゑにもしられけり生きとしいけるもののおもひは（明治四十四年）

虫声欲枯

かれがれになりぬる庭の虫のねはなかぬ夜よりもさびしかりけり（明治四十四年）

たくさんの虫の音が聞えてくるのですが、その一つ一つに耳を傾けてみると、一つ一つみんな違ったいのちを生きてゐるのだといふことを感ずる、といふお歌なのです。その虫の声がだんだん聞えなくなってくる。「かれがれに」、細々とした虫の音の聞えて来る夜は、虫の音のしない夜よりかへって寂しいといふのがその次のお歌です。これはやはり虫の命に深く心を寄せた作者の心境でせう。ここは科学が介入する世界とは全く別の世界であつて、天皇は虫の音一つにも生きるものの命を偲ぶことの出来る人間の心、さういふものを常に鍛へてをられるのです。決して作為で詠まれた歌でもなんでもないと思ふのです。われわれはその作品を通じて作

者がどういふ心の持主かといふことを知ることが出来るのではないでせうか。次も同じく明治天皇のお歌です。

紅葉

うつろひて散らむとすなるもみぢ葉をうつくしとのみ思ひけるかな (明治四十四年)

「うつろひて」といふのは色がだんだん変っていつて力なく枝から落ちて散ってしまはうとする、「散らむとすなる」、今まさに瞬間的に落ちさうな紅葉です。「散らむとすなる」といふ言葉、かういふところに非常に緊張した言葉が使はれてをります。そのもみぢ葉を、「うつくしとのみ思ひけるかな」、これは秋のもみぢ葉が紅葉し尽して、全生命を使ひ果たして今枯れ落ちようとする瞬間、さういふ瞬間に心を止めてをられるのですが、私は生きてゐることと死ぬこととの繋がりを中心をこめて考へてゐる人でなければかういふ微妙な観察が出来るものではないからうと思ふのです。明治天皇がどういふ方だったかは存じあげないけれども、明治天皇のお歌をよむことによつてわれわれは明治天皇といふお人柄を知ることが出来る、味はふことが出来るのではないだらうかと思ひます。

次に明治天皇のお父様の孝明天皇の御歌です。

すましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせしなよろづ国民

濁った水に自分は沈んでしまってもよろしい、ただどうしても国民だけは外国の牙の下に置くことは出来ない、外国に日本を蹂躪させることは出来ない。そこには自分を先だてるやうなお心は全く見られないのです。さういふ心を修練なさってこられたのが日本の御歴代の天皇方なのです。だからそれが本当か嘘かを確かめていくためには、歴代の天皇がお作りになった歌を見ればいいわけです。ところが、お歌そのものを学問の研究の対象から除外してしまったのでは、もうそれは調べやうがないではありませんか。

同じ孝明天皇のお歌

述懐

天がした人といふ人こころあはせよろづのことにおもふどちなれ（元治元年）

アメリカの船、ロシアの船、イギリスの船などが日本の周辺を取り囲んでしまったやうな時期ですが、日本中の人といふ人すべて「よろづのことにおもふどちなれ」、万事につけて心を合はせる同志であってほしい。うっかりすれば日本の国の滅亡が目の前に来る、といふことでせう。そのもう少し前になります、孝明天皇がまだ二十八才のお若いときによまれたのが次のお歌です。

述 懐

神ごころいかにあらむと位山くらみやまおろかなる身の居るもくるしき (安政五年)

先の「対策一道」の折に述べた通り幕府は天皇の言ふことを聞かないでアメリカと勝手に条約を結んでしまふ。そして国民は自分勝手なことを考へてゐるとお考へになられたのでせう。「神ごころいかにあらむと位山」、「位山」といふのは天皇といふ位です。神の心を偲ぶにつけてもその位にゐるだけでも自分は苦しい。「おろかなる身の居るもくるしき」、かういふお歌が続いてくるのです。だから日本に天皇が続いたといふことを政治形態的に、あるひは社会体制的に論議するのはいくら論議してもいいのですが、それはやはりさっき言った抽象論としての限界を持った論議なのです。われわれが日本の国民の一人として、日本が今日まで存続してゐることをうれしと考へる一片の心があるならば、天皇のみうたを通じて、天皇のお心にふれる以外に、この問題を本当に理解する道はないのです。

をはりに

私が人間本来の心に早く立ち戻らうといふのは、本当に価値のあることに取り組んで人間生活を豊かなものにしてゆきたいからです。そのことは当然国家の問題とかかはってくるのです

が、国家といへばすぐ国家主義だとか右翼だとか言ふ。だがどうしてそんなことになるのでせうか。世界中のどの人間だって、国を足場にして社会生活を豊かにする以外に世の中に尽くす道もなければ、自分が生きる道もないし、まして人類に尽くす道もないはずで。どうしてそのことがわからなくなってしまったのだらうか。本当に私はなさけないと思ひます。それはイズムの問題でもなんでもありません。人間がこの世に人間として生きた本当の生甲斐といふものを素直に謙虚に感謝しながら生きる道の一つに過ぎないのではないでせうか。ここに一人の人間があればその人はきつと立派な家庭を作ることが出来るはずで。そして、その家庭と日本といふ運命共同体の歴史とのつながりが確認できれば、そこに個人と国家の関係も自然に了解されるでせう。さうなれば、真の国家の独立といふことの意味も体験の上ではつきりしてくると思ひます。さういふ意味でもいろいろ流行してゐる言葉に惑はされしないで、まづわれわれ自身が人間として蘇りたいものと思ひます。

(亜細亜大学教授・国民文化研究会理事長)



講

義

世界の動きとその解釈

木内信胤



・
社会科学方法論

マスコミの偏向

重層構造的考へ方

昨年以來の世界の事件

世界の転機と新生日本

新しい世界経済秩序

新生日本に関する諸問題

社会科学方法論

私は現代の社会科学に対する大反逆児でして、社会科学がダメだからこのやうなまづい世の中になるのだ、特にアメリカがさうだと思つてゐる人間です。

社会科学はどうあるべきかと申しますと、社会科学の方法論が自然科学に押されてゐて、実証がなければ何も考へない、実証なしに何かを言ふのは非科学的、非学問的だといふ実証依存の態度に問題があるのです。ところが人間社会といふものは、心の働きによって行動する人間が作つてゐる社会ですから、必ずしも実証があるとは限りません。ですから人間社会のことは、直観でないといつてからないのです。

直観でわかつたところを実証で確かめるのは勿論結構です。その実証で確かめるといふことを綿密にやるのは学者風ですね。直観でわかつたことを、そのまま実行に移してゐるのは政治家だとか、実業家だとかです。社会で働く人はさうするのがいいのですが、念のため、実証が可能ならば、実証で検証するのは結構です。実証とはそのやうに使ふべきものでせう。

では、どうやったら正しい直観が得られるか。そこを少し考へてみますと、ものごとをみてあつ、さうだ、これはかうだ、と気が付くのは、全くのところ直観以外の何ものでもない筈です。そのやうな直観を得るに際しては、予め相当な知識を持つてゐなければならぬし、そ

の人の過去の全ての経験がものを言ふのは勿論ですが、実はそれだけではなく、対象に対して何らかの判断を得たいとする強い意欲が働いてゐなければならぬのです。そして人間が意欲を持つのは、その陰に情緒が働き憧憬といふ心の働きがあつてのことだ、といふやうに考へてくれば、そこには人間の全人格が働いてゐなければならぬといふことがわかります。ではどうしたらこの直観を得ることが出来るか、と申しますと、それには、自分を真剣に観察することからはじめなければならぬ。人間は自分一個しかほんたうは知らないわけですが、自分を真剣に観察すれば、自づから人間とは何かといふことがわかつてくる。それに基づいて人間社会のことを考へるといふことをつづけてゐると、やがて直観が生き生きと働いてくるやうになるのです。

昔の世の中では、全人格的に重きをなしている人が学者とされた。その人の言ふことや、その人の判断にみんなが心服すれば、それで世の中は動いてゆく、さういふことであつたのです。元来社会に関する学問といふものは、そのやうな趣きのものでなければならず、やがてそのやうな趣きを取り戻すであらうと私は思ひますが、現在はそのやうになつてはゐない。実は社会科学の「科学」といふ字がよくないので、私はこれを社会学と言ひたいけれども、この言葉は既に使はれてゐるので、やむなく社会科学といふ言葉を使ひますが、実証でなければものを考へない、判断しないのが科学なら、私のいふ社会科学は科学ではあり得ないでせうね。蔽

密に言へばさうなるのが私の考へです。

私はずっと前からそのやうに考へ、実際に仕事をしてきたのですが、いよいよそのことを書くべきときがきたと思ひ、またそれを早く書くべきだといふ若い人たちの注文もありまして、最近「社会科学方法論」といふごく短いものを書きました。私はさういふ特別の立場に立つてゐる人間ですから、私の申しますことは自然、普通と違ふ面も出てくるわけです。しかし私は、私のやうな考へ方をしてゐるのがほんたうに学問的だと思つてゐるのです。

マスコミの偏向

次に申しあげておきたいのは、日本のマスコミの偏向です。日本のマスコミは、自分に都合の悪いニュースは流さない。そのことを暴露したのが、最近発表になつた林彪事件です。

林彪は中共のナンバー・ツウの人、軍の最高権力を握つてゐた人です。その人が毛沢東を暗殺して政権の転覆を計つたが、事があらはれて逃げる途中、昨年九月十二日に死んでしまつた。ところが日本のマスコミは、この事実をいままでひた隠しに隠してゐたのです。私は日華協力委員会のメンバーで、昨年十月に台湾で会議があつたのですが、そのとき林彪事件を聞いた。九月十二、十三日の二日間、中共の全国土で軍用機も民間機も全て地上を離れてはいけなといふ命令が出された。さうするうちに國慶節の天安門パレードが中止になつた。台湾の諜

報機関はこれは大事件だと思ひ、いろいろ情報を分析して林彪事件をキャッチしたのです。林彪は、毛沢東暗殺計画が暴露したので飛行機で逃げたがモンゴルの上で撃ち落された。林彪が逃げたのが政府側にわかったのは、驚くなかれ林彪の娘さんが内通したからだ、といふやうなことは私はすでに昨年の十月初旬には聞かされてゐたのです。それから暫くしまして全世界のジャーナリズムにこの話題がのぼりました。ところがひとり日本のマスコミだけは沈黙してゐた。十一月末ごろ文芸春秋、週刊文春、サンデー毎日が少し書きましたが、それで日本人はいささか知ったのです。もつとも週刊誌は読まれてゐるやうで存外読まれてゐないので、全体としてみれば日本人は、まるで知らされてゐないといふ状態におかれてゐたのです。今度の発表で日本の新聞は初めてニュースをキャッチしたやうな顔をしてゐるが、



全世界ではずっと前から知ってゐたことなのです。

これは当時五段抜きぐらいで書いてもいい大事件です。それを知らせないのが日本の新聞です。このあと私は世界に起きてゐる事件について私の解釈を申しますけれども、そんなことは聞いたことがない、新聞には書いてないではないかと言はれるかも知れませんが、新聞は彼らの好まざることは書かないのです。ベトナムの戦況でいへば、南側やアメリカ側に有利な戦況は一つも書かない。実に困った状況になつてゐます。ただしこの偏向はいま暴露されつつある。ことに林彪事件によつて大いに暴露されたから、現在では日本の新聞はおかしいぞといふことは非常に説明しやすくなりました。

事情を知つてゐる方は、新聞が中共に不利なことを書かないわけは、北京に特派員を受け入れて貰ひたいからだといふことをご存じの筈です。毎日新聞でしたか、毛沢東の漫画を書いた、ただそれだけで特派員が北京から追放されたといふ事件もあるのです。中共は日本の新聞をコントロールして自分に都合の悪いことは書かさないやうにし、それによつて日中国交正常化問題を中共にとつて有利な雰囲気に向かうとしてゐるし、それが成功してゐる。中共の世論指導外交の極めて大きな成功です。このことを暴露したのが三好修といふ人と、衛藤藩吉といふ東大の教授です。このお二人が協調して、一冊の本を出されたので、最近はいかに日本の新聞が周恩来にコントロールされてゐたかが、国民にも次第にわかつてきました。そんなことで

状況は少し変りつつありますが、ものを考へる知識の源泉は新聞ですから、それに非常に偏向があることは、前もって申しあげておいたほうがいいでせう。

重層構造的考え方

昨年霧島の合宿でお話して以来、世界には相当激しい動きがありました。激しいとは、予想外であったことが多いといふ意味ですが、これがほんたうに激しい変化であるかどうかは必ずしも断定できません。そのためにはその変化の様相を知ることが大事ですが、その意味を知ること、即ちその解釈が一層大切なのです。

そこで、ものを解釈するに当っては、重層構造的に考へる必要があるといふことを申しあげておきたいのです。重層構造的に考へるとは、少くとも表面、中どころ、深部の三層を認め、その各々にまた上中下三層を認めるぐらゐの頭の使ひ方をするのがいいといふことです。しかし層の認め方は、考へ方の整理目的によつて異なりますから一概には言へません。

世の中といふものには、表面に流れてゐる事件のほかに、その背後に、もっと深い別な流れがある。表面だけを見てゐたのではダメで、もっと深いところも見なければ世の中のこととはわからない。しかも、表面から深部に至る間には、幾通りもの層が重つてゐるのが世の中なので、それを一平面だと思つてゐてはダメです。私はずっと以前からそのことに気付いてはいました

が、「重層構造」といふ言葉を知ったのはごく最近です。この言葉はいつ誰が作ったのか知りませんが、非常に便利だから大いに使はうと思つてゐるわけです。

重層構造的な考へ方をすると、頭の整理がよくできます。したがつて説明も楽になる。聞くほうもあの人はいま中層の話をしてゐるのだ、あるひは深層の話だ、といふことを心得ながら話を聞くと理解しやすい。しかしどの層の話をしてゐるのかわからないやり方では、話は通じません。近頃はコミュニケーションは非常にむずかしいといふことが、一般の論題になつてきました。これは世の中の大進歩ですね。昔はものを言へば必ず通ずるものだと思つてゐたのですが、そうではないことにやつと人々は気が付いてきました。そのコミュニケーションをよくするにも、重層構造の概念を入れて、あなたはいまどの層で話をしてゐるのか、といふやうなことを、お互ひによく聞きあつて話をするやうになれば、コミュニケーションはずつとよくなると思ひます。

アメリカ人はものを考へる場合、非常に平面的です。ヨーロッパ人はいくらかいいが、やはり平面的ですね。日本人が一番立体的に、深層に亘つてものを考へてゐる。この考へ方は役に立つと思ひます。特に重層構造といふのはいい言葉だと思ひますので、ご紹介しておきます。

昨年以來の世界の事件

以上は今日の話の三つの前置きですが、さて昨年以來、実に多くの事件があつて、世の中はまるで変つたやうな事になつた。事件が起つた順に申しますと、第一がニクソンの訪中の発表、いわゆる第一ショックです。これは昨年の七月十五日。次は第二ショックでドル・ショック。ドルと金の交換を停止し、各国に平価の切り上げを要求するといふことがあつて、大さわざぎになつたのですが、その発表がアメリカ時間の八月十五日です。三番目は九月中旬の林彪粛正です。次は中共の国連加盟と台湾の国連追放、これはまさかと思つてゐたことが起つたのですが、十月二十五日のことです。その次はスミソニアン体制、これはドル・ショックの元になつた通貨問題を解決するため、九月から十ヶ国蔵相会議が始まつたが、十二月十八日にやつと決つた。平価の切り上げがあつて日本は一六・八八%、その他の国はそれほど大幅ではなかつたが、これで一応ドル・ショックの後始末ができたと思はれてゐるわけです。日本ではこの秋が沖繩国会。沖繩復帰に関する法案が審議されたのですが、関連法案が通過したのは十二月三十一日だったので。それを受けて佐藤総理はアメリカへ行ってニクソンと会談した。これがサンクレメンテ会談で、年が明けた一月六日、七日です。そのころ世界の他の舞台では、インドとパキスタンとの戦争がありました。一月十二日に終了して、東パキスタンがバングラデシュといふ国となつて誕生しました。次にニクソンの訪中。昨年七月に予告されてゐたものが二月下旬に実行された。それから間もなく北ベトナムへの爆撃、いはゆる北爆が再開された。

これはその前の三月三十一日に、北ベトナムが正規兵をもって非武装地帯を堂々と突破し、ソ連製の戦車を使って南ベトナムに侵入したといふ事件がありました。それから一週間経った四月八日から、アメリカは猛烈な北爆を再開し、更に一ヶ月後の五月八日には海上封鎖をやつて、北ベトナムへは外国の船は一切入れないといふことになった。機雷で封鎖したのですが、これがベトナム戦争の大転機を意味するものです。それからニクソンの訪ソとなる。五月八日に海上封鎖をやっておきながら、五月下旬に訪ソする、一時はソ連を怒らして訪ソがご破算になるのではないかと思はれましたが、実現したのです。それとは別に、四月十三日から五月二十一日までチリで第三回UNCTAD会議が開かれました。これは後進国の貿易と開発に関する国連の会議ですが、決裂ではなかったが決裂に近い形で終わりました。さらにニクソン訪ソの直後、西ベルリンに関する協定といふのがソ連と西独の間に成立し、西独は西ベルリンとの交通が妨げられなくなり、その点西独に都合が良くなりました。これが六月三日。七月四日には南北朝鮮の平和統一に関する共同声明といふのがありまして、これがまた人を驚かした事件です。北鮮はついこの間まで、武力統一を叫んでゐたのですが急に平和統一を言ひ出し、偏向してゐる日本のマスコミは南北の統一がいまにでもできるやうに書いた、あの事件です。これは今後非常にむづかしい事件になる筈のもので、最後に佐藤さんの退陣と田中内閣の成立、七月六日です。田中内閣ができるや否や周恩来の対日外交攻勢が激化した。これは前からの計

画でせうね。周恩来は田中さんが訪中するならば歓迎だと言ひ、いまにも国交正常化ができるやうなことを言ひ始めた。それを受けて田中内閣は急ピッチで日中国交正常化に走り始めた。場合によるとこれが大問題を起して日本はこれから非常な混乱に陥るかも知れない。以上のやうなことが昨年から今日までに起つた世界の事件です。

かう列挙しましたのは、一般の方々にはこれだけの事件が起つてゐることになかなかお氣付きにならないだらうと思つたからです。これらを総合してどう眺めるかといふのが解釈の問題ですが、その眺め方、解釈の仕方の積み上げによつて、その人の世界観といふものが確立されてくるのです。またその世界観に基づいて、その人自身の行動のあり方もわかつてくるわけですが、ときには解釈問題に触れず、ただ全般的に見渡して見るのもいいと思ひ、列挙したわけです。

世界の転機と新生日本

世界の動きを見るのに、どのやうな目的をもつて頭を整理したらよいかと申しますと、それは、世界の動きを大きく、間違ひなく捉へるゝことと、その理解によつて、各自が生き甲斐を感じるのを援けるゝといふ、この二つであればいいだらうと思ひます。この二つを目的として考へ方をまとめ、そのつもりで世界の動きを解釈して行かうといふわけです。

さう考へて世界の事件を見渡してみると、

その全ては、米ソ両国がリーダーシップを喪失しつつある状況の下に、全世界が暗中模索に入つてゐるといふ事実の表現と見る事ができる。

といふのが、個々の事件を総括した私の解釈です。

いまの世の中は、米ソは確かにリーダーシップを喪失しつつある。元来アメリカは、戦後、実に立派に世界のリーダーシップをとつて戦後の世界を建設してきた。その第一の目的は、スターリンのソ連によつて世界が共産化されることを防ぐことであつた。第二の目的は、世界を経済的に再建することで、そのリーダーシップのとり方は、実に無邪気で純真なものであつたのです。ジャーナリズムは、アメリカは資本主義の国で、私利私欲ばかり考へてゐるやうに書くので、甚だ悪いイメージを与へてゐますが、その当時のアメリカの実際の姿は、非常にいいものであつたと思ひます。しかしその二つの目的は、十年ぐらゐ前に完成してゐるのです。その当時にアメリカがリーダーシップの座から降りてしまへば、もつとすっきりした世の中になつてゐた筈ですが、さうはなかなかやれないもので、アメリカは依然として同じやうにやつてゐた。さうすると新しい問題が次から次へと起つてくる。アメリカの国内でも、全世界でも起つてくるのです。その新しい問題に対してアメリカはリーダーシップをとる資格はもうなくなつた。にも拘らず同じやうにやつてゐるから、次第に破綻を生じてくる。そこで最近数年アメリ

カ人は自信を喪失し、もとの無邪気な、自信に溢れたアメリカ人ではなく、非常な自己嫌悪が生まれてゐる。若い人ならヒッピー化するか反体制化する。ア・メ・リ・カは急転落した、これが世界の大きな事実です。その事実をしっかりと把握してゐることが大切だと、三年ぐらゐ前から私はあらゆる機会に申しあげて来たわけです。

ソ連のリーダーシップ喪失は、共産圏の解体と称してもいいものです。共産圏の解体とはどういふことかと言へば、共産圏は一枚岩であるべきものですが、中ソはいま対立してゐる。中共には、ソ連にいつ攻撃されるかも知れないといふ恐怖があり、そこで、非常にむづかしい芸当だが、アメリカと手を握らうといふ政策に変わった。その政策を実行すると、自づから林彪事件を起すことになるのです。その政策に反対であった林彪が粛正されたのちに何が起ったかと言へば、軍をがたがたにしてしまった。さきには劉少奇を文化大革命で追放したときに党をつぶし、官僚機構をつぶしてしまった。それにも拘らず国が保つてゐたのは軍があつたからで、今度はその軍の親方の林彪を殺してしまつた。中共政権といふのは実には滅茶苦茶つぶし、官僚機構をつぶし、軍もつぶした。ですからいまの共産中国は、内部的には滅茶苦茶だと思ひますね。毛沢東政権は長くない、数年後にはつぶれてゐるだらう、といふのが私の意見です。だから私は、中共は恐れる必要はないと思つてゐます。日本がだらしないから中共が恐いと言へばその通りですが、日本のだらしないさを改めれば、中共それ自体はそんなに恐いも

のではないと思ひます。これは他の方とかなり意見の違ふ点ですが、さういふ解釈もしてみたくなるやうな中共の内部情勢なのです。

中ソが対立してゐる、中共の内部は混乱してゐる、といふ二点だけを捉へてみても共産圏は解体姿勢に入つたと言へるのです。これまで共産圏のリーダーシップをとつてゐたのはソ連ですが、今では勿論その力はない。ソ連の内部はどうかといふと、中共のやうな激しいことは起らないですね。スターリンの死後、ノルマで強制するスターリン流の共産主義のやり方は崩れた。ソ連も近代科学技術を活用して生活はどんどん向上してきた。ただし自由がないから、国民は本気になつては張り切らない。ある程度の収入があれば生活も楽ですから、怠けるといふことが起つた。国民大衆は酒ばかり飲んでよく働かない。それがソ連の近状ださうです。その意味から言つてもソ連は決して恐い国ではなくなつた。これも一面的に考へられては困るので、さういふ面もある、さういふ面がむしろ特徴だと言ふことを申し上げたいのです。かうしてソ連はリーダーシップをとつてをりませんから、共産圏はそれぞれの姿において解体をはじめめてきてゐる。東ヨーロッパの共産諸国は機会があればソ連の支配から逃れようとしてゐる。さういふ情勢だから西独の対ソ外交も割合スムーズに行くと、かう考へたらいいでせう。

全体から見れば昨年以来の事件は、米ソ両国がリーダーシップを喪失しつつある状況下に、全世界が暗中模索に入つてゐる事実の表現と見る、これが私の解釈で、いま暗中模索でない国

はありません。ひところまでは、いかにも自信があるやうに見えてゐたのが中共です。文化大革命といふ素晴らしいことをなすとげ、それが收拾段階に入って自信を取り戻した、といふのが新聞の表現でした。しかし私は全然違ふと思ひます。

私は以上の全ての現象は、別の角度から見れば、日本に対して新しく生れ変わる必要を示してゐるゝと解釈するのです。日本がどう変わるかといふことは、私は三年ぐらゐ前から申しあげてゐるわけですが、日本人は明治以来特に終戦以後、非常な自己過少評価に陥つてゐた。西欧と違ふ点を発見すると、有無を言はず、だから日本はダメなのだ、と決めてきたのです。それはいまはアメリカの急転落をよそ目に日本人は素晴らしい、二十一世紀は日本の世紀だなどと言はれるやうになりました。たしかに少くとも経済においては、ほとんどの分野でアメリカを凌駕しつつある。西独といへども及ばない、イギリスに至っては問題にならなくなった。一例を挙げれば、日本一の造船会社は石川島播磨ですが、そのただの一社で、全イギリスの造船能力よりも大きいのです。七つの海を支配していたイギリスですから、造船はイギリスのお家芸だったので。そのイギリスに対してさういふ状況になつた客観的事実は否定するわけにはいけません。さしも自己過少評価の好きであつた日本人、それによつて自分をむち打つてきたのですから過少評価も結構だつたのですが、それともいまは訂正せざるを得ないやうになつてきた。たとへば日本の農地は小さい、だからダメだ。二重生活だからダメだ。漢字といふむづかしいもの

を使ひ、漢字仮名交りといふ規則の立てにくい書法を使っている。だからダメだ。といふやうなタイプの考へ方はなくなつてきたのです。いまでは漢字仮名交りの文章こそ、世界に類のない便利な、能率の良いものだといふ認識が出つつある、さういふ世の中に変りましたね。少くとも過少評価だけは止つたのです。

さうなると日本はなぜ偉いのだといふ疑問が起つてきて、いまそれに答へる作業が進んでゐます。それに関する多くの著述が出ますし、歴史に対する興味も復活してゐる。では一体、日本人はなぜ偉いのかといふことは、いろいろな意味で説けるわけですが、抽象的に言へば、東西両文明を、東西両思想を、一身に兼ね備へてゐるからだと言へるでせう。しかし、さういふ抽象的な言葉で満足することは甚だ良くないのであつて、説明の便宜上やむを得ず申しあげたのですが、なぜ偉いかは、それを実感的に悟つた上で、それを言葉にすればかうだ、といふふうにならなければダメだと思ひます。

日本人はなぜ偉いか、そのわかり方について私は数年前から、今年の夏か来年の夏ごろまでに、十分に正しい方向で、相当に深い意味でわかつてくれたら、日本は万々歳だと申しあげてきました。それが新しい日本の誕生になるだらうと私は思つてゐるのです。今日の時点で見まして、わかる方は大いにわかり始めてゐますけれども、まだ十分ではないし、方向が正しいかどうかともよくわかりません。それがどのくらゐ正しく、どのくらゐ深くわかつてゐるかがテス

トされるのは、田中内閣のいま急ヒツチの中共接近、並びにその国内政策の眼目である日本列島改造論、これらが破綻を生む場合においてです。田中内閣の中国外交、国内政策はこれから大いに揺れるでせうね。われわれは一面においてそのことについて正しい理解を持つやうにしなければなりません、それと共に、さういふ眼光で政治の動きをにらんで、必要があったら立ち上る準備をしなければいけないですね。日本はもしかしたら大動乱に陥るかも知れないのです。

米ソ両国がリーダーシップを喪失した云々といふことを、先に述べた重層構造的な考へ方から申しますと、それは中層的な捉へ方です。そのあとで申しました日本に対して新しく生れ変わる必要を示してゐる云々というのは、深層的な捉へ方です。そしていまさき申しました昨年以來世界に起つた事件の素描、それは表面的な捉へ方だといふことになります。米ソのリーダーシップ喪失といふことも、それを西欧文明の転機、それが行きづまって新しいものが生れる転機だといふふうに捉へれば、これは深層的な捉へ方であらうと思ひます。

新しい世界経済秩序

そこで昨年以来起つた事件のうち主要なものについてもう少し説明いたしませう。「ドル・ショック」「スミソニアン体制」「UNCTAD会議」の三件は、新しい世界経済秩序の生みの

悩みを表現するものです。

ドル・ショックは、アメリカが金とドルとの交換を停止し、輸入課徴金をかけて平価の切り上げを他国に要請した事件です。それが、各国が平価の切り上げを決めたスミソニアン体制によつて、一応後始末がついたと思はれてゐるわけです。

アメリカ経済は世界経済のリーダーシップを取つてをり、いまでもさうだと思はれてゐたのですが、そのアメリカがいきなり日本や西独に対して、平価を切り上げてくれといひ、それまでは、といつて課徴金を課してきた。これは自由貿易思想に立脚し、輸入関税をかけてはいけないといふGATTの規則を真正面から破つたものです。もう一つの金とドルとの交換停止といふことは、金に支へられてゐるドルを基盤にしてゐるのがIMF体制ですから、これは、金とドルの交換停止によつてIMF体制即ち国際通貨基金に根本的な打撃を与へた、となるわけです。おまけにIMFは為替レートを變へてはいけないといふのが規則なのですが、アメリカが率先して他の国に平価の切り上げ即ち為替レートの変更を求めたといふことは、IMF体制を根本的にゆさぶつたと言つてもいいのです。

アメリカがなぜさうなつたかと申しますと、アメリカは戦後二十数年に亘つて過剰負担を負つてきた。全世界の復興を援けたし、スターリンのソ連の拡大も押へたし、多数の国に対して

經濟援助も軍事援助も行った。日本もヨーロッパも援助の恩恵を受けました。かうして戦後のアメリカは初めのうちは大変に良かったけれども、そのうちに日本と西独が非常に成長して国際競争力ではアメリカを凌駕するようになった。かうなった以上、現在の国際競争力の差は平価の切り上げによって調整し、調整後は、いままでよりも完全な自由競争にしよう、日本のやうに保護関税の残つてゐるものは撤廃しろ、といふのがアメリカの主張です。

立派な主張のやうですが、私から見ればとんでもない話で、まだそんなバカを言つてゐるのかと言ひたい。なぜかと申しますと、日本のやうな国に対しては、いかに完全に平価調整をしたからとて、完全な自由競争をやれば、アメリカは負けるに決つてゐるのです。鉄鋼を例にとつて言へば、いま日本の鉄鋼は対米輸出増加率を二・五%に自主規制してゐます。その自主規制をはずし、その代り平価調整はアメリカの要求どほり二五%切り上げて（スミソニアンでは一六・八八%でした）完全な自由競争をやつたとする。日本人は技術を使ふことに優れてをり海岸に製鉄所があつて能率は極めて高い。だから平価切り上げの圧力をはね飛ばして鉄鋼輸出はどんどん増えるでせう。輸出が増えれば量産がきき、新設備によつて生産は飛躍的に拡大し能率は更に向上する。日本はいま一億二千万トン計画を中止して操短してゐるのですが、自由競争になればすぐに一億六千万トン、二億トン計画になるでせう。その勢で進めば世界一巨大なアメリカの鉄鋼業をつぶしてしまひ、日本の生産量は三億トンでも四億トンでも足りなくな

るでせう。ところが日本がそのやうな巨大な鉄鋼業を持ったら、大変な公害が発生し、日本は公害の国になってしまひます。またアメリカの鉄鋼業をつぶすほど輸出したら外貨がたまり過ぎます。さうなると鉄鋼以外の輸出部門は大幅削減といふことになる。日本は鉄鋼業だけが巨大で、他の産業はなくてもいいのですか。日本はその特徴を生かして、あらゆる産業を等分に持つのがいいので、あまり巨大な産業はないほうがいいのです。だからアメリカのいふやうな自由貿易はいけないのです。

ここに、自由競争に対する大制約が必要になったことを日本は暗示してゐる。暗示ではない私に言はせれば明示してゐるのです。なぜさうなるかと言へば、それは人々が思ひもよらなかつた近代科学技術といふものの恐しさ、素晴しさなのです。近代科学技術はそれを身につけて総合的にアプライズすることになると、いままで考へられなかつた力を發揮するのですね。だから無限生産が可能であるかの如く見える。また運賃が非常に安くなったから、鉄鋼の例に見られるやうな現象が起る。事実はそのまで行かないでせうが、それに近い現象が起る。これは近代科学技術が、いままで人間が夢想だにしなかつた力を持ってゐるからで、いままでとは違ふビヘイビアが国にとって必要となつたわけです。いままでは自由貿易の制限は、輸入する側でやっていたが、これからは日本だけが唯一の例外国として、可能な輸出を自ら制限するといふ国になるのです。自ら制限するのは他ならぬ自分のためであり、相手方のためでもある。

さうしないと相手をつぶし、相手をつぶすほどこちらが巨大になる。さうなると日本の国の姿は悪くなるのです。

自由貿易理論といふものは、値段の考慮からスタートしたもので、安い商品と相互に交換することが、進歩の源泉だと考へた。ある程度それはさうでしたが、それにも限度があつて、日本の如く近代科学技術を使ふことにおいて著しく優れてゐて、他の追隨を許さないやうな国は輸出を規制するのが当り前となつてきたのです。そこがさうと本当にわかれば、全世界は、この世界経済秩序の在り方といふ面では、暗中摸索ではなくなります。日本はいまや世界に率先して、自らさういふ新例を開かざるを得ないことになつた唯一の国です。これが新しい日本のリーダーシップなのです。

GATTはいままで自由貿易を信条とし、やむを得ず制限する場合、輸入国の制限を問題視してゐた。それに対し、輸出国が制限するのだといふ新しい考え方をGATTに持ち込めばいいのです。それでGATTの難問題は解決するし、同時にIMFの問題が解決するのです。ドルを基礎にして作つたIMFはアメリカの大赤字で困つています。その赤字の原因は日本にあります。日本が輸出を制限すればアメリカの赤字はほとんどなくなつてしまひます。アメリカの赤字がなくてIMFに何の困難があるか、と私は思ふのです。ですからこのやうな日本の新しい態度は、自づからIMFの解決でもあるといふのが私の考へです。

次にUNCTAD会議ですが、この会議は後進国開発に関して、自由貿易理念を良しとしてゐる。だから後進国は輸出品の生産に懸命なのですが、まずいものしか生産できない。まずいものでも特に関税を安くして買ってくれといふのが特惠関税ですがこれも浅薄な自由貿易理念まる出しの考へですからうまくゆかない。

後進国に対して何がいいかといふと、これまた日本が模範を示せるのです。日本は全世界に対して輸出を押へようとしてゐる。その日本は後進国に対して、日本から買へば良質のものが安く手に入るかも知れないが、自分で使ふものは自分で生産したほうがいい、さうすれば早く工業化するし国全体の姿も良くなる。だから勉強になると思ふ商品を選んで、自分で生産したらどうか、日本はお手伝してもいいし、第一、日本から買わなくても結構です、といふ



のです。これはいまのUNCTADの後進国開発理念とはまるで違ふもので、いまのところ全
くの少数意見ですが、私はやがて多分さうなると思つてゐます。

新生日本に関する諸問題

中共の国連加盟と台湾の追放、沖繩国会終了、南北朝鮮の平和統一宣言、田中内閣の中共接
近と国内政策、これらはみな、**新・生・日・本**の誕生に際しての**生・み**の**悩・み**に**関・連**するものです。

中共の国連加盟は賛成だが台湾の追放は反対だ、といふ提案、これを日米が共同で提案し
ました。この提案をしたことによって日本の面子は救はれましたが、台湾はやはり追放されて
しまったのですね。さて、この事件をどう見るかといふと、私は国連といふものの正体暴露だ
と思ふのです。国連は世界平和をその憲章にうたひ、それに賛成な国をメンバーとする団体で
あった筈です。ところがいまは国といふ資格があれば、みなメンバーにするといふ性格に変へ
たといふことですね。中共が公に語つてゐること、それは世界革命であり、中共は国連憲章に
合はない国なのです。そうであれば国連に入れるわけにはいかない。しかし合はない国だけど
外におくよりは中に入れたほうが良いといふ論理もありまして（実は私もそれに賛成なので
すが）悪い信条を持つてゐるならば、一層入れたほうが良い、といふことでさうなつたわけ
です。

中共を国連に入れれば、中共は自づから変質してくるのです。いま中共は内部を隠してゐるが、自由な内部旅行は許さない。案内者付きで誰が行っても同じ所を見せる。同じ人民公社へ行つて同じ説明をきく。公社本部の経理は説明するが、それを構成してゐる各農民の生活上の経理は、質問しても答へないさうですが、要するにかうしていればなかなか外部に実情は暴露しません。が、国連に入れば隠すことはできなくなる。外を見た中国人が国内に帰つて反省もするでせう。あのマルクス、レーニン、毛沢東思想といふのは間違つた思想で、ああいふものにしがみついてゐる中国七億の国民が可愛想ですから、早く捨てさせるがよいのですが、それは国連に入れて外部を見せるのが一番良いのです。

ただし台湾を国連から追ひ出すのはいけない。中共は、台湾は自分の領土だと言つてゐますが、決してその力は及ばないし同じことを台湾も言つてゐるわけで、台湾が立派な国であることは明確なのですから、両者とも国連に席があるのがよいのです。台湾が全中国を代表するものとして国連に席をもつてゐたのも虚構に立つものですが、台湾は国ではない、中共の一部だといふ中共の主張、即ち中華民国といふ国は存在しないと認めることは、それこそ虚構に立つものですね。われわれは事実即ち考へ方をすべきだし、国連の場では中共が入るのは賛成だが台湾追放は反対だ、といふのがその主張でした。しかし多数決の場でそれは認められずああいふ結果になつてしまつたのです。

それから沖繩国会の終了ですが、これは日本にとっては大変なことだったのです。私は佐藤さんが総理になられてからの八年間に、真剣になって進言したことが二回だけあります。その一つが沖繩国会です。私は、ニクソンの訪中ショックとドル・ショック、日本の中共傾斜、このやうに国論が割れてゐては、沖繩法案は通らないのではないかと思つた。通らなかつたら佐藤さんは当然投げ出すでせう。ところがあの当時の事情として後継者がゐらないのです。ですから私は、超非常時突入だといふ言葉を使ひながら、それを避けるにはどうしたらいいかといふ一案を出したのです。私は、佐藤さんとは長い付き合いですが、このときが佐藤さんからリアクションを得た唯一の機会でした。「自分もさう思はないわけではないが、そこまでやらなくてもいけると思ふ」といふのが佐藤さんの言葉でした。しかし関連法案が通つたのは、ぎりぎりの十二月三十一日。まさに紙一重、実に危い国会だったのです。

私の案といふのは、要するにアメリカが二つのショックを与へ、国論は割れてゐる。その中の沖繩国会、だからこれは国会の解散を要することだが、いま解散したら国民は何を聞かれてゐるかわかるまい。そこで、総理はテレビ放送をやる。沖繩を主とし、国防や中共問題、あるひはアメリカの転落など、すべて大筋で説明するのです。放送後の記者会見はしないほうがいい。新聞記者はポイントのはづれた質問をして国民を惑はすから、質問は書面でくれと言つてをく。一週間ぐらゐしてその放送を国民がどのぐらゐ聞いたか、わかつたかどうかを、○×

式でいいから世論調査方式でテストする。テストの結果は、おそらく国民はあまり聞いてゐない、あまりわかつてゐないといふ結果にならうからまた放送をやる。三回ぐらゐやれば、国民はわかつてくるでせう。わかったら国会を解散してもいいのですが、その必要はなくなる筈です。

この案は名案だと思ふのです。沖繩国会の場合のみならず、国民の意志が反映してゐない現代の議会制民主主義の欠陥を改める手法がそこに入つてゐるのです。例えば日本列島改造論みたいな粗末なものを、マスコミに乗せて世論を作り、それで投票をかせごうとする。これは国民の意志を聞いたものではありません。政見発表など、あれはごまかしです。だから国民は政治がいやになるのです。中共問題であらうと大学問題であらうと、国民はそれに対し、まだ意志といふべきものを持たないのです。しかし、大筋で説明すれば、国民は実によくわかる。形式依存の議会制民主主義の欠陥を是正するには、わかつたかどうかを○×式でいいから調査する。そして大問題は国民投票、小問題についても、国民投票に代るものを実施する。これはいい案だと思つてゐます。

次は南北朝鮮問題です。これもマスコミが書いてくれないから困るのですが、平和統一の共同宣言は、韓国側のイニシアティブで始つたものです。以前は韓国では、南北統一を言ふことす

ら、絶対にご法度だったのです。北鮮に利用されますからね。その御法度を、韓国政府は自ら破ったわけです。北鮮は昔から武力統一を叫んでゐたのですが、急に昨年から止め始めた。これも世界の動き、なかんずくニクソンの訪中によるわけでせう。それに対して遅れてはまずいといふ考慮もあり、世界の動きを見て朴大統領は自らイニシアティブをとつたらしいですね。韓国は大変な進歩を示した国ですが欠陥も多い。その欠陥が一時に暴露してきて、此の頃は非常事態宣言で押へてゐる現況です。平和統一問題は、北鮮から攻勢がある、やむを得ないから逆攻勢をかける。しかしやはりまだ北鮮に利用されてゐるといふ形でせうね。

南北が共に平和統一を志向してゐるならば、北鮮も国連の場と呼んでいいではないかといふことになります。今度は朝鮮問題国連になり、韓国と並んで北鮮が国連に席をもつことになると思ひます。さうなるとこれはまた、表面的には国連の自殺行為なのです。ご存じないかと思ひますが韓国といふ国は、国連が認めて作った唯一の合法政権で、北鮮は国として認めてゐないのです。一九五〇年、北鮮が突如なだれこんできた。あのときアメリカは国連軍の名において戦つたのです。ですからいまでも、アメリカは国連軍として駐留してゐるのですが、南北が平和統一を話合ふとなると国連軍駐留の必要はなくなる。即ちアメリカ軍は引きあげることになる。さうなつたら北鮮は、韓国に内部攪乱をひき起し、それに乘じて攻め込んでくる、そんな事態も考へられないことではないのです。これを防ぐのは非常にむづかしい。防ぐ唯一の手

段は韓国が猛烈な外交攻勢をかけることですが、アメリカが引きあげ態勢にある、その支へがなくなるので甚だむづかしいのです。その結果、非常事態宣言をせざるを得ないところに追い込まれてゐるわけですね。もう一つ困るのは日本の態度です。日本の態度がきちんとしてゐれば、それをバックにやれるのですが、いまは中共に対しても怪しげな日本政府ですから、後押してくれるとは思へない。だから韓国はいま大変むづかしい事態にあります。

最後は田中内閣の中国外交、国内政策についてです。田中内閣になってから中共の呼びかけの激しさ、これほどとは思はなかった。これを見てさすがに日本人は、ニュースは知らないけれども勘は早いから、あせっているのは中共だな、と多くの人は言はず語らずのあいだに気が付いて来た。かうなればこちらは落着けばいいのです。

中共の国交正常化三原則、それは北京政府が中国の唯一の合法政府だ、台湾は中国の不可分の領土だ、したがって日華平和条約は本来不法であり、日本は台湾と外交関係を結ぶことはまかりならぬ、といふものです。その三原則を認めてゐるのは三木さんですが、田中総理は三木さんを外務大臣にしなかった。だからじっくり構へてやるかも知れないと思つてゐました。じっくり構へるには、要するに「お前とは国交を結ぶが台湾との関係は現状のままだ」と言ひさへすればよいのです。国連で台湾を追放しなかったら満点であつたやうに、日中国交正常化を

やって台湾との関係をくづさなければ、それで満点です。

もっとも、中共と国交を結べば、中共は工作員を送り込んで日本を左翼と結合し、日本に共産革命を起す恐れがあると心配されるとありますが、その心配を無視してはいけません。私はあまり心配いたしません。日本人はそれほど馬鹿ではなく、日本の実態は実にいいものなのです。しかも現時点では、なぜ日本は素晴らしいかを、まだ日本人は半分ほどわかりかけてるに過ぎないので、油断は出来ませんが、それでも中共が日本共産化の工作を進めればすぐに暴露して日本人は所要の警戒心を持つことになりませう。その上共産主義といふものはイズムとしてはすでに死滅してゐる。死滅してゐるものにすがりついてゐるから、ソ連では怠けてばかりゐるといふ状態、中共は次から次へとナンバー・ツウを抹殺し、いまだに殺し合いが続いてゐる状態なのです。かういふ共産主義の実態は、国民にもかなりわかつてきたから、いまさら日本が共産化されることはない。心配は感じるけれども、凌げると思ふから私はひどくは気にしないわけです。ところで中共承認の利益の方は、彼に必ず変質が起る、彼の内情もよくわかる、だから私は台湾との関係を崩しさへしななければ、日中の国交は歓迎に値すると思つてゐるのです。

ところが最近政府は「台湾との関係は、日中が正常化すれば当然の帰結として外交関係は結ばなくなるであらうと考へられる」といふ考へを発表し、大平外務大臣もそれを公式に認めま

した。かうして田中内閣は、私の期待してゐたところと違つて、台湾と断交する路線を走り始めた。これは日本にとって由々しき大事です。新聞を見れば世論は日中正常化をバックしてゐると言ふのですが、国民は真相を知らされてゐない。新聞は勝手に書いてゐるので、これは決して国民のコンセンサスではないのです。この問題はさきにも言ったやうに、本当は国民投票ものです。ところが政府は、国民に真相を語ることなく、日中問題を決めようとしてゐる、これが田中内閣の中国外交の姿勢です。

次は国内政策ですが、田中さんはばりばりやることをもつて得意としてゐます。そのばりばりやることが良くないので。いま全世界が暗中摸索なので、特に日本は、ゆつくり考へてゆつくり進んで欲しい国なのです。日本は経済力が溢れて困つてゐる。だから例へば公害排除にも積極的に取組めばいい。国土美化、公害排除。それから東京と大阪の人口を東北や裏日本に分散させること。これが三大政策だと私は思ひますが、それをやるのに、国民にわかせながら、ゆつくり落着いてやればいいのです。私のいふ人口分散と同じやうなことを言つてゐるのが日本列島改造論なのですが、これが極めて官僚的な発想なのです。あれは大失敗に終るだらうと私は思つてゐます。

もう一つは黒い霧問題です。中国外交と、ゆつくり考へないでばりばりやること、それに黒い霧問題、この三つで田中内閣には大破綻の危険があると思ひます。どっちみち日本は、これ

から非常時になると私は思つてゐる。しかし政治といふものはわからないものですから、田中内閣では一〇中八、九うまういかないと思ふけれども、一割か一割五分はうまういくチャンスが残つてゐるわけです。うまういかなかった場合、誰が見てもどこが悪くてかうなつたかがわかりますから、この治療はやさしい。なぜ日本がいいのかが半分ぐらゐるわかりかけてゐる日本人ですから、田中内閣の破綻に対処することは、容易にできるでせう。

以上沢山のことをお話しましたが、そのやうな世界の動きを総合して解釈すれば、要するに世界は新しい体制に入らねばならぬ、なにかんづく日本は、これまでとは全く違つた日本に生れ変らねばならない、といふことを強く迫られてゐる事態なのです。これを悲觀的に見る人は、すぐ暗い未来を想定する。それも必要ですが、これを乗り切るには、その事態をよくわきまへた上で、かうすればいいのだと考へついたことを、積極的に楽しくやってみることでせう。社会科学方法論でも申しましたやうに、客観的データが揃はなくても、かうだと思へばそれでいいので、やってみしまへばいいのです。客観情勢なんか押し飛ばしていく、さういふ日本人になつて欲しいですね。しかしなかなかないでせう。だから日本は実に危いのです。日本はいま明治維新の試練ほどではないにしても、その何分の一かの試練に直面してゐるのです。事態をわきまへながら、猛烈な積極的態度をとつて欲しいですね。(世界經濟調査会理事長)

「日中国交正常化」の問題点

山本勝市



はじめに

問題点の整理

中華民国の恩義

事実を認識せよ

日本のとるべき態度

はじめに

御紹介にあづかりました山本でございます。私は今年の三月二十日に満七十六才の誕生日を迎えました。余命いくばくもないと感じてをりますが、「日中国交正常化」の問題については日本が進路を誤らぬやうに全力を尽してやっています。実はこの会の前身の精神科学研究所の頃、確か昭和十五、六年ごろだったと思ひますが、その頃からこの会の諸君に大きな期待をかけてをりました。今度招かれて、私の最も深い関心を持ってゐる問題について、皆さん方に聞いて頂く機会を与へられたのは何よりの喜びであります。私は最近、ものを書いたり、しゃべったりする時に、これが最後の遺言だと感じながらやっています。どうぞそのつもりで耳を傾けて頂きたいと思ひます。

実は昨日、私も木内先生のお話を聞かせて頂きましたが、その後で社会人班の方との懇談会の時に質問された件につき、二点だけ補足させて頂きたいと思ひます。その一つは、中国問題に関する限り、日本のマスコミは本当の事を伝へてゐないといふ点です。このことについては毎日新聞の元編集長の三好修氏や東大教授の衛藤藩吉氏が「経済往来」や「文芸春秋」に細かく証拠を上げて説明していらっしやいますのでくりかへしませんが、私なりの二、三の例を申し上げます。一昨年の五月だったと思ひますが、台湾と縁を切つて、北京と結ぶことに反対の、百

何十名かの学生諸君が、東京の数寄屋橋公園で一週間断食をしたことがあります。全国では千数百名の、青年学生諸君が断食して反対の意見を表明した。これは賛成、反対にかかはらず新聞種にならぬはずはない。しかし北京の感情を害するといふ新聞社の配慮によって一切報道されませんでした。又、東京で世界反共会議が開かれ、アメリカの上院議員のサーモンドやキューバのカストロの妹などが熱烈な演説をやりましたが、産経が小さく書いただけで、ほかの新聞は黙殺しました。労働組合でも、成田の農民でも、北京へ行った場合はすべて書くが、国会議員が大勢台湾に行っても全く報道しません。

これは最近中央アフリカのある共和国でのことです。この国はもと台湾の国民政府と国交を開いてゐましたが、その後北京へ乗り換へた。ところが北京政府がその国の革命運動の援助をしたといふので、北京と縁を切り、再び国民政府と国交を回復して大使が台湾に赴任してゐるのです。これは新聞記事にならぬはずはないのに日本の新聞は一言も書きません。かういふ実例



を見ますと、台湾ないし中国大陆に関する知識の源泉としての日本のマスコミは、本当のことを伝へてゐない。さういふ間違つた認識の上に立つた世論は、本当に尊重さるべき世論とは言へないと思ひます。

もう一つは国連についての認識です。日本では国連中心主義などといって、かなり国連に大きな価値を認めてゐますが、国連については、過大評価も、過少評価もいけません。まづ第一に、今の国連憲章は一九四五年六月に、当時の連合国側（後の戦勝国）の五十ヶ国が満場一致で決めたものです。戦勝の見通しがついた頃に、戦勝国の立場で作られた憲章です。ですから憲章の中には「敵国条項」があり、日本やドイツはその中に入つてをりません。第二に、国連は初めから、いはゆる民主主義の原則では作られてゐない。敵国条項の適用を受ける国もありますし、同じ加盟国の中でもアメリカ、イギリス、ソ連、フランス、中国の五つは安全保障理事会の常任理事国で拒否権を持つてゐる。この五ヶ国は、この前の戦争で中心的役割を演じたといふ理由で永久的に特別な地位を与へられてゐます。その他不合理な面はいろいろあります。例へばソビエト連邦は国連において三票持つてゐます。（二十五の共和国のうち、白ロシア一票、ウクライナ一票、他の二十三の共和国で一票）アメリカはもちろん一票です。これでは本当のデモクラシーとは言へない。それから、東欧の衛星国やアジアのモンゴルなどは、判で押したやうに必ずソ連と同じ側に投票する。かういふ風にして決議されるのですから、われわ

れが日本の運命を国連の表決にゆだねるといふことには充分の注意が必要だと思はれます。

問題点の整理

本論に入りたいと思ひますが「日中国交正常化」といふ場合、「日」はもちろん日本、「中」は中国のことに違ひない。しかし、中国といふ国号の国はないのです。それが国号のやうに使はれるところに紛淆を来す原因の一つがあります。中国文明とか中国の歴史とかいふ場合の中国は必ずしも国家を意味しません。われわれは漠然と中国といふ言葉を国号のやうに使ひますが、実際に存在してゐるのは中華民国といふ国号の国家と、中華人民共和国といふ北京に政府のある国家との二つなのです。台湾にあります中華民国の政府は自分こそ中国の唯一の正統合法政府であると言つてゐます。北京政府は暴力によつて領土を占拠したにせの政府である。彼らが占拠して二十年になるが、われわれは一度も彼らに領土を譲つた覚えはないといふわけです。丁度、北方のハボマイ、シコタン、エトロフ、クナシリの諸島を二十何年間、ソビエト軍隊に占拠されて、日本の支配権が及んでゐない。けれども暴力によつて不法に占拠されたことを認めるわけにゆかない。国民政府が中国大陸に対する考へ方はそれと同じことなのです。

ところが北京の方はどう考へてゐるか。なるほどとは中華民国といふ国号の国を率ゐる国民政府が中国の正統政府であつた。しかし、われわれは革命に成功して、一九四九年十月一日

に、北京において政權樹立の宣言をした。蔣介石はその年の十二月に台湾に逃げて行った。さういふものは禁治産の宣言を受けたやうなもので、われわれこそ主人公であると言ひ張つてゐます。北京からいへば、台湾にあるのは「蔣介石の敗残兵の集り」であり、台湾からいへば北京政府は「毛の暴力集団」といふことになります。

そこで、一九三七年から四五年まで八年間、日本が戦争をした相手はどこであつたかといふ問題になります。それは蔣政權が率ゐてゐた中華民国であつた。一九四五年、九月二日、ミズリ一号上で日本の代表が降伏文書に調印しましたが、中国側の代表徐永昌ジョー・エイン・ウウといふ方は国民政府の代表であります。その時はまだ北京の政府はできてゐない。それから四年半経つて、北京政府ができたのです。ところが、日本の敗戦から講和条約の締結まで非常に長い時間がかかりました。長引いたのは日本の責任ではない。これは戦勝国側の、主としてアメリカとソ連の間の意見の衝突のために長引いたのです。そして、長引いてゐる間に中国に革命が起つて、北京政府と国民政府といふ二つの政府ができてしまつたのです。

そこで、昭和二十六年、サンフランシスコ平和条約を結ぶ時に、どちらの政府を選ぶかが問題になつたのです。その当時、イギリスは北京政府を承認してゐました。これにはいろいろな事情がありました。当時労働党内閣が政權を取つてゐたのと、香港をかかへてゐる關係上、北京の感情を害しては香港が危いといふ事情もあつたでせう。いづれにしても、イギリスは北京政

府を承認した。アメリカは国民政府を承認した。承認するしないは、その国の自由で、その時その国の大半を支配してゐなければならぬといふ国際法上の根拠はありません。分裂国家の場合、人口が多く、面積が広い方が、本場の代表だと決めなければならぬ理由はないのです。もしそのやうに決められるのならば、韓国と北朝鮮の場合は前者が正統政府になるし、西ドイツと東ドイツの場合も同様に前者が正統政府となり、後者を認めたり、それと条約を結ぶのはすべて間違といふことになります。しかし、誰もさう思ふ者はゐません。ですから、正統か正統でないかと判断する時、広い狭いといふことは問題ではないのです。そこでアメリカは国民政府を正統なる政府と認めて、いろいろな条約も結びました。

日本は正統なる政府として国民政府を選びました。その理由は大体九つほどありましたが、まづ第一に、国民政府は当時国連における安全保障理事会の常任理事国であつて、世界の六十何ヶ国から承認されてゐる。北京を承認した国は二十何ヶ国で、それも大部分は共産国家であつたのです。もう一つは当時朝鮮戦争があつて、中共からは義勇軍の名において兵隊を出して国連軍と戦ひ、国連総会で侵略国といふ決定を受けてゐました。更にもう一つあげますと北京政府はソ連との間に中ソ同盟といふ軍事条約を結び、仮想敵国としてはっきり日本といふ名をあげてゐる。さういふ国を承認するわけにはゆかぬといふやうな理由で、国民政府を代表に選んだのです。すなはち、台湾にある中華民國との間に平和条約を結び、国交の回復をした。そ

の条約の中に通商その他いろいろのことを入れて友好関係を結んで今日に至ったわけです。その結果、中国大陸の八億の人口を支配してゐる北京政府との間には正式な外交がない。非公式に貿易をしたり、人事の交流をしたりして、さういふものを積み上げて今日に至つてゐます。

しかし、八億の人口を支配してゐる隣の国の政府と公式の外交関係がないといふのは、何としても不正常である。北京との外交関係を開くべきだといふのが「日中国交正常化」といふことの意味でせう。ここで問題なのは、大多数の国民の素朴な感情は、どこの国とも仲良くしよう、台湾の人々とも、北京政府の下にある八億の人々とも仲良くしたいといふところにあるのでせう。だから、もともと日本国民の気持は、台湾と国交を断絶して、北京に乗り換へようといふのではない。ところが、北京の方では、自分こそ唯一の代表である。台湾は中華人民共和国の領土の一部だといふことを認めなければ、日本との国交は結ばぬといふのです。そして、日華平和条約は、既に権限も資格もない人間と結んだものだから無効だ、もう一遍平和条約を結び直せといふのが北京の要求であります。そこで国民の中に二つの意見が出て来た。中国大陸の八億の人間と仲良くするためには、台湾の千五百万の国民との友好関係は犠牲にしても仕方がない。国民政府には悪いけれども、目をつぶってやるより仕方がないといふ考への者が、国民の中にも、政治家の中にも出て来ました。しかし、その反対の意見もあります。われわれは台湾から北京に乗り換へようと言つたのではないのだ。台湾とも北京とも言つたのだから、

北京の方で台湾と切って来なければいけないといふなら、しばらく待つより手が無いといふわけです。かうして「日中国交正常化」といふものが、単に自民党内だけではなく、国内全体で大変な議論のまよになつて来たといふ次第なのです。

中華民國の恩義

台湾と北京といふ二人のお嬢さんがあつて、どちらと結婚するかといふ時、北京の方がいい台湾の方がいいと考へることはできません。しかし、日本は既に台湾と結婚して、籍も入つてゐるのです。だから、独身の者が娘二人のうちどちらかといふ時の話とは今は違ふのです。

日本が戦争をしたのは、蔣介石の率ゐる中華民國であつたのです。戦争直後、私は国会議員をしてをりましたが、日本国民が一番心配したのは中国大陸にゐた二百何十万の軍人と民間人の帰還の問題でした。満洲からはシベリヤへ何十万といふ人間が引つ張つて行かれた。同じやうな目に遇つたら大変だと心配してゐたのです。昭和二十年八月十五日の終戦の日に、ワシントン、ロンドン、モスコ、中国の重慶、この四ヶ所で、各国主脳により同時に日本の降伏が発表されました。その時、蔣介石総統は、「中国の軍民各位並びに全世界の人士に告ぐ」といふ長いラジオ放送をしてをります。蔣介石はクリスチャンでもありませんので、神様といふ言葉も出てまゐりますが、彼はこの放送の中で一切の報復的な処置を禁じ、「恨みに報ゆるに徳

を以てする」といふ中国古来の美德を強調してをります。われわれは、二百二十何万といふ同胞の帰還は、恐らく三、四年はかかるであらうと思つてをりましたが、向うは一切の船舶を動員して、極めて短い期間（十か月）に全員を故国に帰してくれたのです。しかも持てるだけの物を持たせて。

戦争の終る二年前、昭和十八年の暮に、アフリカのカイロで、ルーズベルト、チャーチル、蒋介石の三人が会談してをります。会談の前日、ルーズベルト大統領は蒋介石を夕食に呼んで日本の天皇制をどうするかといふことで相談してゐます。連合国側には廃止論がかなり強かつたのですが、日本の士官学校を出て、新潟県の新発田の師団に配属された経験もある蒋介石は、日本人の国民感情をよく理解してゐましたから、天皇制の問題は日本人自身が決めるべきことだと主張したのです。後のポツダム宣言で、日本の政治の最終形態は日本人自身が決めるといふ言葉が入つたのは、その時の蒋介石の発言が大きく影響したと言はれてゐます。又、いよいよ占領といふ段階になつて、極東委員会などでは、ソ連は北海道と東北、中国は九州、イギリスは四国、アメリカは本土といふやうな分割占領が、特に、ソ連あたりから強く主張されました。その時も蒋介石は、最近まで彼の秘書長をつとめてゐた張群氏を何回かマッカーサーのもとによこして、分割占領案を拒絶して、アメリカの単独占領にもつてゆくやうに努力してくれたのです。賠償の放棄も誠にありがたいことです。サンフランシスコ条約では、日本の役務賠

償を請求できることになってをり、現に台湾の高雄で蔣介石と会談したフィリピン代表など、八億ドル、九億ドルといふやうな要求を出したのですが、蔣介石の努力によって、その額はずつと少くなつてゐます。かういふ恩義に対して、かつて石井光次郎氏が蔣介石のところに行つて深い感謝の意を表した時、あれは東洋の道義を行つたまでだ。その東洋の道義を自分に教へてくれたのは、日本の先覚者だ。だからお礼を言ふならさういふ人たちの墓へ詣つてお礼を言ひなさいと言はれたといふことです。石井さんはお面を一本バーンと取られた気持がしたといつてゐます。

さういふ台湾と縁を切つて、北京に乗り換へるといふのは、日本人の背徳行為、背信行為になる、永久に日本人の名譽を傷つけることになると思ひます。台湾の宇山大使が帰つて来て言つてをりました。今、台湾に常駐してゐる日本人が三千八百人ゐるのです。高雄と台北には、何百人かを收容する日本人の小学校もあるのです。蔣介石総統や張群さんや蔣経国さんのやうな主脳部の方は、どんなに関係が悪くなつても、三千八百人の人の生命と財産は断じて守りますと言はれる。しかし日本を信頼してやつて来た台湾の青年諸君や一般民衆は裏切られたといふ気持から、どんな反撥を起すかわからない、と大変心配してをられます。日本人は簡単に考へてゐるかも知れませんが、向うから見れば、長い戦争の恨みを忘れ、賠償を取らず、貿易の面でも日本への輸出よりも、日本からの輸入が遙かに多いといふ状態を維持して来たのに、日

本が台湾を共産党の支配に売り渡すやうなことをしたら、どのやうな憤りの気持になるでせうか。

私は日中国交正常化についての、いろいろな意見を一つ一つ吟味してみました。ほとんどが錯覚や幻想の上に立てられてをります。事実をはっきり認めた上で立てた議論ではないやうに思はれます。

事実を認識せよ

日中国交を望む国民感情の基礎は、八億も人間のゐる隣の国と仲良くしたいといふ素朴な願望です。しかし、国交を開いてみても、中国大陸にゐる八億の国民と日本人とは、個人的に付き合ふことは許されないので。政府の要人や政府の使命をおびて来たピンポンの団体といふやうなものとは付き合へる。しかし個人同士の接触は許されないので。現在中国と国交を開いてゐる国が七十何ヶ国ありますが、そのどの国民も、政府が選んだ官選通訳を抜きにしては中国国民と接触することができない。共産国家はこの国でもさうですが、中国の場合も、中国大陸から日本へ個人の資格で旅行の許される者は一人もゐない。その上かつての日本人であり、今も日本語を語つてをる台湾の千何百万人の国民との付き合いは断絶しなければならなくなる。台湾の友だちは失ふ、北京とは個人的に友だち付き合いができないとなると、さうあわ

てることはないといふことになります。

その上、中国大陸では、何が起るか分からないといふのが実相である。劉少奇がやられた。林彪がやられた。文化大革命が起った。これらの大事件は起る瞬間まで、誰も予想できなかった。さうして、一九六一年以来、中国大陸では経済の統計数字を一切発表してゐません。それから、日本の国会に当る全国人民代表大会は、憲法では毎年一回開く定めになってゐるのに、一九六四年十二月以来、今日まで約八年間一度も開かない。むしろ開けないのでせう。又、中国大陸からは非常に沢山の青年が外へ逃げ出す。香港が一番多いのですが、今年になってからでも八千何百人泳ぎ着いてゐる。ことに紅衛兵で猛烈に働いた連中がやりきれなくて逃げて来るのです。大陸がそんなにいいなら、親兄弟を捨てて命がけで逃げ出すことはあり得ないことです。又、国民所得についてみても、台湾の国民所得一人当りは、大陸の国民所得の四倍近くある。大陸の国民の一人当りの国民所得は、台湾の三分の一に及ばないのです。しかも、台湾の経済成長率は非常に高い。そこで、大陸との生活の開きはどんどん開いて来るといふ状況にあります。

それなら、なぜ北京との国交をそんなに急ぐのでせうか。二十何年間、正式の国交がなくて非公式にやって来たのに、中国の対外貿易額の中では日本が一番多いのです。中国の貿易の二十数%、三割近くを占めてゐるのが日本で、他の国に比して飛び離れて多い。しかもそれが、

中国が絶えず悪口を言つてゐた佐藤内閣、「中国を敵視してゐる」と常に非難してゐた佐藤内閣の下における貿易です。さうして向うでは盛んに日本人を歓迎してゐる。こちらには急いで国交を開く理由はないじゃないかといふことになります。

それに対してはいろいろな反論があります。例へば、もと外交官だった松本俊一氏などは、周恩来が生きてゐる間にやらぬとやれぬのだといふ。周は現実的な政治家だから、彼が生きてゐるうちにまとめねばならぬといふのです。しかしそんなことは、中華民国やアメリカや韓国のやうな日本の古い友人を捨てずにやれるのなら別ですが、古い友人関係が悪くなってまでやらねばならぬといふ理由にはなりません。

それから、大きな貿易に期待をかけてゐるといふ人も大分ありますが、これがだんだん錯覚であることが分つて来ました。中国大陸の外国貿易総額と、台湾のそれとを比べてみますと、今年あたりは台湾の方が多い。だから中国大陸の貿易額をまるまる日本が独占できたとしても知れたものです。昔は満洲にあった日本の会社や関東軍が沢山の品物を日本から買ってゐました。それらのものを全部引いて考へますと、日本との貿易額は戦前のそれとほぼ同じくらゐの率になつてゐる。もっとも日本の貿易額が大きくなったから、日本の全体の貿易に占める中国貿易の率は減つてゐるが、中国の側からみると、日本との貿易に占める割合は、ほぼ戦前に達してゐるのです。ですから、もうそんなには伸びないと思ひます。

このやうに、国全体からみた貿易相手の中国は大したことはないのですが、個々の会社について言へば問題は別です。例へば、硫酸の会社が、その生産の半分を中国大陸へ売るつもりで設備を拡張してゐるとします。もし中国で硫酸を買ってくれなければ、赤字が出て重役が首になる。その会社としては生死の問題です。鉄鋼会社でも同じでせう。くらげや甘栗などを輸入してゐる会社が、もし取引できなかつたら、生死の問題になりますから、真剣に政治家に働きかけて、盛んに中国と結べといふことをやるのです。一方中国のやうな国は、消費者が欲しいといふので日本から輸入するのではなく、政府が考へて、独占的にこれは入れる、これは入れぬといふことを決めるのです。そこで日本にゆさぶりをかけようとすればまづ日本で政治的にかなり影響力のあるやうな人と貿易を結び、抜き差しならぬやうな関係を作つておいて、言ふことを聞かなかつたら切るぞとおどすのです。その人間は血みどろになつて、国交を開けと政府に迫つて来る。かういふ事情が一つあるのです。

国交を開くことを主張する人の表面の理由の一つとして、昨年第二十六回国連総会において、一九五〇年以来二十何年間もの間続けて来た中国の代表権問題に決着がついたといふ事実があります。すなはち北京政府が中国の正式代表として籍を占め、台湾は脱退した。追ひ出されたといふのですが、その前に台湾は自分で脱退したと言ふのです。どっちが本当かわかりませんが、ともかく台湾の国民政府は国連からゐなくなつた、日本は国連中心主義で、国連尊重

の建前上、国連の代表権が変れば、この機会に北京を正式代表とするやうに変へるべきだといふ意見、これは政府にもあるし、かなり有力な意見です。皆様の中にもさういふ考への方があ
るかも知れません。しかし、これについて、まづ考へなければならぬことは、国連に加盟して
ゐる百三十何ヶ国の国は、日本だけでなく、すべての国が国連の決議は尊重するといふ建前で
来てゐます。にもかかはらず、中国代表権の問題で、国連で決つたところに従つて態度をきめ
たといふ国は、加盟国の中でただの一国もありません。イギリス、スエーデン、ロシヤなどの
国は、国連で北京が、代表だといふ案が否決されたからといつて、国民政府に乗り換へてゐな
い。また昨年北京政府が代表権を得たけれども、アメリカは国民政府との国交を続けてゆく
はつきり言明してをります。ではイギリスやアメリカは、中国代表権の表決の結果に左右され
なかつたから国連の決議を尊重しなかつたのかといふと、さうではない。それは中国代表権問
題が初めて国連において問題になつた年に、国連総会は代表権問題に関する決議といふもの
を行つた。具体的に言ひますと、一九五〇年十二月十四日に行はれた「国連総会決議三九六号の
五」の第四項といふものです。それは「この国連の委員会または総会において代表権に関する
いかなる表決が行はれても、そのことは当然に各加盟国の当該国との關係に直接に影響を及ぼ
さざること宣言する」といふのです。これはどういふことかといふと、仮に中国代表は国民政
府と決まつても、北京政府と国交を開いてゐるものはそれをやめて国民政府と国交を開かねば

ならぬといふものではない。また北京政府と決まっても、国民政府と国交を開いてゐるものがそれをやめて北京に乗り換へる義務はないといふ決議なのです。だから、イギリスが北京との国交をやめなかつたのも、アメリカが今後も台湾と国交を続けてゆくのも、共に国連の表決に違反したのではない。もし日本人が、国連で表決があつたから、国連尊重の趣旨に基づいて、台湾との国交を切つて北京に変へるのだと言つたら、アメリカやイギリスは国連決議を尊重しなかつたと言はんばかりに響く。国連できまつたのだから、かうしなればならぬと考へるのは大間違ひなのです。北京と国交を開くならば、それは政策上いいか悪いかの問題、日本の国益になるかならぬかといふ問題によつてきまるべきものです。

日本のとるべき態度



そこで日本はどういふ態度をとるべきかについて、最終的に次のやうに考へます。第一は、日中国交正常化の目標は、台湾住民を含めて、全中国人との末永き友好関係の実現におく。これをまづ大前提におきます。日本とチャイナとの間の国交正常化とは、決して大陸との間だけの問題ではありません。

第二に、台湾に住んでゐる住民との間に存在する友好関係を犠牲にするやうなことはしないといふことです。台湾に国民政府がなくなつたのなら別ですが、台湾には敵として国民政府が存在してゐる。よその国のビザを持つても台湾には行けません。そこに国家があり政府があるといふ事實は、論理をもつてしても、言葉をもつてしても、国連の表決をもつてしても否定できない現実のたしかな事實なのです。ここに政府があり、すでにこれと国交を結んでゐるのを絶つといふやうなことはできない。これは、全中国人と友好関係を結ぶといふのが目的だから当然のことです。一度締結した条約を勝手に一方的に破棄しないといふことは、憲法九八条の第二項にもはっきりと書いてあります。憲法に書いてなくても当然のことですが、日本国が調印をし、国会が批准をして立派に成立した条約を、日本から一方的に破棄することがあつてはならない。ソ連は日本と結んだ条約を一方的に破棄して侵入して来たので日本人は今日なほソ連に対して恨みを持つてゐる。さういふやり方を日本はしないことです。だから日華平和条約を破棄するとか、それが不法無効だなどと考へることは絶対にしない。

第三に、日中間に存在した戦争は一九五二年の八月五日、日華平和条約が効力を発生したとき、法律的にも戦争は終わったといふ立場を譲らないといふことです。なほ、日華平和条約には適用地域の限定があつて、「国民政府が現に支配してゐる所ならびに将来支配する所に適用する」と書いてあります。しかし、戦争終結などといふことが、一国の一部についてだけ行はれるといふのは無意味であるから、さういふ条項については、この地域適用限定条項の適用は受けないと解釈すべきです。

第四に日本とアメリカとの関係はもとより、日本の既存の外交関係を損はないといふ配慮が必要です。

第五に、互恵平等の原則にとづき、日本にゐる中国人と、中国に滞在する日本人には、同じ程度の自由活動をみとめるといふことです。これは共産国家が相手である場合には非常にむづかしいことです。例へば、新聞記者を交換した場合、日本では取材の自由、報道の自由を与へる。しかし、北京へ行ったら、取材の自由も報道の自由もないといふことになれば、互恵平等でも何でもない、非常な不平等条約になってしまう。これは実際問題としては実行することがむづかしいが、少くともそれを主張する必要があります。また、内政不干渉の原則を履行させるべきです。しかし、他国の革命運動を支援することは、中国の国としての一つの方針です。今年の一月、フィリピンの代表団が北京を訪問したとき、周総理にかういふことを言った

さうです。フィリピンには数千人に及ぶ中共系の武装集団がある。フィリピンが中国との間に友好関係を結んだ場合、武器援助や革命の煽動をされると困るから、さういふことをしないと、いふ約束をしてもらひたいと言ったのです。周恩来は直ちにそれに答へて「それはできない。各国には抑圧階級と被抑圧階級があり、少数民族がある。不平等な抑圧に対して、抑圧されてゐる者が反抗し、革命を起すのは当然であり、それを助けるのはわが中国の国是である。国の掟である。だからそれをしないと、いふ約束はできない。出来ないが、それをどう取締るかはそのあたりの勝手だ」と言つたといふ。ですから、ニクソンが行つた時、上海でアメリカと中国との共同コミュニケを出しましたが、その中にも、日本の軍国主義反対と、日本における民主独立運動、つまり共産勢力を断乎支持するとうたつてゐます。これは日本の名前を上げて書いてゐますが、考へてみると中国の国是である以上、どこの国に対してもさういふ態度をとすることは当然です。内政不干渉といふ言葉は、平和五原則にも出て来ます。しかし、世界革命のための援助は、中国の立国の精神だから、それをやるのが他国への干渉であるとは彼らは考へない。ただ日本でどう取り締まるかは、日本の内政問題だといふことになりませう。

第六に、自由民主党には立党以来、日本に共産革命は断じて起させないといふ、党の掟がある。今の内閣もその立場を固く守つて行くといふことです。それを共同コミュニケでも出す場合に、何らかの形でその中へ入れることです。以上のやうなことが認められるまでは、日中

国交は急がないこと、かういふのが大体のまとめになると思ひます。

中国問題について、私は一縷の希望はまだ失つてゐないのですが、それを貫いて本当に実現できるかどうかは、これからのわれわれの努力のいかんにかかつてをります。私は私の晩年の全力をこの問題に投げ込んで努力するつもりであります。ご清聴ありがたうございました。

(附記——昭和四十七年十二月二十九日記——)

政府は北京政府を（在りもしない）一つの「中国」の唯一の正当政府とみとめてこれと外交関係をひらくとともに「日華平和条約はその存続の意義を失ひ、終了したものと認められる」といふ声明を行つて、国民政府との永年の関係を切つてしまった。切つてしまったといふよりも、これからは国民政府の存在を認めないことにするといふのであるが、しかしたとへ日本政府が認めなくても、現に北京政府の支配の及ばない土地と人民があり、これを北京と敵対関係にある国民政府が有効に支配してをり、アメリカをはじめかなりの国がこれを認めてゐることは争ふ余地のない事実なのだから、そこに複雑な国際関係が生れるのは当然である。

私は北京の共産政権をいそいで承認する必要はないといふ意見であった。承認するなら国民政府との従来の外交関係を継続することを前提とすべしといふ意見であった。台湾政府はその支配する中華民国の正当政府として認め、北京政府はその支配する中華人民共和国の正当政府

として認むべきだと主張した。そのやうな両政府との同時国交の可能性は二三年前までは見込みがなかったが、二三年いらいの国際情勢の変化から、日本の交渉に臨む態度いかんでは、それは不可能ではないと信じた。今もさう信じてゐる。

しかしわれわれの努力は実を結ばなかった。これによって日本は条約を忠実に遵守する国だといふ信念に傷がついた。「信なくばわれさへわれを信ぜぬをいかに況んやとつ国びとは」。これは畏友井上孚麿氏の歌であるが、いまひとつ、井上氏の若い知人の「この国は如何なる国と人間はば『信なき国』と言はざるを得ず」また同じ青年の「かく言へどこの国をおきてわが国と呼びうる国のなきぞ悲しき」と、私も同じ思ひを禁じ得ぬ昨今である。この失った信をどうして回復するかはわれわれの今後の最大の課題である。日本政府の背信に憤つてゐる台湾の官民が自重してゐるのは、何よりも日本にはなほ多くの信頼し得る友人の居ることを信じるからであらう。

北京政府が公然と日本の革命勢力を支援するに至ることも、国内の革命勢力が力を得て攻勢に出ることも明らかであるが、これにどう対処するかも今後の重大な課題である。

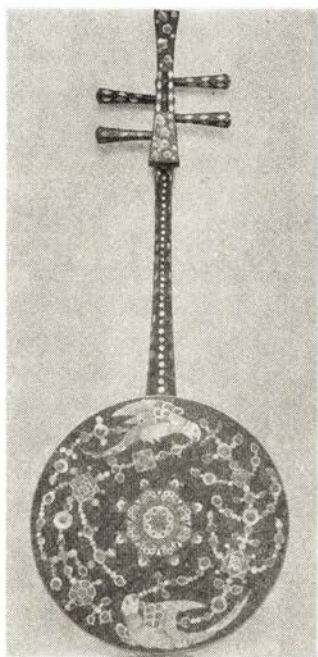
情勢はよくない。このような情勢ではだれしも悲観して氣力を失ひ、なり行きに委せることになりやすいが、私は根本的においてわれわれには、つねに、無氣力に身を委ねる権利はないのだと信じてゐる。悲観にまけないでたたかふことこそわれわれの義務であり、この義務が十

分に遂行されてゐないとすれば、われわれ自身が責めらるべきだと信じてゐる。そして私のなすべき義務として、共産主義のまちがひを誰にもわかるやうに書きのこしたいと思ふ。

(経済学博士)

大自然の法則と文明

胡
蘭
成



(一) 文明は何であるか

(二) 大自然の五つの基本法則

意志法則

陰陽法則

時空法則

不確率法則

好還法則

講師紹介

胡蘭成先生は中国辛亥革命前五年（一九〇六年）に浙江省嶺南で産声をあげられました。李白の詩にあります、

「自愛名山入剡中」

といふのは先生の御郷里の剡溪のことです。先生が五歳になられた時、辛亥革命が起りました。中学時代が、かの五四運動の時代。そして国民革命北伐の時に、先生は北京の燕京大学を中退されました。先生は日支事変中、南京に在られて汪兆銘政府法制局長官を、その後、漢口に在られて大楚報社長をつとめられ、東洋文明を英米の覇権から或ひは共産党の勢力から守る為に、日本との講和運動に努められました。この為、終戦後は亡命を余儀なくされ、温州において三年を過ごされます。やがて、梁漱冥氏の招きで重慶の勉仁書院大学教授の任に赴かうとされたところ、毛沢東が中国本土を陥し入れました。先生は再び梁漱冥氏の紹介によって北京に招聘されますが、途中、上海において梁氏宛七通の手紙を出されました。先生はそこに四つの先生御自身の意見を述べられたのです。即ち、

- 一、中共は既に政権をとった以上階級闘争を製造することをやめるがよい
- 二、中国は世界各国へ平等に門を開くのがよい

三、重工業重点主義的建設といふことより産業の均衡を大

事にするがよい

四、西洋の歴史学の模倣をやめ中国の歴史学を再建するが

よい

といふものでした。梁氏の返書によりますと、あなたの意見はすべて毛主席に伝へたが、主席は聞き入れることよりも兎も角あなたを招くといはれる、とあつた由。先生は応じられませんでした。そして上海から香港、そして日本に亡命された次第であります。日本におかれます先生は、専ら学問の道につかれ、新時代を啓く世界文明復興運動とは如何なるものであるか先づ極めねばならぬ、といふ切々たる御心情で今日に至ってをられます。御著書には「山河歲月」「今生今世」「以上漢文」「心経随喜」「建国新書」「自然学」(以上日本文)があり、外に岡潔博士との月刊紙「風動」(筑波山海田筵刊)をお持ちです。お住ひは、東京都福生市福生八八六、であります。

(国民文化研究会理事長 小田村寅二郎)



(一) 文明は何であるか

私の今日の演題は「大自然の法則と文明」となっていますが、先づ文明は何であるかを説明しませう。おほよその話をするにしても、そのものがいよいよ加減なものでは話になりません。武道を行ふ人はテレビ劇にでてくる剣を見て、あれは剣ではないと言ひ捨てます。いま日本で盛んになってゐる書道も本当の書といへるものは少ないでせう。湯川秀樹博士は、技術科学は自然科学ではない、あれは別のものと申されます。保田興重郎先生は秋の庭の景色に我を忘れ、しかし、文学とはこの景色を書くところにあるのではない、その景色の背後にあるものを書くことだ、といはれました。文学は無を書くべし、もつとはっきりいへば文学は空と色との際に在るわけであります。岡潔先生は数学と不死を論じ、保田先生も文学は不死不朽であることを書くべしといはれました。私はこの三人は今世紀最大の思想家である、と思っただけで嬉しく感激いたします。

文明とは、人類が造営する物量に在るのではありません。文明とは、人類の造営は大自然の法則に対応して、生のある、無のあるものであり、しかも人々がそれを自覚してゐる、といふものであります。

これで、西洋のものは文明でないことがわかります。湯川博士がいはれるやうに、西洋人は

ギリシヤ人からインシュタインまでその宇宙觀に「生」がなく、「無」がないのです。西洋人には覺さとりがあります。だから、西洋的造営は環境に生きてゐるものを全滅させてゆくといふ公害になります。なほ、無を知りませんから、物質がふえて、人類の居場所が次第に狭苦しくなつてゆきます。嬉し気がなく、遊ぶ心がないといふのでは大自然の中に原理を發見する力があり得ません。不死不朽どころか、いまの人ほど生を粗末に、死に不感であることは、史上曾つてないことであります。いまの繁榮と人口増殖はただ一種の異質の生物の急激な大發生であつて、これは遠からず大自然へ一挙に消え去るに違ひありません。

生きものには氣節があります。しかしいまは春が春に非ず、夏が夏に非ず、秋が秋の感なく冬が冬の感なしとなつてゐます。もうすべてのものは本ものに非ず、花は花でなく、月は月でなく、男は男でなく、女人は女人でない。何故さうなつてしまつたかといひますと、物は色でありながら空でもある、有ばかりを知つて無を知らず、つまり色ばかりを知つて空を知らずといふのでは、その本ものと出会ふことはあり得ないからなのです。湯川博士のいふ技術科学は科学でないの如く、民主政治は、政治ではない。音楽も音楽ではなく、レジャーも遊びではない。西洋の社会には人の世がないからであります。

文明の進化は、有の面より無の領域の広がりによるのです。数丈の庭にも無限の空間あり、一寸の光陰にも悠悠千年の思ひがある。これを人の世といひます。いまはこの無の領域を知り

ませんから。生産力が進歩するほど人は暇があるはずですが、逆にいよいよ忙しくなり、物を貪っていいよ余裕がなくなります。日本人も、いまはもう何が文明で、何が生甲斐であるかを忘れてしまったのです。

中国人も日本人も折角昔から文明の人の世を持ってゐたのに、近代西洋の黒船にやられ、進化論と自然科学と民主を輸入しそれらを神聖視してゐるので、文明がわからなくなってしまったのです。しかし、いま日本だけが既に西洋に追いつき、追ひ越してやうやく怯まずに進化論と科学と民主にけちをつけ始めてゐます。これで世界文明復興運動は点火されるでせう。中国人の私はここにお話してきたやうな数人の日本の大智者に非常に教はりました。

もう一度進化論を検討してみませう。太古、新石器時代にあつて文明が始まったのは「無」を覚つて輪を作り、数学そのものを発見したからですが、いまこの物理と数学の祖の「無」がわからなくなり、物質の有ばかりが一杯詰まつて、たうとう物理学をも数学をも萎れさせました。これは歴史の文明以前への逆戻りです。ついでにいふならばいまの男女の中性化は下等生物への逆戻り、総雇用労働は働き蟻や働き蜂への逆戻りであります。「生」を知らなくては個性のありやうがありません。「無」を知らなくては変化の機は不能になります。みな一律の住宅に住み、一律の缶詰を食べ、一律の〇×式教育を受ける次第です。

無と有とは空と色ともいひます。物量だけでは用足しでしかありません。建築にたとへれば

日本の最古の神社建築から、仏寺、宮殿、人家の建築まで多くの変化がありました。それはみな要するに色によって現はした空の変化で、西洋のいふ進化より易経のいふ変化こそ文明で、生甲斐がありました。いまの、色で空を現はすことを知らない建築は、どんなに物量的なものであってもそれは文明などといへたものではありません。

また自然科学といふものを調べてみませう。物理学も数学ももとは大自然の空と色との覚りでできてきた学問で、必ずしも物理学が数学より下位とはいへないのであります。然してなほ物理学や数学と並行的に直接大自然の法則に対応し得る礼楽の学問があります。しかも、物理学と数学でなほ究極の自然に届かないのに対し、礼楽の学だけは究極の自然に届きます。素粒子の領域の諸現象のわけが、物理学の方法や数学の方法では説明できてゐませんが、易経と老子、荘子には説明できてゐます。孔子、孟子にもできてゐます。

数学と物理学では現実の物質のことも絶対精密に理解できません。しかし礼楽では絶対精密にできるのです。数学や物理学の仕事は文明の下絵か仮工事に過ぎません。礼楽でのみこれを本ものとみなし得るのであります。戦前、日本の汽車や町の中を走る電車はいまのものより新意がありました。あれは当時の人の世の風景の中に走ってゐたからであります。いま、人の世の風景がありません。人間がつくつたものは、そのものの中に人間があり、人の世がなければなりません。またそのものが人の世に在って人間と一緒に生きてゐなくてはならないのであり

ます。

なほ、知識は貪ることをしなくていいのです。知識を発見した当時の新鮮さが嬉しいのであります。いま自然科学はいよいよ技術科学に陥って、用足しには充分すぎても、もう知性の発見の悦びがありません。本当は技術でこしらへられたものはさう沢山でなくてもよいのです。人が貪るのは不足であります。無を知り、物に無限なる意志があるのを悦んで、始めて知足するのですが、いまのは物皆有限、物に遊ぶことがなく、満足を知らないわけであります。礼楽の世の中には平凡の盆一つも絶対的なもの、人はそれに満足します。しかしいまは人も物も軽薄です。不真面目でありますから、自然科学が技術科学に落ちたのであります。

民主政治といふものを調べてみませう。中国文明では昔から「民は国の根本である」といふ民本であつて民主とはいひません。民を何より大切にしても、民に指導され、決定されることはありません。接木でよくわかりますが、木は枝の上の花葉の方が下の根本を指導します。人間も頭が下体を指導します。政治は智士が指導すべきであり、議会制度でやるべきではないのです。数学や物理学には民主が全然通用いたしません。国民や商店、工場の代表が数学者や物理学者を選挙し、数学や物理学の方法に対して立法し、監察するといふことをすべきでせうか、音楽や文章美術に対しても然りであります。民主は反知性的、すべての知性の仕事に通用しないのに、政治を民主で行ふとは政治を非知性的事務に墮落させたことに外なりません。

政治は孟子のいふ先知先覚がすることであり、プラトンのいふ哲人の知性的指導政治でなければなりません。然して政治には数学や物理学に匹敵し、しかも数学や物理学に更に優る大自然の法則に叶ふ政治家ができてゐなければならぬのであります。

プラトンの哲人政治説にバートランド・ラッセルは二点を挙げて反論しました。一つ、政治に万人に共通する最善の真理がない。二つ、政治の哲人とはどういふ資格で、また誰がどういふ方法でこれを認めるのか。方法がないではないか。だから多数議決で比較的善なる道を採用、多数選挙で比較的優れた人物を政治役にさせる外はない、これが民主の成立の最強の理由である。とラッセルはいひます。しかし、それはギリシヤ以来の西洋に数学と物理学はあつても、大自然の法則に叶ふ政治学がなく、またかういふ政治を行ふ者がゐないからであります。

中国文明では、数学や物理学に万人共通の理がある如く、政治学にも天下万邦に叶ふ最善の理があるので、数学といひ、物理学といひ、政治といひ、それぞれの領分において直接に大自然の法則にさへ対応すれば、当然誰にも共通し、またすべての良いものに共通する最善の理を発見し、これを体系的にこしらへるはずであります。これが孟子の王天下の理論の根拠であります。数学や物理学が絶対精密にできない、また究極の自然に届かないのに対して、中国文明の政治学だけは絶対精密に至り、しかも究極の自然に至るのが当然であります。孟子が王道の絶対的精密であるのと、天下万邦に共通することを強調したのはこの故であります。

中国文明のこの政治学は、大学のいふ格物致知による誠意、正心、修身、齐家、治国、平天下の絶対の道、日月山河明麗、三綱五常の世の風景無限なるを行ふ学問、いはゆる礼楽の学であります。しかし西洋にはこれがありません。

直接に大自然の法則に対応する学問、数学や物理学は知性のことであるだけに権力とか功利とかによるものではないのです。権力や功利の為では数学上の、物理学上の発見はあり得ません。これと同じわけで、中国文明の政治学も権力や功利によるのではないのです。孟子が政治は王道であり、権力主義の霸道に非ず、仁義によるべし、利によるは不可といった故はこれです。権力や功利は礼楽政治の結果であり、縁起ではありません。権力や功利の有難さも礼楽政治故ゆゑであります。

中国文明のかうした政治学を行ふ哲人は士であります。権力と功利によらない政治学でありますから、それを習ふ中国史上独有の士も権力階級の身分ではなく、また事務をする人ではないわけであります。

なほ、ギリシャの奴隷主哲人も、印度の布施に頼る僧も、日本の禄を食はむ侍も、人に養はれるのですから、自分で生活の憂勞を全くせず世を治める学問をしても、実証に欠け、抽象的理論体系によるだけで、本ものの政治学はこしらへやうもないわけであります。これと違って中国の士は大方おほむかたは耕作で生活費を賄って学問をし、身に沁みる万民の生活憂喜の実証と抽象的

理論体系とを併せて、プラトンのそれよりはるかに具体的礼樂政治の学問を仕上げることできたわけです。樂とは大自然が動くところの氣韻を人事で現はし、礼とは大自然が動くところの節と形を人事と器物で現はすことであります。

民主政治は選挙をいひます。庶民が庶民の中から政治家を選挙する、これと貴族が貴族の中から政治家を選挙するのは孰も政治の話になりません。もとより中国の政治家は士に限りません。その出仕の径路は考試、推薦、選挙のいづれかによるものであります。考試はいふまでもありませんが、推薦とは士が士を推薦すること、選挙とは士が士を選挙することを指してゐます。たとへば、数学や文学の文化勲賞受賞者は、数学者達が数学者の誰かを、文学者達が文学者の誰かを投票で推薦します。また日本芸術院会員も、碁院や相撲協会の役員もその推薦と選挙は素人の国民によるものではないのと同じことであります。総選挙といふ制度でできたものは商売人や労働者や婦人などを代表するものであって、政治がわかるといふものではありません。民主政治といふものは権力と功利の事務扱ひで、大自然の法則に全然対応しようもないのです。

大自然法則に対応しようもない営みは文明に非ず、無明であります。今日は遂にこんにち拡大経済と情報科学の時代といて人類の知性が総萎れになりつつあります。恐しいことであります。これを革命するには、まづ大自然法則を新たに覚らなければなりません。

(二) 大自然の五つの基本法則

そこで大自然の五つの基本法則を説明しませう。つまり一、意志法則、二、陰陽法則、三、時空法則、四、不確率法則、五、好還法則、といふものであります。

意志法則

大自然に意志があります。意志で天体の秩序を保っています。万有引力とか何とかの力の均衡で天体の秩序を保っているのではありません。何故かといひますと、物理学の力は距離に制限され、何億光年の距離には効き目がなくなるからです。物理の力とはむしろこの無の意志の動きで現はれた姿の一種にすぎません。

究極の自然は未だに物質もなく、運動もなく、時間空間もないわけですが、しかし意志がありました。未だに何にもなっていない意志は、ただ意思満々たるといふやうに、また気持一杯といふやうに、究極の自然のすべてでもあります。かういふ意志の第一姿となったのは息であります。未だに空気ではなく、呼吸運動にならない息。究極の自然のすべてでもある無の息。これがわかれば物理学上のエーテルの謎は解けます。物理的エーテルではなくて、無の息であります。そしてその動く方は中心から輻射的物質が生まれ、体系的に成長して拡張します。大

自然は意志があつて中心もあるわけでありませぬ。物理学史上、エーテルといふものが太空に瀰漫してゐると考へ始め、後にこれを否定して、いまはエーテルといふやうなものの存在があるともないとも理論的にうまくゆきませぬ。大自然の根本問題の一つとしてその解答が得られな
いままにしてゐます。エーテルが物質だとすれば理論的には矛盾です。かといつて、エーテルが非物質的存在だとするのはどうか、これまた西洋の物理学者には非物質的存在が認められませぬ。しかしながら、エーテルといふやうなものが無いとしたら、大自然の多くの現象のわけは説明できなくなる、といふ次第であります。にもかかはらず、エーテルといふやうなものは確かにある、それは物質でなく、大自然に瀰漫する靈氣、靈氣とは即ちこれ無の息であります。

大自然に意志があることによつて、万物悉く善へといふ目的があつて、秩序をなします。然して人間だけはこれを覚つて学問となします。孔子のいふまづ立志、「吾れ十五歳で志を立てた」と、仏教のいふ誓願、「仏法無辺誓願聞、衆生無辺誓願度」と。ですからいま悪といつてゐることは万民に志が萎れたことであります。今日、青年は野望があつても志がありません。野望とは物質的ですから、大自然の無による志とは別なものであります。孟子曰く、「士は志を尚たつとぶ」、大志を有する人は欲望が少ないものです。そして大志とは普段未だ目標は立つてゐないところにもあつて、そこから目標が生まれてくるといふものであります。

私は鑑真のことや、いまの人でいへば日蓮宗の僧藤井日達のことを思つては、願をかければできないことはないと自分で自分を励まします。また孟子を思へば、私も至大至剛なるべしと悦びます。どうして志や願でかうした不可能なことを可能になし得るのでせう。それはね、かうした志や願は大自然の意志の分け受けて、いや、分け受けただけではなく、大自然の意志に对应し、それと一致して、かうした無限の未来を含む、無限の威力を持つわけであります。なほ万物には覚ったわけではなくても悉く大自然からの分け受けて意志があり、その万物の意志がわが覚った志や願に当っては急に目が醒めたやうにわがところへ来て我と共に戯れるのです。英雄には美人や名馬がおのづと寄り来るのです。私は学問をすると、思ひもかけないところで岡潔先生や湯川秀樹博士の著書に出逢ひます。それからまた曹操の詩に「幸甚至哉」といふやうに、古来の英雄美人はよく運に恵まれ、危ふく成功し得るのです。なほ、失敗しても万古に名を垂れるのであります。これはすべてわが志や願が万物にある意志と相感応していい縁起となり、巧幸となる故であります。

かういへばいまの物質ばかりの社会がまづ大自然の第一法則である意志法則に対応できなくて、人間の意志も万物の意志も萎れさせてゐることは文明ではないといふことがおわかりになったでせう。

大自然に意志があるといふ第一法則を覚ったことは実に大変なことでありました。易经の始

めに、「天の行なひは健なり」とあるのはこのこと。古事記の始めの「天之御中主神」もこのこと。天之御中主神といふだけで、これについて何の語りもなかったのは本当だからであります。キリスト教の一神エホヴァもこのことですが、エホヴァについては余計な語りをし過ぎました。

陰陽法則

大自然の意志は息でもありません。未だに空気を呼吸することをなしてゐない息。故に万物には悉く意志があつて息があります。無機物にも無論のことです。このことを覺つたから、人間は万物に感応され、また万物を感応させ得るわけです。この相感応は格物致知の格物でありまゝです。それで今度は人間のつくつたものに、例へば和服や倭建築や陶器などにも悉く意志があり息があつて、それこそ文明の営みとなります。致知とはこの創造であります。

陶器や書画の作品に「氣韻生動」といふのはこの大自然の意志と息によるものですから偉いわけです。その覺りで武道をも行へば、氣功をなすことができます。中国語の氣功とは日本でいふ丹田の息、空呼吸以前のものです。そして三尺離れても相手も倒すことができます。これは物理学上の何の媒介物にもよらずに遠隔作用力と同じ働きをすること、武道の方は、物にある意志の発動によってこれを自覺したただけなのであります。然してこれを覺つたことが文

明であります。

息の動きで呼吸します。呼は陽、吸は陰で、よって物質が生まれます。数学でいひますと、零は究極の自然、幾何学の点や自然数の一は陽で、幾何学の線や自然数の二は陰であります。易経ではこれを太極と、陰と陽といひます。陰陽は息が物質になりかけたところのこと、「陰陽二気の良能」といふ万物の生機であつて、物質ではありません。しかし物質になつても息があり、物質にも悉く陰陽があるわけであります。

私の庭にある野生の薔薇、その蔓が僱つた人夫に短かく切られて薔薇は枯死しました。のびる生機が蔓の先端にあるからです。長度を有してゐる蔓は陰で、その先端が陽といへませう。幾何学の点は陽であります、のびて線になしかけたところでもう陽が陰になしかけたのですから、陽に陰があり、陽が陰に変化するといひます。そして線になつても、線の先端はやはり陽でのびてゆく、これが陰にも陽があり、陰が陽に変化するといふことです。陽は古事記でいふと産靈、そして陰は結びであります。

陰陽で一直線的に生まれのびていくだけではなく、放射的に周囲へ拡がることをもいたします。よって万物の中も、人の世の中も拡がることがあり得るのです。しかし幾何学の点と線や自然数の一と二のわけを以ては、これは説明しきれません。

なほ、物理学者は一向に陰陽がわからないやうです。陰電子と陽電子といひ、陽子と中間子

といひ、そのわけは説明しやうありません。西洋人は大自然の陰陽法則を全然覚つてゐません。生物学で陰性と陽性をいつてゐますが、本当はわかつてゐないのです。西洋人には男は陽で女は陰であることすらわかりません。これに比べれば、古代ギリシャ人ピタゴラスが数には陰と陽があるといったのは偉大でした。

漢民族と倭民族と印度民族は陰陽を覚りました。しかしこれを易経のやうに学問になし得たのは中国文明で、日本人はこれを学びました。そして漢文明も倭文明も陰陽虚実の人の世の風景を啓きました。建築一つを取つてみてもわかりませんが、中国や日本の住宅、庭園と西洋のそれを比べますと、西洋の建築には陰陽虚実がありません。陰陽が理解できなくては日本の生花や茶道、剣道は理解しやうありません。書や画もさうです。西洋の画には明暗と距離はあつても、陰陽虚実は一向知りません。東洋文明のかうした現実の目の前にある万物、天地日月男女などに悉く陰陽の理があるといふ覺りと学問でこそ、素粒子の世界の諸現象のわけを解明する新しい考へ方が啓くでせう。

陰陽の覺りは漢文明と同源である古代メソポタミヤ文明にもありました。しかし陰陽變化の理を学問に成したのは漢文明の易経だけであります。ギリシャのピタゴラスの陰陽の極くかすかな古記憶は、後、西洋にいつてまったく消え去りました。いまの生理学者の陰性的、陽性的といふのはA型とかO型とかいふ言い方の類にすぎません。印度文明は陰陽は知つても陰陽の

変化の理を知りませんから因縁和合をいひます。因縁和合では大自然の生の演繹を説明できません。万物の生の演繹で王天下の文明を建設するといふことは仏教には不可能であります。それから西洋人の使ふ辨証法なるものは全然駄目であります。陰陽を知らず正反合といふ。陰陽がわかれば二字でよろしい。有と無とは二字、仁義も礼楽も二字、いずれも陰陽（本当は陽陰といふべきである）に由緒があります。陽陰といふべきところを陰陽といふのは、陽から陰になつても終つたことではなく、また陽となり発展していく、易経の未済の卦の如きものだからであります。本当は陽陰陽ともいへるのでせう。

時 空 法 則

アインシュタインの相対論で絶対時空はないといつてゐます。しかし後には数学者と物理学者は、やはり絶対時空はあると認めなければならなくなりました。だが誰もそのわけを説明できません。私の研究からいふと、絶対時空は無の時間、無の空間であり、そして相対時空は有の時間、有の空間であります。

究極の自然は物質未だになく、時空すらありません。しかし自然に意志があつて息で動きだすと絶対時空ができました。絶対時空とは未だに物質がありません。次に物質ができたのにつれて相対時空ができた次第であります。絶対時空は無限時空ともいひ、相対時空は有限時空と

もいひます。

空間は大自然の意志によるものであり、時間は大自然の息によるものといへます。大自然の意志と息は同じ一つのものであるか或は二つのものであるかといふロジックには嵌められませぬ。またその先後はといへばこれもどっちともいへます。宋、明の理学家はこの大自然の意志のことを無私欲の心、「数点梅花天地心」の心といつてゐます。そして息のことを氣といひ、また自然法則を理といひます。心と氣とはどういふ交渉であらう、氣と理とはどちらが先でどちらが後であらう、と随分議論しました。しかし、先後などは俗なロジック。かうした抽象的観念のないひ方より、もっと直観的、具象のないひ方が欲しいのです。彼等は大自然の法則の体系的説明を求めようとせせず、時間と空間の研究を少しもいたしません。莊子が息のことを具体的に説き、時間空間のわけを直観的具象的に説明したのと、孟子が大自然の意志を良知良能といひ、息のことを性善といひ、浩然の氣といひ、また方円で空間を説き、「五百年必有王者興」といふいひ方で時間を説いたことは実に偉大でした。

空間にはまづ中心があります。大自然の意志が中心であります。古事記の天之御中主神は即ちこのことを指してゐます。中心があることは即ち位置があつたことであります。位置は無の場所ともいへます。そして息の動きによってこの中心から空間が演繹的に拡がります。無限の空間によって有限空間が生まれてきたのです。

究極の自然に意志中心があり、よって全天体にも、個々の銀河系にも、万物の悉くにも中心があるわけでありませぬ。すべての中心は意志中心といはなければなりません。そして悉くの有限空間は同時に無の位置であり、悉くの位置は意志の動きを有してゐます。このことを覚つて明確に説明してゐるのは易経であります。

易経に位置のことを「聖人之大宝曰位」といつてゐます。そして大自然の意志中心のことを大君の徳といつてゐます。天子の位は天下の中心であり、大自然の意志中心が直接に現れたものであります。そして万物悉く位があり、悉くの位は意志の動きを有してゐることを、易経には卦爻で説明してあります。爻は意志の動きをいふ、それが当っている位によつて吉凶をうかがふのです。

位は無の空間であります。無の位から有の空間が生まれます。有の空間も意志の働きを有してゐます。私の新しい友人、呉訥孫教授の著書「中国と印度の建築」にいつてゐます。印度のものはその寺院建築にみられる如くみな円形的で、方形がない。円は運動の勢いきほいの姿であるが方は運動の成定するところの姿である。故に円には方の意思を有し、方にも円の意思を有してゐる。しかし印度人は円を知つても、方を知らない。これに対し、中国の長安や日本の京都の街道設計はほとんど正方形的、中を流れる河が円の曲線、かうして方と円とをうまく配置してゐる、と。私は呉教授のこの説明で、なるほど円は音楽的、方は礼制的、印度文明では齊家治



国平天下の礼制を知らないのと、その建築や彫刻に方がないのとはかやうにも関係があるかと始めて気がつきました。そして西洋人のものにある方と円は本当の方と円ではありません。彼等は方円の無であるところを全然知らないのですから。

円も方も形を有してゐますが、その円なる、方なるは形の無にあります。これ故、相対の円形にも、絶対の無限の円の意思（俗にいふ丸味）があり、相対方形にも、絶対の無限の方の意思があるのです。新石器時代、文明の始めは円を覚って輪を發明し、方を覚って圭で太陽を観測する三角術を發明しました。そして幾何学は方と円を俱に扱つてゐます。漢の石刻の伏羲と女娲の像に、伏羲の左手は規を、女娲の右手は矩を執つてゐます。円は陽なり、方は陰なり、といふわけです。しかしギリシャ人には既に方円の意思がかすんでしまつてゐました。物質的方形円形だけで、方円の意志が全然わからなくては

文明の造象を一つも造り得ません。和服にも、剣にも、茶の行儀にも方円の極意があります。西洋人の動作はどうも線が硬いやうです。硬とは方にも円にもならないからであります。また西洋人の器物は冷たい感じ です。その方形にも円形にも意志不在だからであります。西洋の動作や器物に目立つ直線的感觉は、方円から疎外されたものだからです。私は金春流職分であられる野村保師たむらのお宅で能を拝観して、その舞姿に在る方円の極意は、私に書のことを想はせました。康有為の書の方筆円筆の説き方は真に偉いものでした。私はたまたま書の展覧会を見ることがありますが、筆の線も字の結体も硬化して、意味に欠けてゐます。筆法に方円の意思が現はれなくては、書の結体に方円の意思あるべきを知りやうもありません。天体のすべてのところに方円の意思があるといふことは、思へば思ふほど美しいことです。陰陽の理と方円の意思がわかれば素粒子の世界の諸現象のわけを説明する閃めきが与へられるでせう。今度は時間について説いてみませう。究極の自然に意志があるに従つて、空間にも意思があり、時間にも意思がありました。そして息での呼吸に空間の姿と時間の姿が現はれて来たのであります。時間と空間はどちらが先、どちらが後といふ先後はありません。素粒子の世界の諸現象に是か非かかをつけ得ないのと同じわけであります。

アインシュタインの相対論は、運動と物体と時空とは相関かかはるもの、絶対空間も絶対時間もないわけであるといひますが、これは一種の観察方法に過ぎないこと、時空そのものを知るの

とはまったく別であります。漢文明でもよく時空を一つのことといたします。宇宙とは四方上下は宇、往古来今は宙、即ち宇は空間、宙は時間であります。また世界とは世は時間、界は空間、ここでも時空は相関はるといつてゐます。しかし相對論と違ふところは、こちらは絶対時空を、無限時間と無限空間を、いつてゐることでありませぬ。時間とは、絶対時間（絶対時或は無限時といふべきである。間は未だないのであるから）が大自然の息の呼吸によつて法姿として現はれたのが有限時で、間があつて、普通にいふ時間である。時間とは生命の節である。その為には時間には波状的で飛躍があります。漢文明は音律を以て時間を測ります。それは眞の時を測つてゐるのです。しかし時計だけで測つた時間は数字的觀念的なものに過ぎませぬ。

非ユークリッド幾何学を以て時空を扱ひ、集合論の数学方法を以て時空を扱ふのでは、時空の無であるところは全然わからず物質的方法だけのことであります。西洋人の時空觀に息や生命はありません。かうした時間空間での行なひと造営は文明のものになり得ませぬ。西洋では社会があつても人の世がなく、彼等の地理空間が狭苦しくなり、彼等の歴史が短促になりつゝあるのはこのためであります。

有機物だけでなく、無機物も例へば石は息があるので時間に生きてゐます。生物はみな時を感得してゐます。花の季節、候鳥の季節。それを覚えて學問に成し得たのが、漢文明であります。印度文明と日本文明は時のことを覚えて、しかもこれを學問に成しかけたのですがまだ仕

遂げてをりません。

易は時空を体系化の学問に成した経書であります。易経に空間のことを位といひ、そして爻の動きにはすべてその時に関はるといつてゐます。万物万事の發生の兆し、その動きの機微たるところが「時義」であります。道元禪師は時間のことを「有時」といつてゐますが、これと易経のいふ「時義」とは、時は抽象的觀念的なものではなく、何らかの内容を持つ、働いてある、といふ点では共通してゐます。量子力学では時間も空間も物質的であるといひますが、これは似て非なるものであります。「時義」は真に創造的、生きてゐる時間観であります。なほこれをよく説明したのは孔子孟子莊子でありました。孔子は易経を賛し、ある日山辺の小さな橋の辺りで雉が鳴いてゐるのを聞き、「アッ、時だ！ 時だよ！」と鋭く嬉しく仰せられました。「孔子は聖の時者なり」と孟子はいつてゐます。そして孟子は時のことを「五百年おき必ず王者あり興す」と曰ひました。なお莊子は特に無限時を説き、また無限時と有限時との際を説いてゐます。中国文明はこの学問で悠々たる人生を築き、しかも革命を興すといふのであります。

これはわが中国の文学の拠るところであります。漢文明のものは一本の扇にも江山無限の意があり、悠々千年の思があり、きつと、未知の良いことが發生するといふ思があるのは、すべてこの時空の覺りと学問に拠るからであります。

印度文明の、時についての言ひ方では、私は般若心経の「時照見五蘊皆空」の一句が好きです。時照見とは、その時花がパッと咲くといふ感があります。これは易经にいふ時の兆きざし、時の機と共通いたします。ところが後、論師達は時を抽象の観念論的な研究対象とし、しかも形式ロジックを用ひてこれを論じていひました。「発時則是時、云何得有発」と。つまり花が咲く時といふのでも、咲く時とは時のことだけで、咲くといふ「もの」に非ず、といふ意味であります。これでは時そのものが兆であり、創造性を含んでゐるといふことが少しもわからなくなつてしまひます。

日本では道元禅師のいふ「有時」は般若心経の伝承であります。岡潔先生はいまの人がいふ時間とは真の時間ではないと講演したことがあります。時空については湯川秀樹博士の言ひ方になかなか新意があります。曰く、物理学上では、無限を分割し尽すべしと。これには無限時空から有限時空を創造する観があります。また、素粒子がでるにはそれぞれの抽出しのやうな空間を有してゐるともいつてゐます。これには万物はそれぞれの位があり、位は物と一緒に生まれるといふ観があります。しかし物理学の方法ではどうしてもそこまでのことはし切れません。物理学では無を知らないからであります。さすがの湯川さんもここにきては一寸齒切れちよつとが悪くなりました。湯川さんは史上最後の理論物理学者でありますが、と申しますのは彼だけがもう自分は物理学の終点まで来てゐるのを知つてゐるからであります。彼がいまとりかかつて

ある問題はもう物理学と無の覚りととの瀬戸際に在る問題であり、彼があくまで物理学の方法一点張りで解答を求めようとするのは無理、畢竟、不成功に終るでせう。湯川さんが東洋文明のいふ無を知らないといふことではないのですが、彼には無の覚りと物の有とを体系化する学問に成した経験がありませんから、物理学の終点から無と有との学問への飛躍はいつ遂げられるかまだわかりません。

不確率法則

素粒子の世界の諸々の現象は因果はずれ、不対称、不連続で、すべての非可逆的は同時に可逆的、象徴的でありながら物質的、是と非とすらつけられません。ですからいままでの物質といふものの観念も根本から揺動し、論理学や弁証法も崩れてしまひます。何故こんな現象があるのだらうかと思つても、西洋の物理学者はそのわけを不問に付してゐます。湯川さんだけはいふた諸々の現象の背後にあるものを尋（たづ）ねてゐますがやはり見当がつけられません。湯川さんは、生きてゐるものだからかうなるのだと思ひついて、二十世紀後半の主要学問は生物学の領域へ移さう、といふに至りましたが、生物を研究するにも物理学と同じやうに科学方法を用ゐるならば、やはり駄目であります。

仏教にはこれらについての覚りがありました。解脱因果、順逆用処といひ、法非有非無、不

一不二、無是無非といひます。しかし文明を建設するには、これからもう一步進んで、無因果から因果へ、無順逆から順逆へ、無でありながら有なり、是非相忘ながら是と非と分明なり、といふ工夫をせねばなりません。これらを漢文明だけが学問に成し、実行になし遂げました。孔子は「我則無可無不可」と曰ひ、たちまちこの原理を人事に行なつてゐます。易経の卦は大方可凶可吉なり。莊子はこれらを現実の逍遙遊なりと楽しく曰つてゐます。

湯川さんは、素粒子の世界のすべての非可逆的なものが可逆的なりといふやうな諸々の現象に惑つて、相反する両者からどちらか一つを決めるのは観察者によるもの、自然とは、自然観か宇宙観しかない、つまり自然に人間を加へて、自然と観察者二つ併せてできたものであるといひました。しかしこの説は似て非なりであります。易経は天地人と人を加へてゐますが、人間は自然法則を覺つてこれと一緒に非可逆でありながら可逆となる、つまり孔子の無可無不可であつて、可か不可のどちらか一つを決めるのはありません。大自然と人間とのことは高天原と須佐之男命とで一番正確に説明してゐます。しかしこれを性と命との理論の学問に成したのには孟子であります。

そして自然界には因果があり、是と非、可と不可、といふやうにはっきりしてゐる現象が大方で、漢文明もそのわけを覺つて、人事の営みもこれらと一緒に因果のある是非、可不可判然と分別した作法を用ゐます。これが漢文明の礼制の体裁であります。

本当は英雄の是非因果はずれのところにも謹厳があり、君子の礼法謹厳なるのも遊ぶ気分があるのです。

文明の世の中は確率的でありながら不確率的です。陶器造りは極く謹厳でありながら然して不確率の窯変がある、といふやうに世の中はいつとはなしに好運に恵まれます。史上の創業は悉く好運に恵まれました。吉祥の人には偶然のいいことがあるべきであります。偶然の災禍といふものもあります。あれは無明の人がそれに当るのです。大自然の偶然は悉く善になる、無明の人間では大自然の法則を損ったので偶然の災禍となる故であります。人の世でなく、物質の社会ではすべて○×に嵌められて、一旦に思ひもよらない大毀滅の災禍に当る恐れがあるのであります。

好還法則

大自然に意志中心があつて拡がれば円形となります。それが息の呼吸往復によって循環往復します。故に天体は循環し、万物みな往復するわけであります。文明とはこのわけを覚ることです。印度のいふ輪廻、日本のいふ常盤、中国のいふ天道好還、みなこのことであります。大自然のことは善になる以外はありません。だから循環は好還といひます。易経の六十四卦の冒頭の乾坤二卦は天地人そのことであつて、本当は第三の卦「屯」からであります。屯は

万物の始まりの卦。屯から次へ次へと終りは未済の卦に至り、未済でありますからまた屯の卦から再出発すべし、といふやうに六十四卦が循環してをります。なほ、復の卦に七日來復といふのがあります。これはいまの七曜日の由来である旧約創世紀の七日の説と因縁がありますが、しかし彼方ではもう循環往復の意味が忘れられました。

天体は循環するといふくらゐの事実は西洋人も勿論知つてゐますが、そのわけを覚つてをりません。四季往復は知つてゐても、節氣の感がありません。だから歴史に現はれる天道好還の理は西洋人は知らないのです。西洋人の一直線で、その進化論の物不足もここに原因があります。これでは一度衰へたならどうしやうもありません。しかし易経には盛極必衰、否極泰來といつてゐるのです。孟子が曰ふ「五百年必有王者興」は非常に人心を励まします。旧約にも救世主再来の説がありますが、同一人の救世主の再来では循環の理に關与できません。天道好還は同一人の再来のやうな、重複ではないのであります。そして三国志演義にはその冒頭の句、「さつて、天下の大勢は合久必分、分久必合」があるのです。これこそ歴史上の天道好還の理であります。印度人は合久必分の一句だけは知つて、人生無常と現はしてゐます。もし下の句分久必合もわかれば、無常とはいへないでせう。印度人のいふ輪廻は既にまげられてゐます。例へ循環の理を覚つたことがあつても、これを學問に成してゐなくてはやはり文明の建設にはならず、またいつか変質しかねません。天道好還の理を知るか知らないかはその民族の歴史の

運命に關はります。

ギリシヤ人は数学を体系的理論の學問に成し遂げましたが、漢民族は大自然の法則と人事の理を体系化した理論の學問に成し遂げました。孔子はこの礼樂の學を提出しました。論語はその學問を、大學もこの學問をいつてゐます。

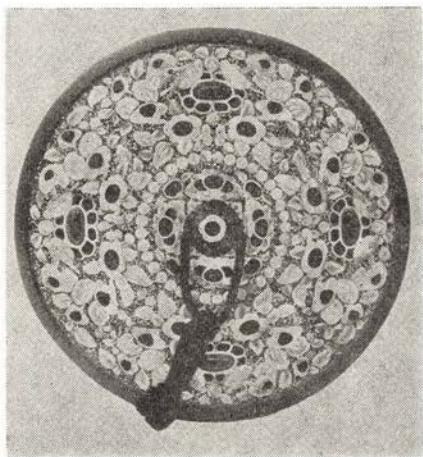


和歌創作と輪読

和歌批評

—合宿教室全員による創作短歌について—

夜久正雄



正倉院・平螺鈿背円鏡

いま皆さんの手にしてをられるこのプリントの「歌稿」は、例年のことですからけれども、諸先生方並びに事務局の若い方々の非常な努力によってできあがったものでございますが、現在、合宿参加者全員の歌がここに盛られてをりますので、これが本当にわれわれの精神生活の記録といへませう。合宿教室に参加してゐる人々全員が、現在の気持を歌に詠んだわけですからうまい、まづいといふことは別にしてもこれは非常な記録だと思ひます。

さてこの「歌稿」に載つてゐる歌は、おそらく全体の三分の一ぐらゐでせう。ここにでてる歌の数は約六七〇首でございますから、三倍としますと、集められた歌は約二、〇〇〇首となります。ここにプリントした基準はいろいろありますが少なくとも全員の歌はのつてゐる。すなはち一首出した人はその一首が否応なしにここに載つてゐるわけです。

私はここではその中の何首かについての感想を述べながら話してゆきますが、あとに和歌相互批評の時間がございますし、今回の合宿は班の構成が比較的小人数ですから、そこでジツクリ細かく、一つ一つの言葉を大事にして、十分やっていたらと思ひます。

なほ、批評する歌の全部について添削できるとよかったです。六七〇首ではさういふこともできませんでしたので、国民文化研究会の先生方になほしていただきました。それで私はなほすまでの段階の、あそこが悪いとか、ここが悪いとかいふお話をして、それがなほると、どういふふうになるかといふお話をしてゆきたいと思ひます。それから、なほ、例年のことで

すが、変な歌にあんまりひっかかって、意味がわからない歌を一所懸命その意味を考へてゐると時間が経ってしまひますし、しかもさういふ変な歌が感染する恐れがあるので、けふはなるべくいい歌、殊に連作になつてゐるやうな、いい歌がたくさんありますから、それを読んでいきたいと思ひます。

プリントを開きますと第一班から出てをりまして、その一番最初にある歌が、まあ不運ですけれども、(笑)当然問題になります。

放された牛たち見れば忘れたる自然を思ふ阿蘇の高原

ちよつと見るとこれは何かわかつてゐるやうな歌なのですが、「放された牛たち見れば」といふ、「たち」といふ言葉は元來複数なのです。「友だち」などといったり「親たち」とか、多少相手を尊敬してゐるやうな感じがある言葉なのです。だからこんなのは別に複数にする必要はないでせう。日本語では元來一々単数や複数を問題にしません。それから「放された牛」といふのですが、これもちよつと見には何かわかるやうなことばですけれど、元來あれば放牛してゐるわけですから(笑)解放されたといふ意味ではないので、この言葉もまたおかしいのですね。それから「忘れたる自然を思ふ」といふのもおかしいので、本当は「忘れてゐた自然を思ふ」といふのが正しいのです。しかも、あの牛を見て、忘れてゐた自然を思ふといふのも

よく考へて見ればどうもハッキリわからない。そのやうな発想が実は問題なので、大事な事は実際に牛の姿そのものをよく見るといふことなのです。さうではなくて牛の姿の奥に何かを見る、その牛が自然を表現してゐるんだといふふうに見るといふことは、何か物の奥に一つの原理があるやうな、さういふ感じを持たせるのです。これではいけないので歌といふのはできるだけ現実に、見たまま聞いたままをつかまへるのが大切です。けふの胡蘭成先生のお話しの中にも、「有限は無限を含んでゐる」といふお話がありました。目に見える姿そのままの中に、大自然といふものがあるわけなので、われわれは現実に見えてゐるもの、聞こえてゐるもの、それに注意を集中して見、聞くといふ、そのことが大事なのです。そのことをしないで奥に何かあるかといふことをいちいち頭で考へてもロクなことではないのです。

それから、「忘れたる自然を思ふ」とい



ふところでポツンと切れて、そのあと「阿蘇の高原」とポツンと出てくるといふ、このつながりも困ります。これを以上の観点から

目も覚むる心地して見ぬ放牧の牛群れ遊ぶ阿蘇の高原

と、かういふふうに添削していただきました。次に移ります。

第二班の、これも一番最初のものです。

青々と生ひ茂りたる草々の牛のふしたる阿蘇のすそ野に

「青々と生ひ茂りたる草々」といふ「草々」が、何か「草々の牛」といふのにかけて言葉みたいになってゐる。「草々」といふ言葉もあまり使はないと思ふのですが、生ひ茂つてゐる草原に、「草々（種々）の牛」がと、もしかういふやうなことで草々といふ言葉を使ったとすれば、知的な技巧を弄したことになりますけれども、そんな洒落たことをするからおかしくなるのです。添削では「青々と生ひ茂りたる草原に牛のふしたり阿蘇のすそ野に」となほしていただいてゐます。

次に行きますが、批評の対象になった人は非常に運がいいと思ひます。添削するのには、文意がなかなかわかりませんから、非常に苦勞する。私も第一首なんかは二〇分ぐらゐ考へたけれども、どうもなかなかうまい添削ができないで困つたのですが、そのくらの時間をかけて

先生方も添削をやっていたいただいてゐるので、みんなの前で批評されるのは辛いでせうが、本当に幸運だと思つて聞いて下さい。

第三班の大野英則君の歌に「チベットよりペマ兄来る」という歌があります。この「歌稿」全体に、ペマ・ギャルボ君の開会式における訴へに打たれたといふ歌が非常に多いことに気づきました。それは、ペマ君の国を思ふ熱情に触れて、感動したといふことであつて、国を異にしてもお互ひに国を思ふ心に感動するといふことは、人間の真情ではないでせうか。その歌は

チベットの国の姿を合宿に来たる友に語り給ひき

とあります。「来たるる」は間違ひです。これを直して

チベットの国の姿を合宿の友らに君は語り給ひき

といふふうにするればゴタゴタしたところはなくなりませう。

本国の歴史を語る友だちの強き言葉に心うたるる

これは、「本国の歴史を語る」でいいのですね。「語るる」といふのはおかしいので、普通の言葉になほせばいいのです。

中共にせめられた後わりやりに国の一部に含めらるるとは

チベットの抑圧されし現状を初めて聞きて胸のつまりぬ

これは事実在即して書いてある

いろいろな貨幣や地図を見せられて一生懸命友は訴ふる

中国のかげのこわさを身をもって体験せしと友は言ひけり

少し直さないといけません、全体として、ペマ君の述べたことにそのまま即して自分の感情を連作の形で述べてゐる、極く自然の素直な歌だと思ふのです。それから、そのすぐあとに国文研の山内健生君の歌があります。「山本先生の御心に心うたるる」と題して

わがいのちいくばくもなしといひたまふ師のみ言葉の心に残りぬ

いまはただ日中問題に全力を傾けをると三度ものたまふみたび

ものを書き話す時には遺言になるかも知れぬと思はるとふ

若きらに遺言のつもりで聞きをれとふ言葉に偲ばる師の御心は

これもスーツとよくよめてゐます。しかし、山本先生は「聞きをれ」とは言はれなかつたので、むしろ丁重に、諸君の耳を暫く傾けて欲しいと、かういふふうには言はれたはずで、かういふ点はやっぱり正確にしなければいけないのです。しかし、全体として、ハッキリと、講義の感想をそのままに述べて連作の形をとつてゐるから、みんなよくわかると思ふのです。それから、続けて、合宿の事務局長をしていただいてゐる国文研の浜田収二郎先生の「やむなくかへる友を見送る」といふ詞書きのある歌。

友ら皆阿蘇山に向ふバスたちて静かになりぬ事務局内も

友人たちみな阿蘇山に向ふバスが「たちて」は出発しての意味でせう。それであと事務局内は静かになつたといふことです。

もの音のたえし宿ぬちひとりかへる友ありさぞや心残るらむ

みんな阿蘇へ行って、そして普段はガヤガヤしてゐる宿の中が深閑としてゐる、その時にただ一人何か理由があつて、——勤務先の関係でせう——帰る友があるといふ、「さぞや心残るらむ」さぞかし、この合宿に心が残つてゐるであらうといふことです。「もの音のたえし宿ぬちひとりかへる友ありさぞや心残るらむ」その友に寄せる歌の作者の感情が実に細やかに現は

れてゐるので、僅か二首の歌ですが、作者の感情はそのまま言葉の調子にうまく出てゐるわけなのですね。次も、国文研の関正臣先生の歌で「中岳第一火口壁に立ちて」です。これはみんなその様子を見たわけで、諸君の歌の中にもずるぶん噴煙を詠んだ歌がありますけれども関先生だけがいい噴煙を見て、おれは見なかつたといふことはないんで、これは四〇〇人が殆んど同じものをみてゐるわけですけども、歌はみんな違ふのですね。勿論一人一人の歌がそれぞれ違つて個性があるのはいいのですけれども、そうではない。誰もちゃんと見るべきものをよく見てゐないのですね。よく見てそれを言葉にするとといふことができてゐない。しかし関先生はちゃんとものを見て歌つてをられるのです。

大地の底のいのちのうそぶきを今聞くごとく凄きその音

大地の底ひにこもるうつたへかむせぶがごときうそぶくごとき

高くなり低くなりつつやすみなく鳴り続けるやその凄き音

たゆみなく噴き上げてくるその煙果てなく上り空につらなる

阿蘇の噴煙の姿がそのままわれわれの目に見えてくる。あるいはその音が、再現するやうに思はれます。歌といふものはさういふものであつて、極く自然に詠まれて、その折の作者の心

や、その場の情景がありありと読む人の心にうつるといふふうになつてくればいいし、さういふのをいい歌だと考へればいいのです。

ちよつと話がそれますけれども、私の和歌導入講義の中に、柿本人麿の有名な「羈旅の歌」——旅の歌といふのを八首出しておきました。その歌を全部ここで講義することはできませんが、その中には有名な次のやうな歌があります。

淡路の野島の崎の浜風に妹が結びし紐吹きかへす

淡路島の野島の岬の浜辺を吹いてくる風が、わが妻が出発に當つて結んでくれた衣の紐を吹きかへすといふ、有名な歌です。

天ざる夷ひなの長道ながぢゆ恋ひくれば明石の門より大和島見ゆ

人麿は山陰のはうから、下関のはうを回つて都に向つて帰つてきた、（柿本人麿といふ人は当時の官僚だと考へればいいわけで、その当時の官僚といふのは中央の文化と地方の文化を連絡する役目をもつてゐた人たちです）自分の任務を果たして、瀬戸内海を通じて大和に向つてやつて来たところが、「天ざる夷の長道ゆ恋ひくれば」——明石海峡のはるかかなたに漸く大和島が見えた、近畿地方が見えてきた、都のあるところが見えてきた、ああ、自分はふる

さとへ帰って来たのだ、命を全うしてふるさとへ帰って来たのだといふ、非常に深い感動を詠んだ歌です。この羈旅の歌を批評して鹿持雅澄といふ万葉集の研究者は（幕末の土佐の学者ですが、幕末の志士の中でも有名な武市半平太の叔父さんになる人です。）「その歌を読むとその時の姿、また、その人の心がいまも目に見るやうに思はれて、全くたまらないものだ」と、言つてゐるのです。——「ただ目に見たるけしきを、そのままに云へるのみなるに、今も打誦するに、そのさまおのづから、目の前にうかびつゝ、見るやうにおぼえて、且つ家路を恋しく思ひて見やりたる意、言外にあふれたり」——千二百年も前の人麿の心が、その歌を読むと、本当にいまゐる人のやうに思はれてくるといふのです。「淡路の野島の崎の浜風に妹が結びし紐吹きかへす」といふのは、儂い、人生のひと時で、別にさう大したことでないのですけれど、その時のその人の感情がその歌の中にそっくり残つてゐるんだといふ、だから、それを読むと、その時のありさまがいまも目に見るやうに思はれると言つてゐる。さういふ歌がいい歌なので、それはその歌が、大きな言葉で言へば、「永久の命」を持つてゐるといふことなのです。その歌に命といふものがこもつてゐるわけなのです。だからそれを読むとその歌にこもつてゐる命を感じるといふことになる。さういふ言葉の世界といふものは、これは精神の世界であつて、肉体は滅んでも言葉は残るといふ、言葉といふものはそれだけの力を持つてゐるものなのです。ですから、歌を作つて言葉を勉強しようと、ぼくらはお互ひにも言ふし諸君にもく

りかへして言っているのは、言葉といふものは、われわれの命を永久につなぐ力を持っているからです。人が死んで残るといふのは言葉が残るんですね、極端に言へば。言葉といふものはそれだけの力を持っているのですから、いい歌にはさういふのちがあるのです。

プリントに戻りまして、その次の歌も読んでおきたいと思ひます。これも国文研の村田英雄先生の歌です。

松本唯一先生に挨拶して想ふ

軍神の母を助けてシドニーに行かせし人をまのあたり見る

老体をものともせず異国まで行かれし意気は若人の如し

末永く健やかに生きて若人を導きたまへと念じつつ別る

これは一番最後を「念じて別れぬ」ぐらゐにしておいた方が自然でせう。この三首の歌は、昨日、この席に老齢の方がおられたのを御存じのことだと思ひますが、あの方が松本唯一先生（地質学の権威で熊本大学名誉教授）で、特殊潜航艇に乗りこんでオーストラリアのシドニーで戦死された松尾中佐のお母さんを、昭和四十三年にそのシドニーまで案内されたのです。それで、かういふ歌があるわけです。

それから、そのページの一番終りのところの歌もいい歌です。

大阿蘇の合宿めざして総力をつくしたまへと友等に文書く

これは国文研の坂東一男君の歌です。現在運営委員長をやつてをられる人です。これは合宿以前の歌だと思ひますが、その坂東君がこの合宿を目指して、みんなお互ひに力を合はせてやらうぢやないかと友人たちに手紙を書いたといふのです。次は

友達の顔浮べつゝ楳文の一語一句に思ひをこめぬ

といふ歌で、一語もなほす必要のない歌ですが、かういふ歌にこめられたのが本当の「まこと」といふことなのです。手を入れる必要のないのが、本当の真心の表現だと思ふのです。

それから、第四班の一番最初の歌、

自らに縛ありてふ御言葉が心にとまりぬと友は語りぬ

といふ歌です。これでもいいのですが、ただ、「自らに縛ありて」といふのは、聖徳太子の御言葉で、「自らに縛ありて人の縛を解くこと、このことわりあることなけん」（自分が縛ばられてゐながら人の縛を解くといふことはあり得ないことであらう）と続いてゆく言葉の一番

最初の部分で、「自らに縛あり」といふ言葉ではないのですね。自らに縛ありといふ自覚だけではないので、自分に縛があつて人の縛を解くことはそのことわりがない——そこまで行つてはじめて完結する思想でせう。だからもしこのことを歌に詠まうとするなら「自らに縛ありてふ」といふのではなく「縛ありててふ」と、いふふうには言はなくてはならないわけです。それから「とまりぬ」といふのもちよつと心がとまったといふだけのことに終つてゐる。これではあまり簡単だから、これは「心にしみぬ」といふふうになはしたはうがいいだらうし、また、それが本当だらうと思ひます。

それから、次に、第五班の一番最初の

草中に紅色くれないなむの朝顔の小さく三つ咲きてありけり

といふ歌があります。これはこの歌をなほした人と私とは意見がちよつと食ひ違つてゐます。この歌をなほした人は、「よし」と書いてあるから、これだけで別になほす必要はないといふことでせうが、ぼくはこれはいしたことのない歌だと思ひます。言葉はちゃんと揃つてゐますから、なほすところは別にない、どこが悪いのかちよつとわからないのですが、かといつて、心を打つこともない。結局この歌が言ひたいのは草の中に朝顔が小さく三つ咲いていたといふだけのやうです。三つ咲いていたといふ三つに、何となく意味ありげな感じをもたせ

てゐるやうですが、どうもよくわからない。それから「小さく」といふのもよく考へてみると、朝顔には大輪とか小輪とかいろいろありますから、どんな種類の朝顔かわからないけれども、大きい朝顔、大きくあるはずの朝顔が小さく咲いてゐたといふのなら意味がありますが、小さい朝顔が小さく咲いてゐたといふのなら、これは別にどうといふことはないわけです。そんなことをだんだん考へてゆくと、どうもこの歌はあまり内容がないのぢやないかと思ふやうになつてきました。ほかの歌ともよく比べ合はせて班別の相互批評の時にしつかり考へてみて下さい。

それから、その次にある九大の小柳左門君のはいい歌です。

そそりたつ火口のふちゆ見下せば底は煙におほはれ見えず

大いなる火口こめたる白煙のなびきてはつかに底つ岩見ゆ

わづかに底の岩が見えるといふのですね。

底知れぬ火口の深みゆ溶岩のたぎるが如き音ひびきくる

「深みゆ」は深みよりですね。これも素直でありのままの状態が現はれてゐます。

それから、第六班、最初ですが、

裾野にて馬に乗りたる子供らのぎこちのなさがかはいげに見ゆ

これはなほして、「ぎこちなき姿愛らしきかな」そのはうがずつといいですね。そのページの一番最後に国文研の小柳陽太郎先生の歌がありますが、「山本先生の御講義を聞く」といふ詞書で、

遺言を残すおもひに語らむとのたまふ聞けば心うたるる

老いの身の老いを忘れて憂へますみすがたみれば胸せまりくる

おぞましき報道管制のもとぬばたまの闇ゆくごとしわれら国民

外つ国のおもひのままに操られ生きゆくものかつかさびとらは

「つかさびと」は官吏といふことですな。

戦ひ敗れしゆ時すぎゆけど長き長き日の本の眠り未ださめずも

時代の緊張感のある立派なお歌だと思ひます。

それから、第七班の最初にはいりますが、非常に緊張したいい歌が出てくるかと思ふといろんな歌がまた出てくるのです。（笑）これがわれわれのありのままの姿であつて偽ることもで

きませんが、その歌は、

教へ子に己れの生命を捧げむと決意されにし熱意を学ばむ

同じ山本先生の言はれたことについて詠んでゐる歌ですが、これはこれで素直なのですが、「教へ子に己れの生命を捧げむと」といふところは「教へ子のために生命を捧げむと」となほしたがいいでせうし、「熱意」といふのも「み心」といふふうになほせば次のやうになります。

教へ子のために生命を捧げむと決意されにしみ心を学ばん

最後が字余りになりますけれども、やはり「心を学ばん」といふより「御心」といふほうが自然ですからそのほうがいいと思ひます。

第八班の最初、これは

サンサンと陽のあたりたる山道を歩く我の背中に汗がにじみでる

字数は数へませんが、(笑) ずのぶん字余りになってゐますね。しかし字余りにするほどのこともない歌で(笑) これはかういふふうになほされてゐます。

山道を登りて行けば夏の日は照り輝きて汗のにじみぬ

この二つの歌をならべてみると同じ一つの経験がどういふふうに感じられるか、どういふふうに表示されるか、その違ひを具体的に学ぶことが出来ると思ふのです。それから、時間がな
いから第一班の一番最初の歌

求むるもの今触れゐると言ふ思ひしだいに満ちて胸をうつあり

といふのですが、言ひ方が間接的な言ひ方になってゐるのですね、だからこれはかうなほさ
れてゐます

求むるもの今やうやくに見え来たり喜び胸にあふれくるなり

それから一二班の一番最初のもお伝へしておきませうか。

都会はなれて阿蘇に来れば公害なき虫の音が清らかに心やすめる

といふので、散歩のやうですし、公害のない虫の音といふのが、（笑） どういふふうにな
くのか私は知りませんけれども、これをなほす人はさぞかし苦勞されたらうと思ふのですが
かういふふうになほつてゐます。

阿蘇に来て聞く清らかな虫の音に心おのづと安まりゆくも

同じことを詠んでゐて言葉が違ふといふことは自覚が違ふといふことなのです。言葉といふものは自分が感じたことを自分自身言葉で意識するといふことなのです。言葉で意識しなければそれは無意識の世界にはいつていつてしまふのですけれども、どんなにかすかなことでもそれを言葉に現はせば、それで自分が意識する、つまり自ら悟る、言葉に現はすといふことは悟るといふことなのです。それで悟った言葉がまことであればそれは永久に生きてゆくものなのです。だから自分の命といふものは自分のまこと——すなはち本当の表現になれば、永久に生きてゐて多くの人に伝はつてゆくのです。

われわれが心を通はすのは言葉が中心ですから「肌でふれ合ふ」とか「裸で付合ふ」とかいふこともあるけれども、文字通り、裸で付合つてみたところで別に心は通はない、心を通はすのは言葉なのです。言葉といふものは肉体を離れることができる、肉体の影を持ちますけれども肉体を離れることができる世界なのです。その世界は、無限に通ひ合つてゐる世界なのです。我々の肉体は消えてもその世界は残つてゐる。我々が死んでも日本語といふのは残つてゐるわけです。日本語の国語世界は残つてゐるのです。それは無限の過去から、すなはちそれこそ柿本人麿以前から、無限の未来にわたつてつづいてゆく「言葉の海」といふべきもので、日本語の海は厳然として永久に存在してゐるのです。その中にわれわれは生れ、そして生きて、その「言葉の海」の中にわれわれの真心を残して、——残すことができれば残して、そして死

んでゆくといふのが、これがわれわれの生と死だと思ひます。（中略）
最後にもう時間がありませんから国文研の先生方のいい歌だけ読んでおきませう。
朝永清之さんの歌

チベットの少年に再会して

二年前共にすごせし少年とこの地で逢ふとは思はざりけり

壇上のみぶりてぶりもなつかしく雄々しき姿ただみつめをり

壇上の雄々しき姿みつめをれば共にすごせし日々の思はるる

ペマの顔に少年達の顔重なりてあつき思ひのこみあげてくる

少年達の思ひ定めしおのおのが道あゆみをと聞くはうれしき

大阿蘇はチベットの山に似てをると語る瞳のかがやいてをり

それから、その次一つ飛ばして松吉基順先生の「吾子への手紙に記して」

吾子はいま和歌山あたりの海辺にて従兄らと共に泳ぎてあるか

父はいま阿蘇のみ山のなかほどの草千里ヶ浜にたたずみてあり
緑なす草千里のをちこちに静かに歩む牛の群れ見ゆ

親子づれの牛の群れありよりそひて歩むを見れば吾子の思はる

親牛にはほづりをして離れざる子牛を見れば吾子の思はる

その次、青砥宏一先生の「阿蘇登山」といふ歌です。

山の上に広原開けさみどりの小草しげれる草千里はも

この原にすめる牛馬草原の沼のわき水のみて暮すか

太腹におのが名を書き大道をのしてゆくみゆ赤牛四匹

谷底ゆわきまきあがる噴煙のむきかへまきてうすれきえゆく

とどろなる地底はみえず風のまにたちまよひつつ煙あがりて

ときくれば千引の岩をもふきあぐるこれの地の神かしこかりけり

年々に共に登りし友どちの事あり今年見えぬさびしも

集い得ぬ友のこのみし焼酎を出店に買ひぬ君をしのびて

それから、加藤敏治先生の「宝辺兄に」といふ、これは宝辺正久さんといって「国民同胞」の編集者ですが、今年事故があつて来られなくなつた、その方に寄せた歌です。前の青砥先生の最後の二首の歌もこの宝辺さんを偲んでよまれたのです。

吹く風に夏草群はそよぎつつ阿蘇国原は夕まけにけり

夕鳥の鳴く声絶えて虫の音のしげく聞えく日ぐるる原に

にぎはしく友らと語り笑ひつつあれども淋し君しあらねば

なぐさめの言葉も知らにただ君のたへえぬ苦しみ偲びつつをり

君みます方と思ひて眺めやる外輪山は夕かすむなり

それから、最後に事務局の少年少女たちの歌がありますが、少女といつていいのかどうかわかりませんが――、本部署事務局の永沢さんの歌

うつむきて筆走らせる人々の前に積まれし紙の高さよ

絶え間なき筆の動きに何もかも忘れてただに急ぎけるかな

それから修猷館高校二年の小柳君の

高原を下り行くバスの窓辺には向ひ吹きくる風の涼しき

広ごれる阿蘇谷のかなた大観の峯の姿はもやにかくるる

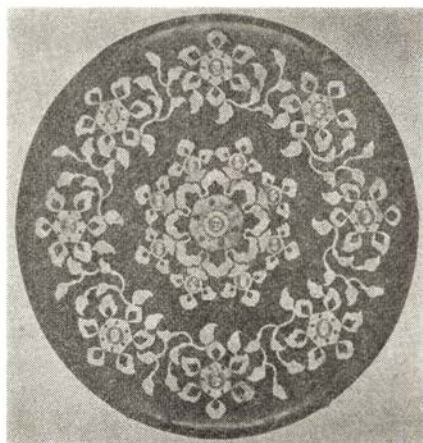
ふりかへれば烏帽子の山の頂は薄暗き雲におほはれてあり

これは大学生よりも年齢が低いのですけれども、私が導入講義で申し上げたとほり、年齢とか、経験とか、さういふことに関はりなく非常にいい歌ができるわけですから、最後に一つ、お互ひにけふゆっくりお互ひの言葉の間違ひを指摘しあって、最後にもう一度機会があるさうですから、立派な歌を残していったきたいと思ひます。

(亜細亜大学教授 — 国文学専攻)

輪読を班別で行ふについての導入講義

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」



小柳陽太郎

学問のあり方

世間虚假唯佛是真

輪読の意味

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」

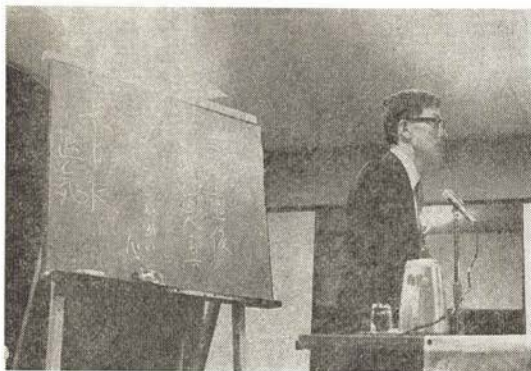
学問のあり方

最近、大学生と話してゐてよく聞くことですが、自分の心はうつろだといふのですね。大学に合格した時は有頂天になつてゐたが、さて落着いて考へてみると自分の心の中には何にもない。本もろくに読んでゐないし、何かの問題を提出されても、自分なりの答へを出すことが全く出来ない、自信がないといふのです。だからこのやうな合宿に誘はうとしても、恥しくてそんなところには行けないといふ。しかし考へてみれば年齢の上では二十歳前後、人生のうちで一番力が漲つてゐなければいけない青年層が、おしなべてこのやうな気持で生きてゐる、もしそれが一般に認められる現象であるとすれば、これは実に容易ならぬことだと思ひます。

何故さうなつたか、いろいろありませうが、その大きな原因の中に、思想といふものは体系化され、理論化されたものでなければいけないといふ考へがあるやうです。すなはち思想と名付けられるもの、大学において学問として通用するものは人生のさまざまな経験を漠然と積み重ねてもだめなので、それが一つの体系に、理論的に整理されていかなければだめだ、それが学問といふものだといふ考へです。だから、たとへばマルキシズムといふやうな膨大な思想体系をもつたものが目前に現はれると、大学にはいった当初の学生なんかは内容をろくに読まないで、理論の外形に圧倒されてしまふ。それに対しておれには何も無いのだといふ反応も

仕方をするわけです。だからその人はマルキシズムといふ理論体系の中に身を置かない限りは、或はマルキシズムに対立する何かの思想を身につけないかぎりには、常に心の中はうつろだといふことになるのです。ところがこんどはそのやうな理論を或る程度かじって、それが少しばかり身につけてくると途端に傲慢になるのです。自分たちには理論がある。世間一般の人たちとはちがふのだといふ、所謂エリート意識が頭をもたげてくる。さういふ意識を多かれ少なかれ身につけて人々は大学の門を出てゆく。これが大学の現状ではないでせうか。

だが考へてみれば、人生にとって一番大切なものは「人生の真実に感動すること」だといつていいでせう。その感動のない人生は人生の名に値しないと云つてもいい。すべてはそこから出発するはずで、学問の世界もまた、その例外ではないはずです。今さら論語やソクラテスをもち出すまでもなく、学問といふものは古今を通じてその感動に根ざしたものであり、その感動を育くむところに学問のよろこびもあつたはずです。従つてたとへ読書の量は少くとも、整理された理論はもたなくとも、その人の心の中に、そのやうな感動が芽ぐんでさへをれば、その人は立派に学問の出発点に立つてゐると言へるのです。だからさういふ人は胸をはって学問のよろこびを語ることが出来るはずだし、又逆にいかに精緻な理論を身につけやうとも、そのやうな感動を失つた者は、すでに学問を語る資格はない、さう断じて差支へないと思ひます。そのやうな「学者」を親鸞は「叡山のゆゆしき学匠」と言ひ、山鹿素行は「文字の学者」と呼



びました。「人生の真実に感動する」といふことを別に
して学問はあり得ない、そのことを先づ肝に銘じていた
だきたいと思ひます。

「人生の真実に感動するところ」それは「幼な心」
だと言ってもいい。ありのままのすなほな心を言ふので
すが、ここで考へなければいけないことは、それを持續
し、育ててゆくためには、きびしい訓練が必要だといふ
ことです。すなはち何の心の準備もなく、人生の波の中
に、徒らに漂ってゐるだけではだめなので、たとへば一
つの言葉の中にきらめく人の心の真実をうけとめ、それ
を自己の内心に味はふといふことは決して容易ではあり
ません。そのためには当然それなりの心の訓練が要求さ
れるので、それが実は「学問」そのものだと言つてもい
いのです。

ではその訓練とは何か、それにはいろいろのことがあ
りませうが、その中で最も大切なものとして、この合宿

教室では「和歌創作」と「輪読」といふ二つの問題をとりあげ、従来これを柱として参りました。

「世間虚假唯佛是真」

輪読の際にまづ第一に指摘しなければいけないことはそこに書かれてゐる言葉を、かねての自分の考へで勝手に判断するのではなく、その文章、その言葉の中にこめられてゐる作者の思ひを前後の文脈の中で適確に把握するといふことです。例へば今日とりあがる聖徳太子の御本の中に「世間虚假、唯佛是真」といふ言葉があります。これは太子がおなくなりになる時に残していかれた大切な言葉なのです。「世間は虚假にして、佛のみこれ真なり」——すなはちこの世の中のものにはかない存在にすぎないが、ただ佛だけが真実だといふことでせう。さう解釈すれば、それで一応の意味はわかったやうな気になるでせう。だが「唯佛是真」といふときの、この「佛」とは一体何なのか。これを一般には自分のかねて考へてゐる「佛様」や「佛教」とすぐ置きかへてしまふ。さうしてこの世は儚いものだが、来世を支配してゐる佛様の世界だけは真実なものだ、だから、現世の執着をすてて、佛様に帰依しなければならぬ——さういふ教へだと理解するのです。例へば亀井勝一郎氏などもさう理解したために、聖徳太子はなくなれる前には次第に政治に背をそむけて、佛教の世界に心を寄せて行かれ、世の

中からはなれて一人静かに、斑鳩の里に、佛教の世界——瞑想の世界にはいつてゆかれたと考へてしまつてゐるのです。だが果してそれでいいものかどうか。勿論太子は深く佛教に心を寄せられたのですが、その「佛」といふものの内容は果して亀井氏のやうなうけとり方でいいか。

太子には維摩経といふ經典に註を施された「維摩経義疏」といふ御著作がありますが、その中で維摩詰といふ坊さんについて述べられた個所に

「国家の事業を煩はしとなす。ただ大悲已むことなく、志、益物に存す」

といふ御言葉があります。これは維摩詰の人柄を述べられた文ですが、そこには太子自身の御体験が色濃くその影をおとしてゐると思はれるのです。意味は、国家の事業——国家とは現実生活といつてもいいでせうね、その現実生活においてはいろいろと心を尽さなければいけないことがある。これは実に煩はしい。——ここだけを見ればたしかに亀井氏の言葉を裏付けるやうな気がしますが、そのあとに、太子は「大悲已むことなく、志益物に存す」と書いてをられます。大悲といふのは、人の悲しみ、苦しみを、自分自身のものとして、共に悲しみ、苦しむといふ慈悲心なのです。その慈悲心をどうしても押へることが出来ない。それで「志、益物に存す」、物といふのは国民といふこと、すなはち、国民が幸福であるやうにといふねがひが維摩詰の一生を貫いてゐるといふのです。これは維摩の人間像であると同時に太子の心情の告白

ともとれるのです。国家の事業はたしかに煩はしい、しかしそれを乗り越えて、国民を思ふ氣持がはげしくつきあげてくる——もしそれが太子御自身の御体験の反映であるとすれば、その太子が、世の中にはかかないものだから、最後は佛教に救ひを求めるといふやうな、いはば隱遁的な思想にはいりこまれることは絶対になかったはずで、では一体「唯佛是真」の「佛」とは何か。その「佛」の中に、太子はどのやうなおもひを寄せてをられたか、それは皆さん一人一人がこれからじっくりと考へていただかなかねばいけない大切な課題なのであつて、単に既成概念としての「佛教」に置きかへただけでは何にもわかつてこないのです。

今日これから読んでゆく「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の著者、黒上正一郎先生はこの御著書の中でこの太子の御言葉について「『世間虚假』の懺悔求道心に自らを没し、くもりなき大悲の永久生命を仰いで、一切を『唯佛是真』に帰摂し給ひ」と述べてをられますが、たしかにこの「佛」の中には亀井氏のいふやうな隱遁思想とは全く逆の、人生に無限の力をそそいでくれる何か、黒上先生の言はれる「大悲の永久生命」とでも言ふべきものが偲ばれるのです。

輪読の意味

勿論この「文脈を正確にたどる」といふためには、単なる知的な興味ではなく、その古典の一つ一つの言葉を大切に偲ぶといふ心の働きがなければなりません。小林秀雄先生は「文学と自分」の中で、二宮尊徳の言葉を引用しながら「言葉」とは氷のやうなものだ、氷はとけて水になってはじめて物をうるほすやうに、言葉もそのままではだめなので、それを溶かさなければならぬ。さうしてはじめて人の心をうるほすことが出来るのだ。では言葉を溶かすものは何か、それは人々の「胸中の温気」だと云ってをられます。太子の御言葉の中にある「佛」もまた氷なので、それをとかすには一人一人の「温気」が必要なのです。

同じ小林先生の言葉で、いつかの合宿で夜久先生が紹介されましたものにかういふのがあります。「諸君が野原を歩いてゐて一輪の美しい花の咲いてゐるのを見たとする。見ると、それは堇の花だとわかる。何だ、堇の花か、と思った瞬間に、諸君はもう花の形も色も見ざるを止めるでせう」人々はその花の実体の前で立ち止らうとはしないで、その実体を堇といふ言葉、すなはち概念に入れ変へてしまふと、それでわかったと考へてそこを通り過ぎてしまふのです。小林先生はさらに次のやうに書いてをられます。「堇の花といふ言葉が、諸君の心のうちに這入ってくれば、諸君は、もう眼を閉ぢるのです。それほど、黙って物を見るといふ事は難かしいことです。堇の花だと解るといふ事は、花の姿や色の美しい感じを言葉で置き換へて了ふことです。言葉の邪魔の這入らぬ花の美しい感じを、そのまま持ち続け、花を黙って見続け

てゐれば、花は諸君に嘗て見た事もなかつた様な美しさを、それこそ限りなく明かすでせう。」すばらしい御言葉で、すべてはこの御言葉を味はっていただくことに尽きるのですが、皆さんもこれから読む古典の一つ一つの言葉の前でしばらくの間立ち止って、ちっとその言葉を見つめていただきたい。さうすれば、きっといろいろなものが見えてくるはずで、それが書物の読み方、学問の仕方なのです。

従つて書物にとりくむためには、常に生き生きした、ひろやかな、そしてきびしい心が用意されてゐなければなりません。それがないと、ともすれば言葉に流されて、その奥にひそむ「実体」を見失ひがちになるのです。かうして深い友情に支へられた「輪読」といふ読書形式が必要となるのです。

言葉をかへれば輪読といふのは、言葉の奥にひそむ「実体」に付き合ふ、その付き合ひ方を友らとともに鍛へあふ場所だと言つてもいいのです。かうして読み進んでゆく間に、一緒に学んでゐる友達が、古典の世界の中に総撰されてゆくよろこびをわかちあふ、それが輪読なのです。従つて輪読は心あたたまる読書形式であると共に、一方真剣勝負のやうなきびしさも要求されるのです。だから一人の友達が文を読んでゆく時にちょっとした読み違ひでもあれば、その場でパツと指摘する、さうした敏感なやりとりの上で輪読は行なはれなければなりません。間違つたなと思つても「まあいいだらう。単なる不用意で間違つたのだらうから」などといふ

緩慢な態度では、決して本当の輪読は出来ません。ですから読む方も真剣です。少しでも間違へば、或は少しでも先入観にとらはれたやうな解釈をすれば、すぐにむこうの矛先が目の前に飛んでくる。さういふきびしさが大切なのです。従って、よくあることですが目の前の文章をいい加減に読んで、そのことに関連して、かねがね自分が考へてゐたことを喋り出す。そのお喋りの中で、古典を置きざりにしたままで議論が展開する、さういふ風景をよく見かけますが、このやうなことは特にきびしく戒めていただきたい。あく迄古典の文章に即してゆく、そして、その文章を深く読みとることの出来たよろこびを、お互ひにわかちあふこと、それが輪読の意義でもあり、醍醐味でもあることをくれぐれも心にとめておいていただきたいと思ひます。

前置きが長くなりましたが、本文を読んでゆきませう。

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」

この書物の題名は「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」、著者は黒上正一郎といふ方、黒上先生といふ方は昭和五年、数へ年僅かに三十歳でなくなられたのですが、学歴も四国の徳島商業学校を出られただけで、その後銀行にお勤めになったのですが、それを辞めて、学問の道に志された、文字通り「篤学の士」なのです。名のある数多くの聖徳太子研究の書物もあるだら

うに、何故このやうに名もない方の著述をわれわれはとりあげるのか、それについては、過去の合宿教室記録にも幾度となく説明が加へられてをりますし、何はともあれ、本文に接していただかなければ、千言を費しても無意味だと思はれますので、ここでは省かせていただきます。ただ本書の復刊の言葉の中の次の一文だけを御紹介しておきます。

「その（先生の）風貌は本書の巻頭の写真のやうに、若年乍ら端嚴なる聖僧の如く、柔和にしかも熱烈に、誰彼を問はず、説き教へて倦むところを知らず、同時に本書の述作には、一語一句に心血を注がれたといはれてゐる。当時、昭和三年の三、一五事件の後、渦巻く共産主義運動の熾烈を極めた中に、第一高等学校に昭信会を、東京高等師範学校に信和会を、それぞれ研究グループとして作り、著書は、悠々として毅然たる態度を以て学生を指導し、太子の御精神を若い次代の青年に伝へたのである。

古来、仏教家、史学者の聖徳太子研究は数多くあるが、本書の如く、太子一代の御事業を、その悲痛なる宗教的人生觀に徹入しながら説き明かしたものは殆んど類例をみない。」

では本文の五二頁、第一篇、「聖徳太子の人生觀と政治生活」の最初のところを読んでみます。

聖徳太子は固有民族文化と大陸文化との交流接觸の時代に出現させ給ひ、當代大陸の思想學術を博綜し給ふたのである。けれども太子に於いてはこれらの思想學術はすべて切実の求道體驗に融化して開展せしめられたのである。

最初に注意していただきたいことは、筆者が聖徳太子が御出現になった時代を「固有民族文化と大陸文化との交流接觸の時代」といふやうに把握してをられるといふことです。例へば太子の御生誕は五七四年ですから、六世紀の半ばすぎと言ってもいいでせうし、古代貴族社会といふ時代区分を使つてもいい筈です。そのやうないろいろの把握の仕方がある中で著者は民族文化が大陸文化に接觸した時代といふとらへ方をしてをられる。そこに本書の大切な特色があるといへませう。黒上先生は別の個所で次のやうに述べてをられます。

「我が国民生活は、外来文化との接觸によつて前後二回の重大轉機に遭遇したのである。先に東洋文化を受容せし推古朝と、後に西洋文化を輸入せる明治時代とは正に此の二大轉機に外ならぬのである。而も国民はこの重大時機に當つて、かくの如き指導的人格を、国民生活の核心たる皇室に仰ぎまつたのである。」

指導的人格——それはいふまでもなく、聖徳太子と明治天皇なのですが、筆者の考への中には、日本の歴史を三つに区切つて、固有民族文化の時代、大陸文化をうけ入れた時代、西歐文化と接觸した時代と大まかにわけてゆく、さうして第二期のはじめには聖徳太子が、第三期に

は明治天皇が国民を導いて行かれた——さういふ日本歴史の大まかなアウトラインが描かれてゐるのです。かう見てくると古代貴族社会、封建社会、資本主義社会といふやうな教科書式の時代区分では何ふことの出来ない日本歴史の本質的な姿が浮び上つてくるのです。このやうな歴史の上に聖徳天子を位置づけたところから、この文章がはじまつてゐることに先づ心をとめていただきたいと思ひます。

太子はそのやうな時代に出現されて、「當代大陸の思想、學術を博綜し給ふた」のです。「博」は勿論「ひろい」、そして「綜」は綜合の綜、すなはち統一するといふ意味、思想學術を学ばれただけではなく、それを自己の人生觀の中に統一してゆかれたといふ意味がこめられてゐます。この「綜」といふことの意味をもつと具体的に述べてをられるのが、その次に続く文です。

「太子に於いてはこれらの思想學術はすべて切實の求道體驗に融化して開展せしめられたのである」

現代の学問の世界では、学問の対象と研究者自体の内心の問題が必ずしも統一されないままに議論がすすめられてゐる。従つて偉大な精神を研究の対象として選んだ場合にも、必ずしも研究者の精神の緊張を要求されないし、特別深い求道體驗もないままに、宗教を論じ、哲學を語る人が実に多い。しかしそのやうなことでは学問が人生を豊かにし、人生に力を与えること

は永久に不可能なので、学問は、これをうけとる人の切実な体験に統一され、融化されることによつてはじめて生きたものとして働くことが出来るはずです。「切実の求道體驗に融化して開展せしめられた」といふ、その「開展」といふ言葉の中にも、その間の消息が示されてゐると思はれます。

国家重大の轉機に国民生活を荷はせ給ひし御心は、時代の痛苦濁亂を常に客觀視し給はずして、先づ自らを省みさせ給ひ、全體生活の開導教化を念じて求道精進し給ふたのである。

黒上先生は太子の時代を「痛苦濁亂」といふ言葉で表現してをられます。たしかにこの時代はこのやうに強く烈しい言葉でしか表現出来ないやうな時代でした。年表を見ても、太子がお生まれになる二十二年前、佛教が日本に伝来、その採否の問題をめぐる蘇我、物部兩氏の争ひが熾烈を極めるのですが、それより十年後、五六二年には大陸に進出する拠点として重大な役割を荷つてきた任那の日本府が新羅に亡ぼされるといふ事態が発生、その後九年、五七一年に欽明天皇は、任那府を再興すべき悲痛な御言葉を残して崩御なさるのです。太子の御生誕はその三年後、西暦五七四年でした。さらに太子十歳の折には敏達天皇の深い信頼をうけて百濟より召し還された僧日羅が殺害されるといふ悲痛な事件が起りますし、十四歳の折、太子の父君用明天皇の崩御後には、蘇我、物部の争ひは遂に内乱に發展、蘇我氏は物部守屋と、守屋が

擁した穴穂部皇子（崇峻天皇の兄君）を戦死せしめるに至るのです。しかもあくなき蘇我氏の手は天皇にまで及び、五九二年、遂に蘇我馬子は帰化人、東漢直駒あづまのあたらこまを使って崇峻天皇を弑逆せしめるといふ、日本の歴史はじまって以来の大事事件が勃発したのです。当時太子は十九歳、馬子は太子の妃、負古郎女せむしのいらつめの父、すなはち太子の舅にあたり、崇峻天皇は太子の御父君用明天皇の腹違ひの弟にあたられますが、肉親の間の惨烈な血を浴びて太子の時代ははじまるのです。すなはちその翌年、推古天皇の御即位とともに、太子は「国民生活の運命を荷」って、皇太子の位につき、摂政になられるのです。しかし太子にとって、この時代の「痛苦濁亂」は単に太子をとりまく、社会情勢であるだけでなく、それはそのまま、太子御自身の「痛苦濁亂」であった。すなはち時代の苦しみは、自らの内心の苦しみそのものであった。「客観視し給はず」といふ言葉は大切です。かくて「先づ自らを省み」、「全体生活」即ち国民生活の「開導教化を念じて、求道精進」されるのです。

「自らを省み」といふ言葉も大切です。それは勿論、自分のどこかに欠点がないのか、反省を加へるといふことには違ひないのですが、反省の内容が問題でせう。すなはち太子は御自身の人格の完成のために、いはば閉された世界の中で、反省を加へられたのではない。国民とともに生きてゆく生き方自体に足りないところがないのかを省みられたのです。この二つの反省の違いは重大です。

維摩經の佛国品といふ卷に佛陀が説法をされるところがある。その時説教を聞きに来てゐた人々を、お経では菩薩と聲聞（比丘）と凡夫の三つにわけてあるのですが、その部分についての太子の話の中に次のやうな御言葉があります。

「聲聞（の人）は生死を厭ひ涅槃を求む。凡夫は生死を愛し涅槃を畏る。二つながら皆佛の深旨に違き供に中道を失へり」すなはち聲聞は现实生活を厭ふて佛の悟の世界を求めようとするが、凡夫は現実の中に溺れて、悟の世界を敬遠しようとする、しかし「菩薩は心益物に存するが故に生死を厭はず、萬徳常果を証せむと欲するが故に涅槃を畏れず」と言はれるのです。この太子の御言葉における聲聞と菩薩のちがひについて黒上先生は次のやうに述べてをられます。先づ聲聞については「ここに聲聞とは即ち小乗教徒を指すのである。人生の痛苦無常を觀じ、生死の解脱を願ふ心はこれを否定すべきではない。」しかしながら「彼らが解脱を一我の天地に願求して、他と共に、人生を顧みざる思想は、つひに現實生死の裡の苦闘を厭ひ、理想を現實生活の外に求むるに至るのである」すなはち聲聞の求道はそれなりに認めるべきではあるが、それは「他と共なる生」を顧みず「一我の天地」に局限せられてをり、従つてそれが求むる理想は、「現實生活の外」に逸脱する。ところが菩薩の生き方はこれとは異なる。黒上先生は先に記した太子の菩薩についての御言葉をうけて「心つねに衆生救済の慈悲を抱くが故に生死動亂の間に處して厭はず、永久生命の信を念ずるが故に、発心求道の願を相續するもの」

と述べてをられます。すなはち菩薩の心はつねに衆生救済のおもひに満されてゐる。この菩薩のやうに「他と共なる生」の中で自らを省る心と、聲聞の場合のやうに「一我の天地」の中で自らの足らざるを思ふ心は本質的に異なる。菩薩の道を願はれた太子にとって、生きることとは、常に「他と共なる生」を生きることであつたし、国民の命を自らの命の中に感じ、全体生活のよろこびとかなしみとを、常に自らの心の中にたたへてゐるか否か、それを自らに問ひ自らに戒めつつ太子はその一生をすごされたのです。

これにつづいて「全體生活の開導教化を念じて」といふ言葉がありますが、「教化」だけでも意味は通じるのに、わざわざ「開導」といふ言葉をそへられたところに、特にその中に「開」といふ言葉を用ひられたところに、閉された世界から開かれた世界へと、「一我の天地」から「他と共なる生」へと導かうとされた太子のお心を偲ばれる黒上先生の御氣持がこもつてゐると思はれてなりません。

同じことは次の「求道精進」にも言へるのです。すなはち「求道精進」といふ言葉はこのすぐあとにも使はれてゐますが、そこでは太子の「求道精進」は「自らの解脱のためにあらずして、国民の共に歸趨すべき大道の實現にあつた」といふやうに書かれてをります。国民が共に赴くべき道、歸つてゆくべき道、それは「大道」、大はひろやかともよみますが、その「ひろやかな道」でなければならぬ。その大道を実現するために太子は「求道精進」されたので、

決して「自らの解脱」のためではなかったといはれるのです。私たちは「求道」とか「反省」とか言ふ言葉を聞いて、自分の手軽な先入観で受けとってしまふことがよくありますが、そのような粗雑な読み方をしてゐるととんでもない誤ちを犯すことになるといふことを、この例を心にとめながら考へていただきたいと思ひます。さてその次を読んでゆきませう。

維摩經義疏に、經典に

「若し自らに縛ありて、能く彼の縛を解かんは、是の處こゝ有ること無し。若し自らに縛無くして、能く彼の縛を解かんは、斯れ是の處有り」（文殊問疾品）とある佛語に対し、深く思想と實行との関聯を論じ給ひ、その最後に次の如く示し給ふ御言葉は、正しく此の御精神を顯はすのである。

維摩經といふ經典に次のやうな言葉がある。——自分自身が縛られてゐて、他の人が縛られてゐるのを解こうとしてもそれは不可能なことである。だが自分が縛られてゐない時には、他の人が縛られてゐるのを解いてやることは可能だ——勿論「縛」といふのは一つの比喩であつて、人間の内面の問題と見るべきでせう。則ち何かに捉はれたやうな精神状況をさすと考へていいのです。自分自身が捉はれた精神をもつてゐながら、他の人の心を導くなどといふことはあり得ない。さういふ經典の一節があるのですが、その佛語に対して太子は「深く思想と實行との関聯を論じ給ひ——思想と實行との関聯がどうあるべきかについて論を進められたといふこと

ですが、その内容についてはこのテキストではふれてをられません——その最後に次の如く示し給ふ御言葉は、正しく此の御精神を顯はすのである。」此の御精神とは先に述べてまゐりました「太子に於いては、これらの思想學術はすべて切実の求道体験に融化して開展せしめられたのである」または「時代の痛苦濁亂を啻に客觀視し給はずして、先づ自らを省みさせ給ひ、全體生活の開導教化を念じて求道精進し給ふたのである」といふところに見える切実の求道體驗と、全體生活の開導教化といふ二つの契機が一つに統一されてゐる太子の御精神をさすのです。その御精神を太子は次のやうな言葉で示してをられると書いてあります。

「何となれば則ち、若し天下の道理を論ぜは、悪を遣り、善を取るは必ず己に始まりて方に能く人を勸む。若し自ら能くせずんば、安んぞ人を進むるを得む」

意味は大略次のやうなことでせう。「經典に何故このやうなことを書いてあるかと言へば、天下の道理（国民すべてがふみ行ふべき道）から考へてみれば、『悪を遣り、善を取る』のは必ず自分から実行して、そのあとをはじめて他人に勧めることが出来るのだ——ここで『悪を遣り』と書いてあって、『悪を捨て』と書いてをられないことにも心をとめて下さい。私たちは永久に悪を「捨てる」ことは出来ない。切り離すことは出来ない。出来ることはしばらく遠ざ

けることだけです。その言葉の微妙なひびきの中に人間の心を洞察された太子の御心を偲ぶべきでせう。——だがもし自分でそれをやりとげることが出来ないでは、どうして他人を正しい道に導くことが出来ようか。」この太子の御言葉は実に強い、あふれるやうな確信を示してをられます。黒上先生はこの部分について、その後で次のやうに述べてをられます。

「『悪を遣り善を取るは必ず己に始まりて方に能く人を勸む。若し自ら能くせずんば安んぞ人を進むるを得む』との強き御言葉は、實にこの内的改革を先づ自らの御心に具現するに非ざれば、真に国民同胞を救済すること能はじと信知せさせたまひたる、内心の生の戦の深刻なりし事實を偲ばしむるのである。」

黒上先生は太子の御言葉の「強さ」の中に、太子の「内心の生の戦ひの深刻」さを偲んでをられます。言葉は、その意味の脈絡をたどるだけではだめなので、その言葉の調べ、その言葉の強弱に深く思ひをいたして、言葉に脈打つ筆者の、生のリズムを自らの内心に再現せしめなければいけない。さうでなければ本当に古典を読んだことにはならないのです。

ここで注意をむけていただきたいことは、佛典の言葉と、太子の言葉との関連です。すなはち佛典の方で述べてゐるのは、一般的な心理法則といふか、一つ概念です。人の心はかういふものだといふ法則が語られてゐる。ところが太子はその言葉を、太子自身のきびしい御体験の中でうけとめてをられる。従つて太子の御言葉には御自分の御心の中に深く刻みこまれた何

かが強く表現されてゐる。痛切な一つの体験が告白されてゐる、といつてもいいでせう。佛典の言葉を御自分の体験の中にかしこんでゆかれる、そこには最初に紹介しました小林秀雄先生の言葉をかりれば、太子の「胸中の温氣」が偲ばれるのです。さう考へてくると、古典に接する態度、古典の読み方、それを直接に、身を以てお示しになつたのが外ならぬ太子であり、法華、維摩、勝鬘の三つの經典に注釈を施された「三経義疏」はそのいみじき表現であると言へるのです。そしてその太子の学問に対する御態度を最も正確に捉へて書かれたのが、この黒上正一郎先生の御本なのです。經典―聖徳太子―黒上先生、この渦のひろがりの中に、学問のあり方、古典に対する接し方を是非よみとつていただきたいと思ひます。

(福岡県立修猷館高等学校教諭)

■ 青年研究発表

私の中に息づいてゐる国家

新日本製鉄労働部厚生課勤務

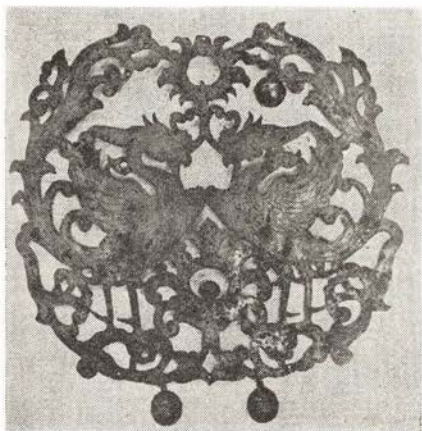
今

林

賢

郁

(二十八歳)



正倉院・鳳凰形裁文

私は八年程前にこの合宿教室に初めて参加したのですが、その時から今日に至るまで、ここで学んできたものをふり返りながら、お話をしたいと思ひます。

この合宿教室で学んだものは、実に様々な問題であつてそれが私にとってはいづれものつびきならぬ問題であつたわけですが、私は私なりにそれを今日まで考へ続けてをります。この合宿では友情の問題、学問に取り組む姿勢、古典に接する意味等いろんな問題が提起されてまゐりました。それは今にして思へばそれぞれ大切な問題であつたと思ひますが、その中でも殊に私にとって最も切実であり、しかも根本的な問題はやはり「国」といふ問題でありました。

国家の問題につきましては合宿最初の導入講義で山田先生から、われわれにとって国家とは何かといふまことに心のたけを尽くしたお話をいただきました。その中で山田先生は戦後の教育で脱落したものの一つは生と死の問題であり、国家の問題であつたと述べられました。また、国家的民族的といふことと人類的世界的といふこととならべてみてこの二つのどちらが、私どもの人生にとって真実であり、しかもほんもの思想であるか、この合宿で徹底的に洗ひ直してほしいといふお話もありました。私はそのお話を伺ひながら改めて国といふものが私にとってどういふ意味をもつてゐるのかといふことを考へさせられてをります。

さて私なりに国家の問題をお話し申し上げたいと思ひますが私がいまからお話しいたしますのは、いはゆる一般的な国家論ではなくして、私自身の中に息づいてゐる国家、したがって私

のきはめて限られた経験の中で把握してゐる国の問題であります。話を始めます前に、ちよつとみなさん、開会式のことを思ひ出してください。あの中で私も戦時平時を問はず祖国を守るために尊い生命を捧げられたすべての祖先の御魂に対して一分間の黙禱を捧げました。これをみなさん、どのやうにお受け止めになられたでせうか。ある方はこの合宿が祖先の御魂に対して黙禱を捧げることからスタートしたことはすばらしいと思ひになったでせう。あるひはなにがしかの反撥するやうな気持ちで受けとられた方もあつしやると思ひます。さらにはなんだかわからなかつたけれども、司会者の言葉のままに目をつぶつたといはれる方もあつしやるでせう。その感想はともあれ、思へば私も祖先の御魂の前に敬虔な気持ちになって頭を垂れ、国に生命を捧げられた人々の心を偲ぶといふやうな経験をもう久しく忘れてきてをります。

しかしこのやうな経験が国の問題を考へようとするに当って、どれほど重要な問題であり、決定的なポイントであるか、私にはしじみさう思はれますのでそのことを、私の経験を交じへながらお話ししたいと思ひます。

私は学生時代、大学に入学しましたところは無性に多くのものが知りたいといふ知的欲求に駆られてをりまして、自分に興味のあるものは次から次へと読みあさつてをりました。そして国の問題を考へるについても自分の中に国家論といふものを確立しなければ国は語れない、それがなければほんたうに国はわからないといふふうにしてをりました。私はさういふ意味でた

くさん書物は読んでまゐりましたが、知識は増えるのに一向に自分の中に国といふものが、国といふ全体像が浮び上がってこないのです。これはどうしてだらう、なぜだらうといふ思ひが次第に私の中にひろがってきたのであります。しかしどうしてもそれがわからない。なぜさうなかわからなかったわけでありすが、さういふことをしながら、また一方ではとにかく賢明に生きようといふ思ひを持ち続けてをりました。しかし真剣に生きようとすればするほどなぜだか周りから浮き上がってしまうやうな淋しさとつらさも味はなければならぬ。学園にはさういふ雰囲気がありました。そのやうなときに私は師に導かれてみなさんと同じやうに初めてこの合宿教室に参加したのであります。そこで私は様々の先生方と先輩と、それから友にめぐり合ったわけでありすが、その場で私が感じましたのはそこに集つてをられる方々は、少くとも日本人の一人として、国民の一人として責任を



持って切実に生きようとしてゐる人々であるといふことでした。そして私がそのやうな人々に出会ったことによつて私の人生にきはめて大きな影響をうけたことをいま思ひ返しますと、人との出会ひといふもののありがたさをただ思ふのであります。そして私は確かにここには学園と違ふ世界があると直感いたしました。私はそれらの人々と語つてゐると自分の心が躍動してくるのを感じました。しかもその人々はただ単に現在の人生だけでなく、長い過去から無限の未来につながつてゆく歴史的な人生と申しませうか、さういふ人生といふものを日々生きながら考へてをられる方々であるといふやうに考へられました。そのやうな人々がこの世にをられることは私にとつてまことに驚きであつたわけではありますが、と同時に私はその人々と接することによつてきはめて強烈な、鮮烈な印象を持つたのであります。それから私は学園で知識さへ詰め込んでゐればよいと思つてゐたこれまでの学問に、どこか間違ひがあるのではないかと感ずるやうになりました。そしてこの方々が自信に満ちた生き方をしてをられるのを見て、私もさういふ人生を生きてみたい、その方々が見てをられる世界といふものをのぞいてみたいといふ衝動に駆られたのであります。かうして私は単に現在だけではなく、過去、未来へとつながつてゐる人生を生きたといふことは一体どういふことかを、たとへば次のやうな和歌に接することによつて実感として受けとめてきたのであります。お手元にお渡ししました資料を見ていただきたいのですが、最初は松吉正資さんの歌であります。この方は国文研の先生方と学生

時代をともしにされ、東大在学中にはゆる学徒出陣で出征され、昭和二〇年沖繩特攻作戦に参加して水上偵察機で自爆して亡くなられた方であります。その方が戦に征くに当って詠まれた歌が次の三首であります。

述 懐

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのありがたきかな

数ならぬ身にはあれども吾を送る人のおもひにこたへざらめや

うつそみはよし砕くともはらからのなさけ忘れじ常世ゆくまで

この歌には思ひ上がりとか気負ひといふものはまったく感じられません。自分をここまで育ててくれた肉親あるひは友、それからそのやうなものをすべてを含むはらからに對する感謝の思ひがこの三首それぞれに歌ひ込まれてゐます。一首目の「人のなさけ」といふ言葉、二首目の「人のおもひ」、三首目の「はらからのなさけ」といふ言葉に接しますにつけてもそのやうな思ひが新になるものがあります。このやうな歌に接しますと、戦争の問題を単に反戦イデオロギ―といふ考へ方で概括してしまふことを許さない厳しい人生がここにある、私は痛切にさう感じます。

次に宝辺正久さんの歌であります。宝辺さんは国文研の同人であられ、いま下関で事業をなさってをられます。諸君お持ちの「国民同胞」の編集を昭和三十六年の創刊の時から今日ま

で事業のかたはらつづけてゐらっしゃる方でありませぬ。今度の合宿には事業で突然の事故があらまして残念ながらお見えになつてをりませぬが、その宝辺さんが何かの折に上京され、靖国神社に参られたとき松吉さんのこの三首目の歌が神社の境内に掲げられてあつたさうであります。そのとき宝辺さんが詠まれた歌が以下の連作です。宝辺さんは大学時代松吉さんの先輩でもあられ、親友でもあられたさうです。

手をすすぎ口をきよめてみ社の玉砂利をふむ音のすがしき

思はざりきわが友のうた目にしるく拝殿近くに掲げてありとは

わが友と再びここに会へるかとただよみかへすその名そのうた

忘れじときみはらからによせにける思ひはいまもわがむねにいく

むらがりてまた急ぎゆく人のなかにうたかきうつす人もありけり

まみすずしくわれにほほゑみ立つ友をおきて別るる心持こころするなり

車はせて道いそげども去りがての思ひつきざり靖国神社

宝辺さんの親友であつた松吉さんはすでに亡くなられた方ではありますが、そこにかかげられた松吉さんの「うつそみはよし碎くともはらからのなさけ忘れじ常世ゆくまで」といふ歌によつて宝辺さんの胸中にはおそらくまざまざと松吉さんの姿や言葉がよみがへつてきたのではないでせうか。二首目の「思はざりき」といふ歌から、四首目の「忘れじと」までの三首の中

には、そのやうな思ひがいつきに歌ひ込まれてゐるやうな気がいたします。亡くなった人は「はらからのなさけ忘れじ常世ゆくまで」と歌ひ、そしていま生きてゐる人は「思ひはいまもわがむねにいく」と死んで行つた友のことを歌つてゐる。私はこのやうな歌に接しますと、国といふものは無量の思ひを残しながら祖国のために生命を捧げられた人々と、またその思ひを無量の思ひで受けとめてゐる人々によって守られてきたし、かうして国の生命は絶えることなく守られてゆくのではないかと感じました。一つの例ではありますが、私はこのやうな歌に接することによって、過去、現在、未来へとつながる人生といふものがどのやうなものであるかを感じてきたのであります。

さうしますと、生命を捧げた人の心を偲ぶといふやうな経験がなく、つまり日本人としての切実な生き方もなされなままに論じられる国家論がいかにかといふことを私は感じるやうになりましたし、また自分が何の痛感もなしに国家を論じてゐたことの傲慢さと恥かしさに思ひ至つたのであります。と同時に自分がその気になつて目と心を開きさへすれば自分が国に直接できる道はここにあるのではないか、しかもその道は洋々として自分の前に広がつてゐるではないかといふふうを感じるやうになりました。確かに私どもが生きてゐる時代は、国家といふものは一体あるのか、ないのかわからないやうな状態です。また自由はあり余るほどある、それなら自分の生き方も自由に定めていいはずなのに一向に手ごたへのある自己といふものが

見つからず、あらゆるものに僕たちは所属してゐるやうでゐて、しかもそのすべてのものからこぼれ落ちてしまつてゐるといふやうな感じをいつも抱いてゐる。このやうな時代であれば眞剣な問ひかけは漫画的にならざるをえない。かくのごときはまさに時代の不幸ですし、このやうな日々を生きることが耐へがたい苦痛です。しかし私はさういふ時代に生きながらも、さきほどから述べて参りましたやうに先生方や先輩もしくは友と語るることによつて、あるひはすぐれた歌や古典に接することによつて自らの心が開かれてきました。そしてさういふ広ろやかな世界をのぞき見て、しかもそこで生きてゆくこの喜びを知るやうになりましたから、私の生き方は決つてまゐりました。

山田先生のお話にありましたが、はかない私どもの人生が無限の未来へとつながつてゆくために、やはり自分の心の中に、生命をかけるに足るもの、殉ずるに値する価値を見出す以外にはないといふやうなお話がありました。これは言葉として受けとめて、それを分析してみても決してわからないことであつて、やはりそのとほり自分で見出してゆく以外にはないのであります。私はかうして国の生命といふものを少しばかり実感できるやうになつてから私の生き方は強くなりましたし、確立されたやうに思つてをります。さうなつてまゐりますと国を考へることと自分が生きてゐるといふこと、あるひは生き方を考へることとは決して別様ではなかつたのだと思ふやうになつたのです。それは私にとつて知識が無用になつたといふ意味では

決してありません。私はやはり本も読み知識を増やさなければいけないし、またそのやうにしてはをりますが、それを支へるものとしては、いま申し上げましたやうなものが根本になければならないと考へてゐるものであります。

○

ここで国が自分の生命を捧げるに値する価値であるといふ時代、多くの人々が国といふ全体像をそのやうに受けとめてゐる時代、さういふ時に、もしも国そのものが崩壊するかも知れないといふ瞬間があつたとすれば人々はそれをどのやうに受けとめるのかといふことを少し考へてみたいと思ひます。それを私は今度の大東亜戦争の時代を生きた人々の心を偲びながら考へてみたいと思ひます。戦争といふ異常時の中で確かに国家意識は強烈に燃えさかつてゐたであります。しかし滅私奉公と言ひ、あるひはお国のためにと言ひ、あるひは聖戦遂行といふカテゴリーの中で、果たして国の実体といふものが国民の心の中に本当に息づいてゐたかどうかはまた自ら別の問題のやうに思はれます。むしろさういふ喧噪がなくなつて、もしかしたら国家がなくなるのではないかといふ、さういふ時、すなはち八月十五日のあの敗戦の日、そして敗戦のあの瞬間に国民の心の中にまざまざと国といふ全体像がよみがへつてきたのではないだらうかと思ふのであります。それを私は次の河上徹太郎さんの「戦後の虚実」といふ一文を引用しながら少しお話ししてみたいと思ひます。この「戦後の虚実」といふエッセイ集は昭和二

二年に書かれたものであります。敗戦二年目を迎へまして当時の論壇では天皇制に対する糾弾は盛んになされてをりますし、あるひは共産党による平和革命論とか愛国心論議、ヒューマニズムの問題等々が様々に論じられてゐる時期であります。そのやうな日々の中で当時をふり返つて書かれた一文であります。

「國民の心を、名もなく形もなく、ただ在り場所をはっきり抑へねばならない。幸ひ我々はその瞬間を持った。それは八月十五日の御放送の直後の、あのシーンとした國民の心の一瞬である。理窟をいひ出したのは十六日以後である。あの一瞬の静寂に間違ひはなかつた。又、あの一瞬の如き瞬間を我々民族が嘗て持ったか、否、全人類の歴史であれに類する時が幾度あったか。(中略) 今日既に我々は、あの時の気持ちと何と隔りが出来たことだろう！」

私は昭和一八年生れでありますのでこの敗戦の日はまったく私の記憶の中には存在してをりません。ただその後、あの日のことを写した古びたフィルムを見ることがありますが、宮城の前で頭を垂れてゐる國民の姿を見て私の心を横切るのは、國の総力を挙げて戦つた戦にいま祖國は破れた、その悲しみに必死に耐へようとしてゐる國民の姿であります。國家の敗北がつまりは自分の敗北であり、國家の死がすなはち自己の死であつたと感ずることができたこの一瞬は、おそらく自分が一体どこに所屬してゐるのかといふ所屬感を確実に受けとめえた一瞬ではなかつたでせうか。「あのシーンとした心の一瞬、その静寂に間違ひはなかつた」といふ河上

さんの文章に触れますと、私はなんとも名状しがたい厳肅さに襲はれるのであります。それは永遠であるべき国家、あるひは国家の生命がもしかしたらなくなるかも知れないといふことを、自分の人生とのつながりの中で確めた誠に稀有な一瞬ではなかつたでせうか。またその一瞬であつたからこそあの静寂が生れたのではないかと思ふのであります。

敗戦と占領状態の中で国民の心の中に解放感と自由が大きく拡がっていったといふのも事実であつたと思ひます。長い戦ひに疲れた国民の心にそのやうな思ひが拡がっていったといふのもけだし当然でせう。けれどもさういふ中においても心ある人々にとつてはその解放感と自由が幾多の同胞の死と祖国の敗北と無力化によつて得られたものであるといふ心のうづきが意識の奥深く存在してゐたのではないでせうか。ともあれそのやうな厳肅な一瞬といふものは、それを最後として今日に至るまでつひに私どもは持ちえてをりません。わずか二十七年前にはそのやうな一瞬があつた、だが今ではその一瞬のおもひをよみがへらせることすら出来なくなつてしまつてゐる。そのことは果たして時代の結果であるからそれで仕方がないんだと片づけていい問題でせうか。私どもがそれを苦痛とも思はないで生きてゐるといふことは、もしかしたら私どもがほんたうに真剣に、切実に生きようとしてゐないからではないでせうか。これは私ども一人ひとりが自分の心に直接に問ひ直してみるべき問題であると思ひます。私もまたそのやうな、いはば眠つた様な状態で生まれてきました。しかしその眠つてゐた心に灯がともさ

れたのは、この合宿を契機として、先生方や先輩、友とめぐり合ってからでした。私はいまその灯を持続し大きくしてゆかうと心がけてをりますし、その喜びをいま噛みしめてをります。この大きな世界に生きてゆくといふことは決して、右翼とか国家主義などの問題ではない。それは非常に楽しい、豊かな世界なのであり、その気持をみなさんにお話して、その喜びをお互ひに噛みしめてゆきたい、ただ私はそのやうに念じてこの場に登ってまゐりました。

○ 班別討論、あるひは班別輪読で苦しい思ひをしてをられる方もあつしやるでせう。けれどもその思ひを一生懸命語ったときに友が聞いてくれた、そしてみんながそれに背いてくれた、そのとき感じる喜びはやはり自分を越えて他につながったといふ喜びではないでせうか。私どもはそのやうな経験を積み重ねることをおろそかにしてはいけないし、そのやうなことをひとつひとつ大事にしてゆくことが国家といふ問題を考へるについてもやはり大きな要素ではないでせうか。そしてそのやうに心がけながら生きてをりますと、国といふ問題についていろんな事件なりいろんな言葉がいままでとは全く違った形で、生き生きと自分の心の中に飛び込んでまゐります。

昨年、陛下がヨーロッパをご訪問なされたときに確かベルギーのことだと思ひますが、陛下は「この半世紀は、国家にとつても自分にとつても苦難と辛苦の連続であった」といふ

やうなことをもらされたさうであります。そのとき私は瞬間的に陛下にとって国の歩みといふのは陛下ご自身の心の歩みであつたに違ひないと直感いたしました。国の苦難と辛苦をそのまま自分の苦難と辛苦として受けとめてこられた陛下のお気持は、いかばかり大変なことであつたらうと思つたのであります。そして私はそのお言葉を聞きましたときに、瞬間的に昭和二十年の陛下の御歌をまざまざと思ひ出したのであります。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

これは陛下の終戦直後に歌はれた歌ださうでありますけれども、陛下はこのやうな思ひで戦争を終結されたわけでありますが、このやうな御歌を思ひ出しながら、さきほどのお言葉に接したときに、私は深い感動をおぼえたのであります。

これは、たまたま一つの例であります。私はこのやうな体験を大切にしながら生きてゆきたいと思ひますし、そのやうな陛下のお気持を偲びながら、一人の日本人として、日本人らしく生きたいと思つてをります。

私どもがこの日本に生れたといふことは、選択の結果ではなくして宿命であります。好むと

好きざるとにかかはらず私どもの生活はこの日本といふ具体的な国家の中で生きてゆく以外にないわけでありますし、それなら私どもは日本人が日本人らしく生きてゆくといふことは一体どういふことなのだとはいふ問題をもっともって考へていいと思ふのであります。これから慰霊祭が行なはれるわけですが、私はそのやうな思ひを心に抱きながら祖先の御魂の前に額づきたいと思ひますし、その額づく気持の中からさらに私の中に国といふものを息づかせてゆきたい、それをもっと明確に確実なものにしてゆきたいと思つてをります。私がこのやうに思ひますのもなにも他人から強制されてゐるわけではありませぬし、時代がいかに変らうとも私の人生は私の人生であります。したがって私は自分の責任においてこの人生をより充実させて完結したいと思つてゐるだけであります。そしてそのやうなことを考へてゆくことは決して苦痛ではない、そしてそのやうな世界をのぞくことは喜びなんだ、そしてそれは自分の生き方を決めることになるのだと思つてゐるのであります。

以上申し上げたことは私のささやかな経験ではあります、それをみなさんにお伝へすることによつて、どうかみなさんもこの合宿で提起されてをります問題にほんたうに飛び込んでいていただきたい、そして皆さんの心の中に灯をともしていただきたいと念ずるわけでありませぬ。

合宿教室の中から見つけた私の生き方

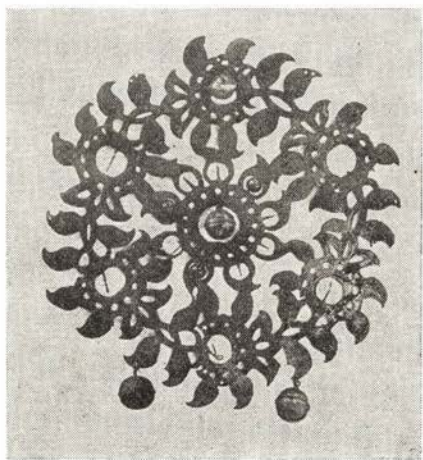
東急建設勤務、建築技師

奥

富

修

(二十六歳)



正倉院・金銅花形裁文

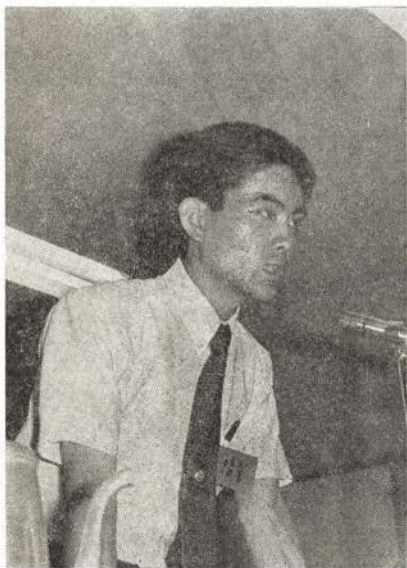
東急建設の奥富でございます。私もただいまお話しなさいました今林さんと共に国民文化研究会の会員でございます。今林さんは学生のころより毎回この合宿教室に参加なされ、引き続き卒業後もこの会に力を注がれてをられますが、私の場合は多少それと異なりまして、初めてこの合宿教室に参加いたしましたのは社会に出た年の夏でございました。当時私は多少社会と言ひますか、職業生活といふものに疑問を持ってをりましたが、ちやうどさういふときにこの合宿教室のあることを知りまして休暇をとるのに非常な困難な時期ではありましたが思ひ切つて参加いたしました。以来毎回この合宿に参加してをります。

私が初めて参加いたしましたときに、いろいろ貴重な経験、日頃えられないやうな経験をたくさんいたしました。その中でも私にとつて非常に大きな経験は和歌を作る、和歌といふものを創作するといふことでございました。さきほどみなさんが和歌の導入講義を聞かれ、そしてバスに乗つて草千里に行き、それから中岳に登山して帰つてこられました。私も同じやうに三年前、合宿教室がこの阿蘇で行なはれましたが、そのとき初めて参加いたしました。みなさまと同じやうに阿蘇へ登つたことを覚えてをります。しかしながらその当時の私にとつて和歌を作るといふことがどういふ意味を持つのかといふことをまだよく知りませんでしたので、ただなんとなく重荷になるやうな、さういふ気持で登山をしたことを覚えてをります。明日の晩にはけふみなさんがさきほど提出されました和歌の作品について全体批評および班別の相互

批評といふなかで、一字一句について細かい点に至るまで検討されることだらうと考へます。私も初めて作りました和歌を班員のみなさんに見ていただき、ともすれば、観念的に、あるひは概念的になりがちな自分の和歌を非常に鋭く厳しく指摘されたことを覚えてをります。

さういふやうな経験をこの合宿教室でいたしましたして、私は山を降りていったわけでありすが、会社へ帰りましてからもこの和歌を作るといふ経験は私にとって非常に大きな力を与へてくれました。ともすれば日頃どうしても傲慢になりがちな自分の考へを一つに集中して、そして自分の身の周りに起る事柄を正確に見つめ、的確に捉へて、それを相互に伝へていかうとする努力をつみ重ねることが、私には非常に大きな力となりました。私は和歌といふものが決して言葉をもてあそぶやうなものではないことを知りました。同時に私はそれまで和歌と言へばただ単に専門の歌人の方たちがお作りになるのであつて、自分とは無縁のものだと思つてをりましたが、合宿教室で和歌を作ることを経験いたしましたから、いやさうではないんだ、和歌といふものは、自分に非常に身近かなところにあるのだと思ふやうになりました。身近かなところにあると言ふよりは、むしろ自分自身の問題となつたわけです。三十一文字の中に自分の気持を、感じたままを歌ひ上げればいいと教はりましたが、しかしそれを実際に実行するといふことは実にむづかしいことです。和歌を作るといふことは自分の心の内容を捉へるといふことではないかと思ひます。言葉と心といふものが一つでなければならぬといふやうにきのう

のお話でもおっしゃいましたが、和歌といふものは自分の心の状態を否応なしにはつきりと映し出してしまふ。さういふものであると私は思ひます。当時私はさきほど御紹介にもありませんたやうに、建築の現場に勤務してをりまして、東京にお住ひの方はご存じと思ひますが、品川の駅の前に立つ超高層ホテルを建築中でございましたが、その中で私はヘルメットを被りながら現場の中を毎日のやうに駆けづりまはってをりました。私がただいまヘルメットと言ひましたのは、いはゆる赤軍派や過激派学生たちが被るやうな赤ヘルとか白ヘルといふやうな類のものではなく、建築の現場でいろいろな危険から自分の身を守るために被ってをります、私にとりましては非常に神聖な、また誇り高きヘルメットでございます。さういふものを被りながら私は毎日のやうに現場で仕事をしてをりました。時にはさういふ現場の中でヘルメットの下で汗をぬぐひながら真夏の入道雲を見上げ、そして働く喜びといふ



ものを和歌を通して表現したりしてをりました。

○

しかしながらさういふ生活を続けてゐるうちに、自分はさういふ非常に忙しい仕事に紛れてしまつて自分を見失つてはゐないだらうかと非常に気になるやうになりました。かうしてほんたうに自分の問題、人間とはいかに生くべきものなのか、あるひは學問にはどのやうに取り組んでゆくべきなのか、あるひは日本の國の將來は一体どうなつてゆくのだらうか、さういふことを決して自分の生活と切り離して考へることはできなくなりました。私はさういふ中で非常に少い時間しかありませんでしたが、その制約を受けた時間の範囲内で勉強を続けてまゐりました。さういふ中で私が非常に心をひかれて読みましたものの中に、私のやうに現場の技術屋が読むものとしてはみなさんとしては意外と思はれるかも知れませんが、文芸評論家であります小林秀雄先生のお書きになつた本がございました。私がいま先生と申し上げましたのは、ちやうどいまから二年前のこの合宿教室に小林秀雄先生がお出でになりました、そしてそこで私が直接に先生から教へを受けたといふ意味で先生といふ言葉を使はせていただいてをります。その小林先生がお書きになりました中で、「私の人生観」といふ書物がございますが、その中で職業といふものに触れられた一節がございます。その中で小林先生は「職業には天職といふものがある」と言はれてをります。「職業といふものが人にとってほんたうに自分の一切の喜びや

悲しみといふものを託しても悔ななければ、それこそ天職である」と言はれたそのお言葉が当時の私の生活、昼間は現場の中を駆けづりまはり、夜は夜で現場の机の前に坐り、そして図面のドローイングをしてをりました、それらの生活そのものが小林先生の言はれる「職業としての天職」としてよみがへってまゐりました。いはゆる世の中の一般の風潮としては職業あるひは会社といふものは、単に時間から時間、定時から定時の間を勤め上げさへすればそれで十分なんだといふやうな考へが非常に多いかも知れませんが、決してそのやうな態度では職業そのものの喜びを得ることはできない、としみじみさう思ふやうになりました。

○

私はまた小林先生の本といっしょに古典も読んでまゐりました。古典といひますのは、単に古い時代の書物といふだけではなく、われわれの先輩が心を込めて書き綴られた文章といふ意味だと思ひます。私は理工系の単科大学を出ましたので古典に取り組むのは容易なことではございませんでした。しかしそれでも漢和辞典などと首っぴきで読んでをりましたが、そのうちにその古典の中に書かれてある言葉一つひとつが、自分にとって非常に魅力のあるものとなってきました。それは古典の中の言葉一つひとつにそれを書かれた著者のお心、真剣な生き方といふものが込められてある、そしてその情熱がその行間を通して直接に私の心を打つ、さういふことであつたからです。私は古典の中でも特に吉田松陰のお書きになつたものには強く心をひ

かれました。吉田松陰という方は幕末の志士の多くの方々を教育された方として有名でございますけれども、私はその吉田松陰のお書きになったものを読むうちに次第に強くひかれてゆくのを覚えました。私はいまここで吉田松陰と呼びすてにしてをりますが、自分の心の中では松陰先生と呼ばせていただいてをります。それはこの世の中で私自身が直接にあひまみえる機会のある方ではございませぬが、しかし私にとってはこの世に生きてゐる方々に身近かに感じられますし、また先生の言葉を読むことによつて常に勇気づけられてゐるからでございます。

二年前の合宿に、さきほどご紹介いたしました小林秀雄先生がおみえになりましたが、そのときの小林先生のお言葉がいまやうやくわかりかけてきたやうな思ひであります。そのお言葉と言ひますのは、「歴史とは上手に思ひ出すことであり、古への人々の身振り、手振りといふものがまざまざと自分の心によみがへつてくるといふことである」といふ言葉であります。私は古典を読むことを通して歴史の渦の真只中に自ら飛び込んでゆき、直接に古人と胸を開いて語りあひ肌で触れ合ふことの出来るさういふ世界が現実存在するといふことを、身をもつて感じました。私はいま二年前の小林先生のお言葉がやうやくわかりかけてきたやうな気がすると思ひ上げましたが、しかしそれは小林秀雄先生だけに限ることではなく、この合宿教室に來られてゐる多くの講師の先生方、今回もいまままで何人かの先生方のお話がございましたが、その講師の先生方のお話は、決してその場で消えてしまふものではありません。そのときには先

生のお話がわからなくても何年かの私の生活に必ずその先生のお言葉がよみがへってくるはずだと私は思つてをります。さういふ気持ちで私も今回四回目の参加になりますが、講師の先生方のお話を初参加の方にも決して負けないつもりで一言一句も聞きもらさないつもりで聞いてをります。

○

この合宿教室の持つてゐる一つの特徴は、私はそのやうなところにあるのではないかと思つてをりますが、さらに申し上げますと、世の中一般に行はれてゐる研修会の形式といひますのは、多くがいはゆる指導者と被指導者、教へるものと教へられるものとが非常に明確に区別されてをりますが、さういふものに比べて、この合宿教室の運営は同学同行と申しますか、教へるものと教へられるものが一つに溶け合つて、そしてお互ひに負けないやうに切磋琢磨して勉強し合つてゐる、さういふものがこの合宿教室に具体的に存在してゐると私は思ふのです。そしてそれはいまの世の中では非常に稀なことではないでせうか。

私はただいま「同学同行」と申し上げます。同じく学び同じく行なふといふことですが、その同学同行といふ根本的な姿勢を真に支へてゐるものは何だらうか。それについて一言申し上げたいと思ひます。それは他でもなく昨晩、みなさまが輪読なさいました聖徳太子がお書き残しになられましたものの中に「十七条憲法」といふものがございます。そしてその中の第十

条に次のやうな言葉がございませう。私はその言葉がこの合宿の根本的な姿勢を支へてゐるものではないかと思つてをります。それは十条の中の最後のはうにある言葉でございませうが、「彼是とする時は即ち我は非とす。我是とする時は即ち彼は非とす。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ」といふ言葉です。この「共に是れ凡夫」といふ言葉、このお言葉に私は非常に心を打たれてをりますが、この「共に是れ凡夫」といふ意味は、人には社会的な地位の差、あるひは能力の差、そしてまた財産の違ひとかいふやうにいろいろの差はありませうが、つきつめて考へてゆけば人といふものは煩惱に満ち満ちた、あまりにも欠点の多い、まったくの凡夫ではないのかといふ言葉だらうと思ひます。私はこの「共に是れ凡夫のみ」といふ言葉を自分で噛みしめますと、ただ単に欠点だらけの弱い人間同士がなれなれしく肩を抱き合つてゆかうではないかといふやうな消極的な氣持ではなく、自ら凡夫であるといふ自覚に立つときに、それなら凡夫として限りある生命を精一杯に生きてゆかうではないか、お互ひに励し合ひながら生きてゆかうではないかといふ、さういふ氣持が私には非常に強くわきあがつてまゐります。

私は現在、会社生活をしてをりますが、その会社の中での一番関心事はいはゆる昇進といふこととございませう。具体的に申しますと係長から課長になり、課長から部長、重役になつてゆきたいといふやうなことでございませうが、私自身もそのやうな上の地位に憧れるといふ氣持を

全く捨てようとは思ひません。しかしそのやうなことだけに自分の全人生をひきずりまはされてしまふやうな、さういふ惨めな生き方だけは決してしたくないと思つてをります。さきほど申し上げました聖徳太子は、そのご生涯を通じて人としての道は何かといふことを求められた方であります。人としていかに生くべきか、あるひは人としてこれでいいのだらうかといふことを常にお求めになられた方であらうと私は思つてをります。私自身もまた人として踏み行なふべき道といふものを常に自分の心の中に求めてゆきたいと思つてをります。

○

私は最近、ここ数か月間学生の方々とお付き合い合ひする機会が沢山ございましたが、その間、現代の学生の中には自ら顧るといふことを忘れて、いたづらに他ばかりを非難するといふ姿勢が実に強いといふことを感じました。それは非常に残念なことであつてそれがきつと嵩じてくれば「共に是れ凡夫」として生きる生き方、さきほど川井先生からお話がございましたが、瑞々しい情感をたたへ、常に心豊かにして生きてゆかうといふ悲痛な願ひを無惨にも打ち砕くやうな生き方につながってくる。かうして人間らしい生き方を真向うから否定するやうな共産革命を理想とし、はげしい破壊思想をいだいて学園の中を駆けつりまはるといふことになるのです。ただいま私がここ数か月の間、多くの学生の方々とお話しする機会がありましたと申し上げますが、それは他でもなく、この合宿教室への参加の薦めのためでございます。私はこ

こ数か月間の社会人生活の中のほとんどすべての時間をこの合宿への勧誘に費してまゐりました。一日の勤務が終りますと毎日のやうに学生の方とお会ひしました。その中には自分の学校の後輩もありましたし、また友だちから紹介された方もございました。とにかく一人でも多くの方にこの合宿のあることを知っていただきたい、そしてできるならこの合宿に参加して勉強していてもらひたい、さういふ気持ちに支へられやうにまゐりました。私が初参加のときに経験いたしました湧き上がるやうな喜び、そして生きてゆくことの充実感、それを一人でも多くの方に知らせてあげなければいけない、それこそ自分の義務ではないかといふ気持ちにいつも支へられてをりました。しかしながら私の無力のゆゑに今日この場には私が勧誘いたしました方々は学生の方で四人、そして自分の会社の後輩一人きりしか参加していただくことはできませんでしたが、私の行なひました勧誘はただ単なる勧誘ではございません。それは自分の、限りある生命、その中でほんとうに自分とともに学んでゆける友だちが欲しい。一人でも多くの友を探してゆきたい、限りある生命を尽くして悔いない友、さういふ友を一人でも欲しいといふ気持ち、その一念があるがゆゑに行なつたものでございました、私は初参加以来三年経ちました。これまでお話してまゐりましたやうに、私は職業の中から古典を学び、職業にたづさはる生活を通して和歌といふものを作つてまゐりましたが、いまやうやく人生といふものがいかに生きていったらいいものなのか、あるひは学問といふものはどのやうに取り組んでいったら

いいのかといふことがわかってまゐりました。しかし、ここでみなさんにはっきり申し上げておきたいことは、それは決して私自身の力でやれたのではないといふことです。

いままで申し上げてまゐりましたやうな方々、小林秀雄先生、あるひは吉田松陰、そして聖徳太子、さういふ方々がご努力、ご精進なされたあとを学ばせていただいたことよって開かれてきたものでございます。私は日本という歴史のある国に生れた自分の幸せをほんたうにありがたいと思つてをります。いま申し上げました方々以外にも日本の長い歴史を支へてこられた方々、營々として日本の国を築いてこられた方々もたくさんあらうかと思ひます。そして、さういふ方々のたゆみないご努力のあとを自分が知ることよって、明日からの自分の生き方を正してゆき、さういふ方々に負けないやう精一杯に生きてゆきたい、さういふ氣持が自づと湧いてくるのであります。

われわれもいづれは死ぬときがまゐります。後世のわれわれの子孫からほんたうに尊敬されるに値ひする、決して恥ぢることのない自分でありたいと思つてをります。

第十七回

「合宿教室」のあらまし

(附) 合宿教室における学生の創作短歌

鹿児島大学 法文学部四年

徳丸雅信

「合宿教室」までの一年の歩み

「合宿教室」のあらまし

講義

研究発表、所感発表

班別討論、班別輪読

和歌創作

慰霊祭

合宿教室までの一年の歩み

戦後、日本は目ざましい復興を見せ、今日経済大国と言はれる程の地位にまで成長して来た。それは日本国民一人一人の懸命の努力の賜物であると共に、見落してならないのは、諸外国から受けた少なからぬ支援である。なかでも米国とともに、中華民国が我国に対し示した厚意は特筆に値する。例へば敗戦後、蒋介石総統は日本における天皇制護持に理解を示し、またソ連などの日本の分割占領の企てを未然に防いでくれた。しかも中国大陸に残留していた二百数十万にも及ぶ同胞を、早期に無事帰還させ、その上賠償の要求さえもいさぎよく放棄した。かうした一連の事実は、今日私達日本人の決して忘れてはならないことであり、そのお蔭で現在の日本の繁栄があると言っても過言ではない。

しかしながら、昭和四十七年九月二十九日をもって、日本は中華民国との外交関係を断ち、中共と新たに国交を樹立した。この日本外交の急転換が、中華民国はもとより、米国や東南アジア諸国、その他の諸外国に、多大の不信感を与へたことは否めない事実である。また日中国交開始を、「毛沢東思想の勝利」と自讃する中共が、これから後、日本共産化の魔手を急速に伸展してくるであらうことも、容易に想像される。

そもそも今回の外交的失敗のよって来る所以は何であらうか。それは単に外交技術の劣弱さ

といふに止まらず、外交方針そのもの、いや日本全体の国家目標そのものについての国民的合意が欠落してゐること——それどころか、国民的合意を成立させる基礎となるべき、国民的連帯を求めようとする意欲そのものが稀薄であるといふ、深刻な思想的混乱にその根因があるのではなからうか。国家の指針を正すべき司法界、教育界、マスコミの乱脈ぶりは、見るに耐へないものがある。そこでは、偏向過激のイデオロギーが、大手を振ってまかり通つてをり、「国を思ふ心」などは、見ようにも見当らない。このままでは日本は、内に分裂と相剋、外に輕侮と不信をかつて、衰弱の途を辿るはかはないやうに思はれる。

私達日本の青年・学生は、この祖国の憂ふべき姿を前にして、ただ手を拱き傍観してよいものであらうか。否、断じて否、私達は私達の手で、祖国の命脈を支へる手だてを、自らの力で発見しなくてはならない。そのためには、同じ志に燃える者達が力を合はせ、自らの志操と知見を磨き合ふ修練の場を、私達の周辺に形成しなければならぬであらう。

X

X

ここで昭和四十七年の夏、阿蘇で行はれた「合宿教室」のあらましを述べる前に、その前年、霧島における第十六回の「合宿教室」以後の一年間の学生を中心とした活動の概況を記しておきたい。

霧島の山を降りた直後、合宿運営の中心となられた田村先輩（九州大学医師）から全国の学

生に蹶起を促す檄文が發送されたが、それに応へるやうに同年秋、東西両地区で二つの合宿がもたれた。すなはち東日本地区では、秀峰富士をま近に仰ぐ御殿場の国立青少年センターで、西日本地区では福岡市の東、筑豊に近い山ふところ深く建てられてゐる八木山青年の家で、それぞれ二泊三日、三泊四日の日程で行はれ、主として歴代天皇の御製、聖徳太子、吉田松陰などを中心にしたきびしい研鑽が積まれたが、八木山合宿では戦前信州の菅平で行はれた合宿の記録映画「文化の戦士」が上映されて参加学生に深い感銘を与へた。合宿の詳しい状況については、省略するが別表を参照していただきたい。

その後翌年四十七年春にかけて各大学では「授業料値上げ反対」の運動を中心にして、ふたたび騒然とした空気に包まれてゐたが、その間九州大学の友らが次々にストライキ阻止のための文書を学内に配布したのをはじめ、学園正常化のため立ち上った全国の友らも多かった。

さらに東京では東京工大に「歴生会」（歴史の中に生き方を探る会）が、亜細亜大学には「日本文化研究会」が誕生、熊本では東京の「正大寮」、福岡の「葦牙寮」につづいて学生の活動と勉学の第三の拠点として「時習義塾」（熊本の藩校、時習館）にちなんで命名されたものが開かれ、塾長松田信一郎君（熊大工学部三年）を中心にして活潑な運動にはいったし、福岡では毎月「短歌通信」を発行、國を守ることは、「ことのはのみち」としての「敷島の道」を

東日本地区御殿場合宿日程表（昭和四十六年十一月）

	12日（金）	13日（土）	14日（日）
6			
7		起床	
8		朝の集ひ	同 左
		朝食	
9		講義「吉田松陰」	発表・全体討論
10		（小柳陽太郎先生）	「天皇問題に関する所信」
			（山口秀範・奥富修一）
11	オリエンテーション （会場使用上の諸注意打合せ、その他）	班別討論	講義「聖徳太子の信仰」※
12			
1	昼食	同 左	同 左
2	開会式 自己紹介	講義（上村和男） 質疑応答	※ 思想と日本文化創業 （小田村寅二郎先生）
3	所信発表（四年生）	発表「後鳥羽天皇御製」（青山直幸）	全体所信表明
4	発表「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」 （伊藤・安納・広瀬）	和歌創作	感想文執筆・閉会式
5			
6	夕べの集ひ 夕食 入浴	同 左	同 左
7			
8	全体輪読「吉田松陰と久坂玄瑞の往復書簡」 （開 克 史）	発表「今上天皇御製」（原川猛雄） 講話（磯貝保博）	懇 談
9	グループ輪読	班別和歌相互批評	
10			
11	就 寝	就 寝	就 寝

「合宿教室」のあらまし（徳丸）

	20日（土）	21日（日）	22日（月）	23日（火）
6				
7		起床 国旗掲揚 体操・朝食	同 左	
8				同 左
9		講義「往復書簡」 （小柳陽太郎先生）	講義「聖徳太子の 信仰思想と日本文化 創業」 （小田村寅二郎先生）	講義「時局に思ふ」 （川井修治先生）
10		班別輪読 「吉田松陰と久坂玄瑞の 往復書簡」	班別輪読 「聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業」	合宿を振り返って （田村潔）
11				全体意見発表
12		昼食		感想文執筆閉会式
1		講話（瀬上安正先生）	昼食	
2		全体討論 「往復書簡について」	登山 （竜王山）	
3		休憩		
4	開会式	班別討論	全体輪読「短歌のすずめ」 （北島照明）	
5	学生発表 （天本、徳丸、小林、肱岡）	講義「墨使申立の趣論駁条」 （小柳陽太郎先生）	講話 （今林賢郁）	
6	夕食 入浴 散歩	同 左	同 左	
7	合宿趣旨説明 （片岡 健）	講話 （田村潔）	班別和歌相互	
8			批評	
9	班別討論	講話（加藤善之先生）		
		班別討論	講話（青砥宏一先生）	
10		和歌創作第一回感想文執筆	映画鑑賞 「文化の戦士」	
11	全体懇談 就寝	就寝	就寝	

西日本地区八木山合宿日程表（昭和四十六年十一月）

守ることだといふ信条を数葉のプリントの中に刻んで全国の友らに送りつづけた。
なほこの間に行はれた各地区での合宿の中主なものは左の通りである。

鹿児島大学信和会・社会科学研究会合同合宿（46、10、21）

東京地区検見川合宿（47、4、29）

玉川大学日本文化研究部合宿（46、9、10）

亜細亜大学日本文化研究会合宿（47、2、19）

早稲田大学同信会合宿（47、3、4）

東工大学歴生会合宿（47、3、18）

熊本大学信和会合宿（47、3、23）

西南大学信和会合宿（47、4、3）

この外必ずしも学生を対象にしたものではないが、富山の岸本弘先輩（高岡聾学校教諭）を中心とした「青年日本文化研究会」の合宿、（46、9、11）

佐世保の朝永清之先輩（佐世保市役所勤務）を中心とした「日本文化研究会」の「第二回、日本の未来を開く学生、青年合宿研修会」（47、7、1）

などがもたれた外、横浜の国武忠彦先生（横浜翠嵐高校教諭）

を中心にした「O、B通信」が昭和四十六年の十一月以降、精力的に配布されて、O、Bの方々(合宿教室から巣立ってゆかれた若い社会人の方々)は勿論我々学生にも大きな力を与へられたことを付記しておきたい。

このやうな運動の積み重ねの上に、昭和四十七年八月、全国から約四百名の参加を得て合宿教室は開かれたのである。(この項、早大文学部四年、藤井 貢記)

「合宿教室」のあらまし

「第十七回学生青年合宿教室」は、恰も日中国交正常化が大詰を迎へ、世上騒然たる中で挙行された。従つてこの問題が講義ならびに討論の、一つの焦点となつたのは自然の成行であつたが、同時に日本全体をおし包む思想的混乱、それを打破し克服する決意と方法について、全精力を傾けての取り組みがなされたのも当然のことであつた。期間は、昭和四十七年八月五日から九日迄の四泊五日間。場所は阿蘇国立公園の「阿蘇の司」。研修テーマとして、次の三つがとり上げられた。

- A 世界の動向と日本の進路
- B 総合的な人生観の探究
- C 教育改革の方途

宿舎は、ま近に阿蘇五岳を望むカルデラ内の一角にあった。窓から見渡す眺望は、一面緑の草原であり、夕暮時には、ひぐらし蟬の聲が響きわたる閑静な場所であった。

大合宿に先立ち、全国から約三十名の学生を集めて、八月一日から三日迄、二泊三日にわたる事前合宿が行なはれた。これは、各大学での勧誘活動の中心となってきた学生が、大合宿に於ても班長あるひは副班長として班運営の任務を担ふため、今一度お互ひの意思を確かめ合い、合宿に臨む姿勢を整へるために行なはれたのである。四班に分かれての「短歌のすすめ」及び、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読、討論、そして和歌の創作、相互批評などの日程が組まれた。時と共にお互ひの気持が緊張し、次第に高まってゆくのを覚えた。そして最終日の全体意見発表では、明後日に迫った大合宿に臨むにあたっての、各人の張りつめた思ひが次々と述べられ、皆共に一丸となつて、合宿に取り組まうとする並々ならぬ決意が、お互ひの心を一つに結びつけていったのである。

四日、直ちに合宿準備作業にとりかかった。決められた分担通り、日程表を書くもの、班別一覧表を作製するもの、名札に一つ一つ名前を書き込むもの、毛筆で演題を書くもの等々、全員一致の協力作業によって仕事は次々と処理されてゆく。屋外でのポール作りや草刈りも行なはれた。毎朝、体操や朝の集ひが行なはれる場所の造成のためである。鎌を握る手にも力がこもった。皆ぎこちない手つきながら、みるみるうちに草の山ができた。このやうにし

て作業は順調に進み、五日の午前中までには準備はすっかり整ひ、あとは友を待つだけとなった。玄関には真白い布に、「友よと呼べば友は来たりぬ」と大書された横断幕が掲げられてゐる。十時を過ぎる頃から、一人二人と、重さうなバッグを手に友らは到着し始めた。阿蘇駅に案内のため出向いた友は、次のやうに詠んでゐる。

熊本大 坂本精児

全国ゆ友らをのせし汽車つけばおのづとマイクをにぎりしめけり

マイク呼びかけをればともどちは笑ひをうかべてヤアーと手をあく

大ぜいの乗客の中より一人一人集り来るはうれしく思ほゆ

参加者の内訳は次の通りである。

◇（学生班 五十五大学）〔東日本〕亜細亜31・早稲田19・慶応・日本経済短・明治各6・専修・東京工・駒沢各5・法政・中央各4・東京外・玉川各3上智・東京・立正・立教・東京電・拓植・明星・玉川女子短・国学院各2・成城・東京学芸・東京理科・女子美・中央鉄道・成蹊・桜美林各1〔西日本〕熊本31・鹿児島26・九州21・長崎12・福岡10・熊本商6・鹿児島経4・福岡教・西南・岡山商各3・佐賀・福岡女子・中村学園各2・熊本工業・大分・山口・延岡短・熊本短・下関市立・国際経済・神戸・関西学院・富山・香川・鳥根・岡山・大阪・岡山大安寺高卒各1計二六二名（うち女子四五名）

8月7日(月) (第3日)	8月8日(火) (第4日)	8月9日(水) (第5日)
起 床 朝 の 集 ひ 朝 食	起 床 朝 の 集 ひ 朝 食	起 床 朝 の 集 ひ 朝 食
「日中国交正常化の 問題点」 経済学博士 山本 勝市	「大自然の法則と文明」 評論家 胡 蘭 成	合宿運営委員アピール 全体意見発表
質 疑 応 答	質 疑 応 答	「合宿をかへりみて」 国民文化研究会 理事長 小田村寅二郎
「和歌創作について の導入講義」 亜細亜大学・教養部長 夜久 正雄	諸先生のお話 (大学教官有志)	感想文執筆と第2回 和歌創作
記 念 撮 影	昼 食	閉 会 式
阿 蘇 登 山 (昼食携帯)	「人間本来の心を取り 戻さう」 国民文化研究会 理事長 小田村寅二郎	(解 散)
和 歌 創 作	班別輪読または 班 別 討 論	
	地区別・大学別連絡会	
夕 入 散 食 浴 歩 (和歌提出)	夕 入 散 食 浴 歩	
青年研究発表 今林賢郁・奥富修一	「和歌全体批評」 亜細亜大学教養部長 夜久 正雄	
慰 靈 祭	和歌相互批評 (班 別)	
中間感想文執筆 班 別 懇 談		
就 床	(最後の夜の集ひ) 就 床	

「合宿教室」のあらまし（徳丸）

第十七回 「合宿教室」 日程表	8月5日(土) (第1日)		8月6日(日) (第2日)	
	7:00		起 床	
	8:00		朝 の 集 ひ 朝 食	
	9:00		「世界の動きとその解釈」 世界経済調査会理事長 木内 信胤	
	10:00			
	11:00		質 疑 応 答	
	12:00		昼 食	
	1:00		班 別 討 論	
	2:00		「マルクス主義の超克」 鹿児島大学教授 川井 修治	
	3:00	開 会 式 合宿趣旨説明と 合宿諸注意伝達		
	4:00	班別自己紹介 班 別 討 論	班 別 討 論	
	5:00			
	6:00	夕 食 入 浴 散 歩	夕 食 入 浴 散 歩	
	7:00		「輪読を班別で行なふに ついての導入講義」 修猷館高校教諭 小柳陽太郎	
	8:00	「われらにとって国家と は何か」 福岡教育大学助教授 山田 輝彦		
	9:00	班 別 討 論	班 別 輪 読 「聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業」	
	10:00		就 床	就 床

◇(社会人・教育班) 会社員 熊本県小中教諭 福岡県小・中・高教諭 実業 団体職員
計五八名

◇(招聘講師) 三名

◇(来賓参加) 二名、(大学教官有志協議会) 四名、(国民文化研究会) 五三名、(会友) 二名、
(見学参加者) 五名、(写真班、記録班・事務局) 一三名、総合計四〇二名

男子学生は、七名ないし八名を単位として三十班に編成され、各班に一名の班長がわりあてられた。従来班長は全員学生があてられて来たが、今回は半数近くの班長を国文研の若い会員が受持ち、学生と寝食をとみしながら、班の運営に専心した。更に、女子学生は五班に、教員・社会人は七班に編成され、国文研の会員が班長として配属された。

午後二時から開会式。九州大学理学部三年の堀田真澄君による開会宣言に続いて国歌斉唱。そして、「戦時、平時を問はず、故国日本のために尊い生命を捧げられた祖先のすべての御霊」に対して、一分間の黙禱が捧げられた。そのあと、国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生が、開会の挨拶に立たれ、「心の素直な力といえますか、素直な気持をたたへてゐる心の持ち主、その人同士が話し合ひをしてゆくとときに、本当に心の底まで胸襟を開いて話し合ふ道ができてゆきます。そこに本当の人間の値打ちがあるのだといふふう考へてをります。この合宿の

中でぜひその道を実現して下さい。」と語られ、合宿に臨む心構へを示された。次に大学教官有志協議会を代表して登壇された亜細亜大学教授の夜久正雄先生は、御自分の学生時代、合宿に参加された体験を話された後、「現在の国の姿には、実に恥しいおもひをいたしてをりますし、力ない身を嘆くのみでありますけれども、お互ひに一所懸命勉強し、そして国の汚れをそそぎ、何とか立派な国の姿にしてゆきたいものです。」と述べられた。最後に地元学生を代表して、熊本大学法文学部四年の福永好紀君は、「一日一日、一時間一時間の体験が決してとりかへすことのできないものだといふことを心に定めて、精一ぱい頑張りたいと思ひます。皆さん、しっかりとやりませう!!」と力強く訴へた。

開会式に引き続きオリエンテーションが行なはれた。坂東一男合宿運営委員長の合宿趣旨説明の後、学生所懐表明。最初に立った鹿児島大学法文学部四年の徳丸雅信は、日頃同じサークルで、研鑽し合つてゐる友とさへも心をかよひ合はせることが難しいと、大学生活での体験を語つた後、明治天皇の御製、「まごころをうたひあげたる言の葉はひとたび聞けば忘れざりけり」を拝誦し、「まごころから発せられた言葉こそ、本当に友の心を打つものであると信じてゐます。」と結んだ。ついで、九州大学医学部六年の小柳左門君は、聖徳太子の「群生と苦楽をとにもにす」という御言葉は、群生をたすけてやるといふことではなく、一緒に苦しまうという姿勢を示されたのであると述べ、「この合宿では、友達の気持を真剣に汲みとりながら、苦しみ

と、楽しみをともしようではありませ
んか。」と心をこめて語った。そして最
後に、本合宿唯一人の外国人参加者と
して、亜細亜大学一年のチベット人、ペ
マ・ギャルボ君が登壇した。ギャルボ君
は、ここに立って皆さんに、自分の国に
ついて話せることが何よりもありがたい
と述べた後、チベットの歴史から話し始
めた。そして、「現在は、チベットとい
ふ国はないのです。いまから十五年前、
一九五九年に中共にとられたのです。」と
述べ、更に、「子供達が五才以上になる
と強制的に中国へつれていって、洗脳しはじめました。私の兄さんもつれてゆかれました。」
と鋭い眼差を向け、時折手ぶりを交へながら訴へかけた。祖国を奪はれ、肉親をも奪はれた悲
痛の体験を通しての必死の訴へは私達をして奮い立たさずにはゐなかつた。涙がこみ上げてく
るのを覚えた。ここに一学生の歌を記すが、それは私達全員の気持をあらはすものであった。



ペマ・ギャルボ君

九州大 天 本 和 馬

チベットより来たりし君は壇上で祖国の危機を強く訴ふ

大国の力によりてチベットの祖国の生命まさに絶えむとす

兄上を他国に連れて行かれしてふ君が思ひはいかばかりならむ

古ゆ受けつがれこし言の葉は使ふ能はずと我らに訴ふ

国土までか言の葉までも奪はれしチベットの人の心やいかに

解放をとなふる裏でかくのごとく国の生命を奪ひとるとは

かくのごとく国奪はれし話聞けば日本の生命絶やさじと思ふ

かくして、片岡健合宿指揮班長の諸注意をもつて、開会式及びオリエンテーションは厳粛な雰囲気の中に終了した。

講 義

招聘の三講師は、世界経済調査会理事長の木内信胤先生、経済学博士の山本勝市先生、そして評論家の胡蘭成先生である。木内先生はこの合宿教室には既に十三回連続、講師として登壇されてをり、又日華協力委員会、日韓協力委員会の委員をも兼任せられて幅広い活動をなさつてゐる。この合宿教室二度目の講義をしていただく山本先生は、元代議士として、又自民党の

「日中国交正常化協議会」の重要なメンバーとして活躍されてをられる方である。そして胡先生は、日支事変当時、汪兆銘政権の下で要職に就いてをられたが、戦後、中共政権の成立直後日本に亡命され、爾来二十有余年間故国を離れ、故国の誤まった姿を正すべく尽力されてゐる方である。折しも昨年のニクソン訪中以来、たとへ台湾政府は見捨てても、中共政府との間に国交を樹立すべしといふ焦りにも似た議論が抬頭し、皮相な中国論議が世上を横行してゐるこの頃である。このやうな中で、偏らない視野からこの問題に取り組んでをられる三人の先生方から、問題の詳細な分析と適確な指針を示していただく機会を得たことは、私達にとって無上の幸せであつた。

以下に合宿中の各講義について概略を記すが、詳しくは本書に講義の記録が掲載されてゐるので、そこをお読み頂きたいと思ふ。

合宿第一日目は、福岡教育大学助教、山田輝彦先生の、「われらにとって国家とは何か」と題しての御講義であつた。先生は冒頭から、「私の『国』といふものについての経験から、国家には権力機構や、組織、制度など客観化することのできるいはば外なる国家と同時に、内なる国家と言へるものがあります。それは私達にとっては生命であり、価値であり、私達自身の心の中で味はひ、感ずるしか方法のないものです。」と問題の核心に触れられ、更に大学立法成立以来、数こそ減つて来てはゐるが、連合赤軍事件、テルアビブ空港事件と、いよいよ過

激化の傾向を見せる左翼学生運動について、詳細な分析を加へられながら、「一番責任があるのは戦後の教育です。戦後の教育からは、国家といふものが徹底して排除されましたが、日本といふ国の中で生きてゐる以上、国のことを忘れてゐると、生の充実感がなくなり、空虚感だけが残ってしまひます。」と話を進められた。そして最後に、戦後思想には、人間が運命的にその中に組み込まれる。国々と、これまた人間が必然的に直面しなければならぬ。死といふものが欠落してゐる。この合宿では、それらの問題を真剣に見直してほしいと訴へられた。

第二日目は、招聘の講師として最初に、木内信胤先生が御登壇された。演題は「世界の動きとその解釈」であつた。先生は昨年の霧島合宿でのお話を踏まえられ、その後の世界の動きは相当に激しいものであつたと、主な事件を列挙されながら、それぞれについて解釈されてゆかれた。殊に、中共の国連加盟と台湾の国連追放について、「以前までは国連に加入する国は、平和国家といふことを前提としてゐたが、今度の事件は国といふものであれば、国連の目的に反する国でも何でも加入させるといった態度を示したものである。」と国連が、その性格を根本的に変更させたことを指摘された。更に、日中国交正常化の問題に論及され、「中共と国交を結び、台湾とも国交を保つのが一番よい。」「もし台湾と国交を断てば、そんな不信不義の国は誰れも信用しなくなるから、将来、米国とも韓国とも国交を断たなければならぬやうになるかもしれない。そのことを覚悟すべきである。」と、恰も中共と国交を開始しさへすれば、何

もかもうまく行くかの如く言ひ立てるマスコミの論調に対し、厳然と反論され、現下日本の置かれてゐる厳しい状況を説かれた。私達は世界のあらゆる動向について、幹竹を立ち割る如く明快に、解釈を展開してゆかれる先生のお話に、自然とひき込まれながらも、全身奮ひ起たされるやうな思ひであった。

続いて午後には、鹿児島大学教授、川井修治先生の「マルクス主義の超克」と題してのお話があつた。先生は共産主義が如何に残虐非道のものであるか、歴史上の实例を引かれながら説明され、共産主義理論の根本的な欠陥は、人間の歴史を物質によって構成されたもの、つまり物質の運動法則によって必然的に律せられるものと見做すところにあると指摘された。そしてこの共産主義の克服こそが、現下日本の緊急の課題であり、そのための第一歩は、共産主義理論から除外されてゐる精神性の回復にある、「精神性の回復とは、単なる言葉や概念思弁によつて達成されるものではない。まず自己の内心をじっくりと凝視し、そこに動きつつある自然の情緒をしっかりと掴むことである。」と話された。そして、「マルクス主義の超克とは、自分自身が家族や友人、更には祖国・先祖を含めた自分のまわりのものに愛情と共鳴を感じつつ、瑞々しい情意を体験的にかよはず努力を実際に行なつてゆくことである。」と結ばれた。私達はともすれば、共産主義を単なるイデオロギーとして、観念的に論議することだけに終止しがちであつたが、先生の御講義によつて、共産主義の克服とは、実は自己の内心との永久の戦

ひであることを知らしめられたのである。

三日目は、山本勝市先生が、「日中国交正常化の問題点」と題してお話しをされた。先生は御講義に先立ち、「私は現在七十六歳で余命幾許もない。今から遺言のつもりで話しをするから、どうか耳を傾けて聴いて欲しい。」と、全員を見渡しながら静かな口調で語り始められた。この切々たる心境の表白に、私達全員身の引締まる思ひがし、水を打ったやうな静けさの中でお話しに耳を傾けたことであつた。

先生は、「日中国交正常化」促進論の理論的根拠の曖昧さを一つ一つ指摘されながら、現在マスコミが取り上げてゐる「日中国交正常化」といふ言葉の意味するものは、「国民政府との国交を断つて、北京政府と国交をもたうといふことである。」と述べられ、日本が、とるべき進路を軽率に決定するならば、将来に大きな禍根を残すであらうことを強く訴へられた。そして日中国交開始に臨むに当り、あくまで対等の立場で交渉すべきであること、日米関係はもとより、日本の既存の対外関係を損はないことが大切であることを説かれた。そして、自分は今からすぐ東京にとって返し、政府首脳の翻意を求むべく最後の努力をするつもりであるが、諸君もそれぞれの立場において、正論を少しでも盛り上げるために最大の努力をしてほしい、と訴へられた。山本先生のお話しをお聞きした後、友はその感動を次のやうに歌に詠んでゐる。

老ゆる身をかへりみもせず国のため尽くし給へる御心忘れじ

かくばかり日の本の行末案じたまふ師のお心にむくいざらめや

台宿四日目、午前中は胡蘭成先生の御講義であった。テーマは、「大自然の法則と文明」。先生は御講義の初めに、「明治維新のやうな、大きな改革がこれからの日本には必要です。今の政治家や財界人にその力はありません。それをなし遂げるのが青年であることは、歴史の示すところです。幕末の維新の志士達を見ても、殆どが二十代の若者達です。」と話された。その御言葉は、私達青年の使命が如何なるものであるのか、そしてまた、その責任が如何に重いものであるのかを痛感せしめるものであった。やがてお話しは「大自然の法則」へと進み、「自然科学は偶然のことはわからない。必然のことしかわからない。ところが自然には、必然よりは偶然のことが多い。」と科学のもつ限界を説かれ、更に、「山にある石は全く無秩序にあるやうに見えるが、そこにあるべくしてあるのであって、ちゃんとした秩序がある。それは自然の意志である。」と説き進められた。終始、優しい眼差を私達に向けられつつ、淡々と自然の法則について語られる先生は、時折言葉を休められ、遠く離れた故国の山河に思ひを馳せてをられるかの如き印象であった。

昼食後、最終講義として、小田村寅二郎先生が壇に立たれた。先生は、「人間本来の心を取り戻さう」と題して、合宿中での諸先生方の御講義を振り返られながら、先生方がそのお話しに於て展開された理論よりも、その方々の片言隻句の間からにじみ出てゐた愛国の情をこそ汲み取って戴きたいと話された、又日本人である私達が日本人であることを忘れ、抽象的に国家について論ずることの無意味さを指摘され、具体的に私達が生活してゐる日本といふ国を考へる場合、どうしても避けて通ることのできない天皇の問題にお話しを進められた。先生は幕末の孝明天皇の御歌、「すましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ国民」と昭和二十年の今上天皇の御歌、「爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも」を引用されながら、「日本人の誰もあの大東亜戦争を止めることができなかった。その時、御自分の身はど



左から 小田村理事長、胡蘭成先生、松本唯一先生

うならうとも、戦争を止めようとなさったのが今の天皇といふ方なのです。」「歴代天皇の御氣持には、御自分を先立たせるといふことがない。さういふことをずっと修練なさってこられたのです。現に孝明天皇の御歌と今上天皇の御歌は、同じ御氣持で続いてゐるではありませんか。』と語氣強く私達に訴へられた。その時の思ひを詠んだ一人の友の歌を附記しよう。

東京学大 田 島 正 行

迫り来るあつき思ひに胸つまり思はず我はまなこ閉ぢたり

∧研究発表・所感発表∨

さて順序は前後するが、合宿三日目の夜、慰霊祭の前に青年研究発表の時間がとられた。発表者は国文研会員・新日鉄勤務の今林賢郁さんと、同じく東急建設勤務の奥富修一さんであった。

まず今林さんは、学生時代国といふ問題を考へる場合、体系的な国家論をもたねばならないと思ひ色々な本を読んでみたが、納得のゆく国家論は得られなかつたと体験に即して話され、続いて、「この合宿教室に参加して、国の運命と切り離して考へることのできない生き方に触れ、国といふものを実感として感じることができました。」と学生時代を思ひ返されるやうに

静かな口調でしかも力強く述べられた。

次に立たれた奥富さんは、自分は不幸にして学生時代にこの合宿を知る機会を得られず、社
会に出てから初めて知り、上司に頼み込んで参加したと話された後、「私はこの合宿で古典を
読むことを知った。古典を読んでもゐると、その言葉の一つ一つにひかれる。直接には相まみえ
ることのできない先人の情熱が蘇ってき、私を打つ。」と、古典から教へられた貴重な体験を話
してゆかれた。私達は、両先輩が社会人として多忙な日常のかたはら、常に道を求め真剣に生
きてをられる姿に接し、心底から励まされると共に、両先輩の合宿での体験に即したお話しを
うかがひ、この合宿教室の一刻をも疎かにできないことを痛感させられたのである。

四日目の午前中には、この合宿教室の共催団体・大学教官有志協議会の先生方のお話しがあ
った。亜細亜大学教授（宗教学）の梶村昇先生は、最近視察されたインドネシアの人々が祖先
の祭りを、そのまま伝承して力強く生きてゐる様子を話され、祖先の心を受け継ぎ伝えること
が如何に大切なことであるかについて話され、九州大学助教（国史学）の山口宗之先生は、
幕末の志士達を中心にお話しをされ、「左翼学生が志士と違ふところは、自らの心に清らかな
感動がなく、従つて他人を感動させることもできないといふことである。」と喝破された。続い
て広島商科大学教授（哲学・倫理学）の岡昌宏先生は、大学における研究と教育について論及
され、「大学人には最も根源的なものに対する情熱が必要である。」と、現在の大学が陥つてゐ

る弊害に対して鋭く指摘された。最後に登壇された、鹿児島大学教授（農学）の宮司佑三先生は学生部長として大学紛争の解決に、身を以って処せられた御経験を通して、「過激派の学生は何でも批判すればよいと思つてゐるが、相手の言ふことを十分に汲み取り、咀嚼してから出てくるものが批判ではないか。」と、現在の学生の軽薄な態度を歎いてをられた。以上四先生方のお話しは、各々十五分程度の短かいものであったが、それぞれの学問体験を通しので御教示であり、内容の深い御講話であつた。

△班別討論・班別輪読▽

班別討論は、主に講義の後、一時間から一時間半の時間をとつて行なわれた。討論の最初の頃は、話しの中心が抽象的な政治問題や、観念的なイデオロギーの問題に集中することが多く、班員相互の気持がどうしてもすれ違いがちであつた。お互ひに裸の自分を皆の前にさらけ出すことに、躊躇を感じてゐたのであらう。しかし回を重ねるにつれて、お互ひの心の中に強い反省が生れて来たのも事実である。一体何故に、私達は夏休みの貴重な数日をさいて、この阿蘇の山麓に集つたのであらうか。それこそ正に、常日頃各大学で研鑽してきた己れの思ひを、卒直に全国の友に伝へるためではなかつたか。人生を、祖国を忌憚なく語り合ふためでは

なかったか。一女子学生はこの間の心の動きを、次のように反省している。「私は自分自身をなげ出して、くたくたになるまでに心をくだいてはあませんでした。ひとりに心を通じることができぬのに、世の人々と心を通じてゆこうなどと言っていた、なまぬるい過去の自分にぎくりとしました。」と。各人のかうした強い内省と自覚とによって、討論は次第に活発かつ深みのあるものとなつていった。

自分を飾らずに素朴な言葉で語る友、とぎれとぎれながらも一つ一つの言葉を噛みしめながら話す友、目に涙を浮かべて感動を語ってくれる友……。かうした友の言葉をうわべだけで受けとめるのではなく、友の話す言葉の中にどのやうな思ひがこめられてゐるのか、どのやうな気持で友が話してゐるのか、一つ一つの言葉に現はれた友の思ひに自分の心をかよはせながら、真剣かつ厳しい討論が展開された。

鹿見島大 松 元 忠 久

昨日まで見知らぬ友と語り合ふこのひとときを大事にしたき

福教大 金 沢 明 夫

友どちに思ひのたけを語らんと思へどなか言の葉出でこぬ

亜細亜大 成 田 幸 太 郎

わかつてくれわかつてくれよとうたふる友のまなこに胸を打たるる

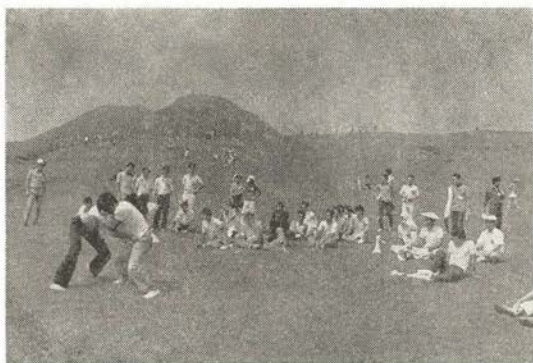
二日目の夜、修猷館高校教諭、小柳陽太郎先生によって輪読導入講義が行なはれた。先生は古典を読む場合の姿勢について、「著者の言葉を自分勝手に解釈してしまふのではなく、自身の実験に照らしながら、著者の気持を憶念してゆくことが大切である。」と述べられ、具体的に聖徳太子の、「世間虚仮唯仏是真」といふ御言葉をとり上げて、太子の御気持をこまごまと説示された。この後直ちに班に戻り、輪読に取り組んだ。輪読に用ゐた書物は、黒上正一郎先生がその御述作にあたり、一語一句に心血をそそがれたと言はれる『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』である。この本は私達の座右の書として、各大学での勉強会にも用ゐられ、常日頃から深い御教示を受けてゐる書物である。一度読んだ時は、言葉がむづかしく意味がよく解からないといふ友もゐた。しかし二度三度と、一言一句ゆっくりと噛みしめながら読んでゆくとつれ、太子の深い御心や、それを身を刻むやうにして解説してをられる黒上先生の御気持が、難解な御言葉の一つ一つに滲み出てゐるのに気付かせられて来た。長い沈黙が支配することもあった。それは、お互ひが書かれてゐる言葉を通して、著者の気持に迫ってゆかうとする必死の努力の現はれであった。就寝時間を過ぎても、各班の部屋からこの文章をくり返し読む声が、いつまでも聞こえていた。

読み終り頭を上げてみ友らの顔をし見れば輝きて見ゆ

△和歌創作▽

和歌をつくるといふことは、殆んどの人にとって初めての体験であった。何か慣れないことをするときのやうな物珍らしさと、果して自分にできるだらうかといふ不安感とが錯綜した複雑な気持になるのも当然であった。そのやうな中で三日目、夜久正雄先生による和歌創作導入講義が行はれた。先生は和歌を作る際の心構へについて、「和歌をつくる際最も大切なことは現実をありのままに表現すること、自分の気持と、言葉を統一させなければならぬ。まこと（真事＝誠）」とはこのことを言ふのである。」と話され、更に正岡子規の歌論に論及してゆかれた。その中で私達は、小手先だけの器用さや、言葉のもてあそび、理窟を徹底的に排した子規のうたに対する厳しい姿勢を知ることができ、和歌創作といふものが、単なる趣味的な技芸ではなく、自分の人生に対する基本的な姿勢ともかかわってくるものであることを思ひ知らされた。五七五七七といふ僅か三十一文字の中に、己れのすべてを、己れの全生命を託する和歌といふ詩型が、何故今日迄その生命を維持してきたのか。考へてみると不思議とさへ思はれる。しかしこの不可思議な事実こそ、私達の祖先が如何に言葉といふものを、大切にしてきたのかといふことの証左なのであらう。

夜久先生の御講義の後、記念撮影をすませ、直ちにバス六台に分乗し、和歌創作を兼ねた登



てに里千草

山へと出発した。美しく舗装された道路を軽快に走るバスの車窓からは、たくさんの方々の放牧の牛が見えた。見渡す限り緑の草原の中で、楽しさうに草を喰む姿が印象的であった。途中「草千里」にて昼食。爽やかな風の吹き渡る丘の上で、友らと談笑しながらほほばるめしの味はまた格別である。草の上を駆ける者、相撲をとる者もある。ぎっしりと詰った日程の中でも楽しい一時であった。昼食後、再びバスに乗り込み、一路阿蘇中岳へと向かった。中岳の火口から下を見下すと、時折煙の合間から硫黄の附着した黄色い岩肌が見え、その下から溶岩の滾るやうな地響きが伝はってくる。まさに雄大そのものである。中岳の火口を巡りながら私達は、和歌創作に専念した。噴煙を見ながら指を折る者、できた和歌を楽しみに披露する者、一人岩に腰かけて考へ込む友もゐた。

かうしてできた苦心の和歌は、事務局の方々の夜を徹しての作業によって、三十四枚にわたる歌稿に印刷された。

配布された歌稿をもとに四日目の夜、夜久先生によって和歌全体批評が行なはれた。先生は、我々の歌を一つ一つ取り上げられながら、言葉遣ひの間違ひ、感情の不正確な表現等を解り易く指摘してゆかれた。時折ユーモアを交へられながらの批評に、思はず爆笑の湧く愉快な一時であったが、自分の揺れ動く感情を適確な言葉に表現することが、如何に難しいかを痛切に感ぜしめられた。その後、班に帰り、班別の相互批評が行なはれた。友が如何なる時に、如何なる気持で詠んだのか、作者の体験や気持を十分推し量りながら、忌憚のない率直な批評会が各班で行なはれた。和歌を通しての厳しくも楽しい語らひの中で、自づとお互ひの心が一つに繋がってゆくのを感ずることができた。

△慰 霊 祭▽

合宿三日目、国民文化研究会の関正臣先生の司会のもとに慰霊祭が執り行なはれた。ここに祭られる御霊は、「戦時、平時を問はず日本の国を守るために貴い生命を捧げられたすべての祖先の御霊」である。真暗な夜の闇の中にかがり火だけが赤々と燃え、時折パチパチと音をた

てて火の子が宙に舞ふ。その簡素な祭壇を前に、参加者全員が整列。お祓ひに代へて、故三井甲之先生の和歌「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」が、松吉基順先生によって朗詠された。莊重な和歌のしらべが、大阿蘇の澄みきった空気に響きわたると、我身をかへりみず祖国のために一身を捧げられた、幾多の先人のいさをしが次々と思ひ出され、一瞬身震ひする思ひであった。引き続き全員黙禱のうちに降神の儀。全ての祖先の御霊が私達の頭上に集ひ来られ、私達を見守つてをられる。祭壇に神饌を捧げ、明治天皇の御製を加藤敏治先生が拝誦された。「国のためたふれし人」の上に思ひを馳せられる明治天皇の悲痛な御心が、一つ一つの御歌からひしひしと感ぜられた。ついで小田村寅二郎先生が祭文を奏上された。そして皆で「海ゆかば」を斉唱した後、一斉に祭壇に向かって二拝二拍手一拜の祈りを捧げた。その後、全員黙禱による昇神の儀が行なはれ、かくして恙なく慰霊祭は終了した。緊張した一時であったが、私達皆、魂を洗ひ清められたやうなすがすがしい気持でいっぱいであった。

合宿に参加した殆んどの人にとって、この慰霊祭は初めての体験であったにもかかはらず、何の抵抗もなく心の底から、祖先の御霊をお祭りすることができたといふ喜びが、皆の顔に溢れてゐるやうであった。ある友は感想文の中で次のやうに述べてゐる。「三井甲之先生の遺歌の朗詠の時、祖先のいのちが一すぢにつながり流れてゐるのを痛感し、涙のわきでるのを禁じ

得ませんでした。私は全身で感動したこの体験により、国のいのちにつらなり得たといふ名状し難い喜びを感じるのです。」一時間足らずのささやかな式典の中で、常日頃煩雑さにかまけて忘れてしまひがちな、祖先のみ祖達に対する感謝と畏敬の念を、全身で感ずることができたのは、私達にとって何物にもかへがたい喜びであった。

以下にその時拝誦された明治天皇御製と奏上されたのりとを記しておく。

△明治天皇御製▽

水

ふく風もたえてふけゆくさ夜なかにただひとすぢの水のおとする

虫

ひとりしてしづかにきけば聞くままにしげくなりゆくむしのこゑかな

をりにふれたる

はからずも夜をふかしけりくのため身をすてたりし人をかぞへて

写 真

国のためかばねをすてしますらをのすがたをつねにかかけてぞみる

をりにふれて

ますらをも涙をのみて国のためたふれし人の物語しつ

くにのためたふれし人をおもひつつねたるその夜のゆめにみしかな

親

国のためたふれし人を惜むにも思ふはおやのころなりけり

子

かなし子にかたりきかせよ国のため命すてにし親のいさをを

鏡

国のためいのちをすてしものふの魂や鏡にいまうつらむ

△慰霊祭のりと▽

いまわれらは、しきしまのやまと島根の南の阿蘇連山カルデラの丘べを、祭りのにはと定めまつりて、謹み畏み魂喚よばひまつれるみ祖たち、同胞いづからたちのみたまのみ前に、第十七回学生青年合宿教室参加者全員に代りて小田村寅二郎謹み畏み敬ひ申さく

われらここに集へるものら、今日この時を選び、ささやかなれども海の幸山の幸くさぐさの

品をそなへまつり、遠きいにしへより今にいたる幾千歳の間みくにのいのちとことはならむを祈りつつ、みくにのために、いのち捧げし幾千万の尊きみ祖たちのみたまのみ前に、また、さきの戦ひに、われらに先立ちて祖国日本のために神あがりあがりたまひし亡き同胞亡き友らの尊きみたまのみ前に、ここに集ふわれら心一つにみ霊和めのみ祭り仕へまつりて告げまつらくは、この美はしき大和島根を、汝命たちのみ心受け継ぎて永久に、心豊かなる人々の集ふ所と榮えしめんがため、われらは、言霊の幸はふ大和言葉を中心を籠めて相共に学び相共にわれらが言葉に生き通はしめんと希ひつつ、この世に在りましし日のみ祖、同胞たちのきびしき、またおほらかなるつとめを偲びまつりつつ、いま訪れ来たらむとするみ国のあやしきゆく末、曲れる言論、政治、学問のことごとくを、あるべき姿に正さではやまぬ思ひに、積りなす世の曲事の悉を、力の限り、打ち払ひ打ち払はむと心定めぬ。

天がけります汝命たちのみ霊よ、われらの足らはぬ心のうちを現しくみそなはし給ひ、われら、か弱かれども、み民われらもろともに忠やかにわが大君天皇の大きみ心を偲びまつりつつ、汝命たちのみたまとともに、もろともに心合せつつ、まめやかに生きなむと誓ひまつるこの拙き心を、みそなはせ給へと、謹み敬ひ畏み申す。

合宿最終日の日程は、坂東一男運営委員長のアピールに始まった。坂東委員長はその中で、「今胸の中にあるものを燃やし続け、自分が中心になってやるんだといふ気持ちを心に決めようではありませんか、この合宿が終つてからが本当の勝負です。どうか今の思ひを、学園の友に伝へ、広げてゆかうではありませんか。」と力強く訴へられた。

続いて全体意見発表。四泊五日間の共通の体験を通して得た様々の思ひを皆に訴へる最後の機会である。自分の今の気持ちを一言でも伝へようと登壇者が絶えない。ある友は講義のすばらしかったことに感謝し、またある友は班員と徹底的に語り合ひ、この合宿が第二の出发点となつたと述べた。涙で言葉にならず、壇上に立ちつくす友もいた。そこで話される言葉は決して流暢なものではなかった。自分の気持ちを飾ることなく吐露する友の言葉は、決して雄弁ではなかった。けれどもその言葉には、人の心を動かさずにはをられない気魄があふれてゐた。友の訴へる姿は、嘘いつはりのない人間の真の姿であつた。その時の感動を詠んだ数首の和歌をここに記しておく。

亜細亜大 山口 博 英

目をふせて何もいへずに涙ぐむ友の姿に胸あつくなる

熊本大 宮崎 重人

ありがたうと涙ながらに感謝せし友の姿に我は拍手す

しばらくは声出でずして立ちつくす兄の思ひの胸に迫り来

上智大 山口 良 男

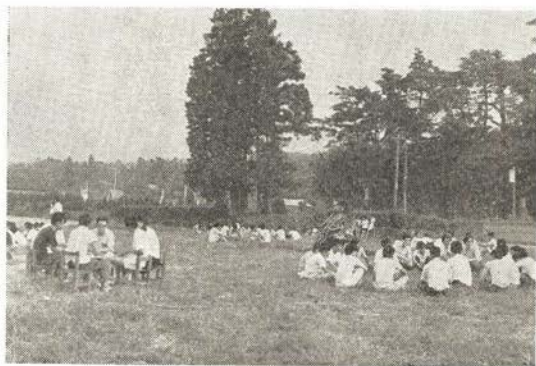
そのあと、「合宿をかへりみて」と題して、小田村先生のお話しがあった。先生は、全体意見発表の際の学生の発言に触れられ、「自分自身のささいな失敗を、人前で反省してゐるやうな悠長な時ではない。そんなことは自分の腹の中におさめておけばよいのです。私達は、小乗的ではなく、大乘的に物事を考へてゆかなければなりません。」と感想を述べられた後、「四日前を思ひ出さうとすると、遠い昔のことのやうに思はれるのではないでせうか。それは皆さんが、緊張して合宿生活を送り、毎日が凝縮されたものであったからです。」と語られた。敵しくもやさしい御心遣ひの偲ばれるお話しであった。

その後、感想文執筆と第二回和歌創作。そして、いよいよ閉会式が始まった。国歌が高らかに唱和された後、国民文化研究会副理事長の浜田収二郎先生が、閉会の挨拶に立たれた。先生は、私達一人一人は決して一人ではなく、日本の道統につながってをればこそ非常に強いものであり、これによってこそ、私達の本当のつとめを果すことができるであらうと語られ、「この合宿で得ました得難い体験を胸にうかべて、只今からまた国のために尽くしたいと存じます。」と結ばれた。次に参加学生を代表して、熊本大学工学部三年の高岡正人君は、「山を降りて現

実の生活の中に戻ると、いろいろ苦しいこともあると思ひますが、この合宿で共に学んだ本当の友達が、全国にあるのだといふことを肝に銘じて、負けずに頑張つてゆきたいと思ひます。」と述べた後、明治天皇の御製、「もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき」を力強く拝誦した。

そして四泊五日の間、心をつくして御指導下さった、国民文化研究会並びに大学教官有志協議会の先生方に、全員で感謝の意を表した後、東京工業大学工学部三年の植田伸一君の力強い閉会宣言をもって、第十七回学生青年合宿教室はその全日程を終了した。

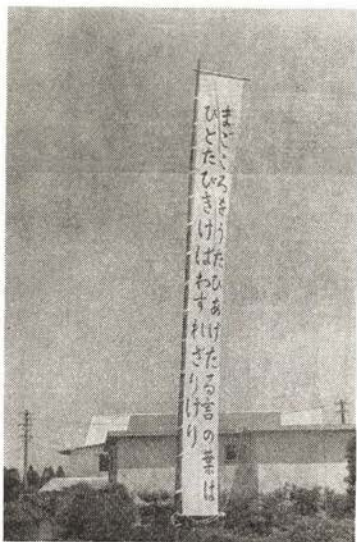
私達は今まさに、阿蘇のカルデラに別れを告げようとしてゐる。山を降りれば、関西へ関東へと散りくになつてしまふであらう。けれどもこの地で結んだ心の絆は決してはなれることはない。四泊五日間、共に学び、共に励み、共に涙した青春の日の思ひ出は、一人一人の胸



学校別、地域別の野外での懇談

「合宿教室」のあらまし（徳丸）

の奥底に素晴らしいエネルギーとなつて、いつまでも絶えることなく息づいてゆくことであらう。



(附)

合宿歌集

—参加学生の創作短歌より—

全体意見発表の折、東中野兄の話を聞きて

上智大 山口良男

しばらくは声出でずして立ちつくす兄の思ひの胸に迫り来

最後の夜のつどひにてギャルポ兄の踊りを見る

早稲田大 谷良二

楽しげにチベット民謡踊れどもさぞや祖国の恋しかるらん

一日も早く祖国の戻る事心の底より祈りをるなり



お互ひに名前呼び合ふその声もいつか知らずにうちとけて来つ
熊本大 折田豊生

全体意見発表を聞きて

早稲田大 古川忠

友どちと心ゆくまで話しえず口惜しかりきと声つまらせぬ
苦しがる友の心はひたぶるに己が心に迫りて来るも

チベットよりペマ兄きたる

九州大 大野英則

チベットの名しか知らない我もまた彼の言葉に耳傾くる
本国の歴史を語る友どちの強き言葉に心うたるる

中共にせめられた後むりやりに国の一部に含めらるとは
チベットの抑圧されし現状を初めて聞いて胸のつまりぬ

朝の集ひの折

早稲田大 藤井貢

露おきし草原に立ちておごそかに揚る日の丸見るはずがしも

熊本大 田之上正明

師の君の教へさとしし御言葉は一語一語が心にきざさる

班別相互批評にて我が歌を批評せられし時

東京大 等健二

思ひやりてなほ思ひやりて語らるる友の言葉の胸に迫り来

玉川 川 尻 博 宣
国思ふ雄々しき心つたひきておごれる我が身のはづかしかりき

小田村先生の御講義を聞きて

東京学芸大 田 島 正 行

迫り来るあつき思ひに胸つまり思はず我はまなこ閉ぢたり

山本先生の御講義を聞きて

東京工大 植 田 伸 一

教へ子に己れの生命捧げむと決意されにし熱意を学ばむ

福岡大 薬王寺 百合雄

阿蘇山に友とつどひしけふの日のおもひのこらむ年過ぐるとも

全体意見発表でギャルポ君の話聞きて

九州大 十 時 一 郎

何処に居ても君等のことは忘れぬと言ひし言葉に胸せまり来る

亜細亜大 朱 膳 寺 辰 雄

これだけはわかつてほしいとうったふる師の熱情にわれおどろきぬ

ペマ・ギャルポ君のお話を聞きて

九州大 天 本 和 馬

チベットより来りし君は壇上で祖国の危機を強く訴ふ

大国の力によりてチベットの祖国の生命まさに絶えむとす

兄上を他国に連れて行かれしてふ君が思ひはいかばかりなる

古ゆ受けつがれこし言の葉は使ふ能はずと我らに訴ふ
国土までか言の葉までも奪はれしチベットの人の心やいかに

川井先生の御講義を聞きて

亜細亜大 村田隆和

師の君は一語一語に力こめ共産主義の脅威説かれつ

全体意見発表にて

早稲田大 松村俊明

演壇に登りて語る学友の涙見し時胸つまりけり

我もまた思はず手を上げ演壇に登りて言ひし胸内のままを

班別輪読にて

九州大 志賀建一郎

聖徳の皇子の心を今ここに友らと共に偲ぶも嬉し

読み終り頭を上げてみ友らの顔をし見れば輝きて見ゆ

合宿を終りて

九州大 桑野博行

三時間たれば友らと別るとも我ら心は常に一なり

先輩より「疾き遅きたがひはあれどつらぬかぬことなきものはまことなりけり」

といふ明治天皇御製を示されて

鹿児島大 仁多永夫

弱きより離れ今より師や友の導きに添ひ生きてゆきなむ

皇国の益良夫の道求めつつ求めつつ進まむ心定めて

鹿兒島大 野間口 俊 行

山本勝市先生の御講義をお聞きして

九州大 久々宮 章

老ゆる身をかへりみもせず国の為と尽くし給へる御心忘れじ

かくばかり日の本の行末案じたまふ師のお心にむくひざらめや

我が力微力なれどもみ友らと師のお心につながりてゆかむ

班の全員で戦没学生・松吉正資さんの歌をよむ 九州大 川 井 泰 彦

友どちと声を合はせてよみゆけばみ友への思ひ胸に迫りく

小田村先生のお話を聞きて（前田、中國兄について） 熊本大 高 岡 正 人

師の君の語り給ひし言の葉の我が胸深くしみてくるなり

九州大 吉 原 琢 磨

友どちの心をこめし声を聞き我も思はず姿勢を正しき

早稲田大 岩 下 彰 夫

君が代の心震はずメロディに目頭知らず熱くなりきぬ

ペマ・ギャルポ君の発表を聞きて 亜細亜大 渋谷 啓 一

友どちの身に迫る思ひの言の葉を聞けば胸うち熱くなりゆく

杉山君を思ひて

九州大 吉田 哲太郎

夜遅く床を並べて友達のまごころこもる話を聞けり
今までに言葉少き君なれば話を聞きてうれしかりけり

班別討論

亜細亜天 成田 幸太郎

わかつてくれわかつてくれよとうったふる友のまなこに胸を打たるる

亜細亜大 杉山 勝久

友どちと心開きて語りたる言の葉胸に阿蘇を去り行く

輪読会にて

慶応大 西高辻 信美

まごころを伝へむとする我が友の熱き言葉にわれもうたるる

全体意見発表を聞きて

日本経済短期大 北原 実

それぞれに思ひをのぶる友をみて熱くなりいき我が目がしらは

ペマ・ギャルポ君の発表

鹿児島大 徳丸 雅信

壇上に一番に登り胸をはり手ぶりをまじへて君は語りき

チベットの国を憂ふる君が心鋭き眼差まなざしにあふれてをりぬ

慰霊祭にて

東京外語大 草場 正博

真黒なる空のもとにぞ集ひけり貴き御霊慰めんとて

捨て難き身にしありしを先達は
大君の辺に死にしとぞ聞く
身を捨てて末の世までも国民に
さきはへあれと守る先達

長崎大 草野健一郎

感動の心も忘れ幾年を過せし
我が身を恥づかしと思ふ

別れの時に

熊本大 松田信一郎

去りがたき思ひいだきてみ
友らはあとふり返り今別れゆく

福岡大 山本哲史

また逢はむとちかひし友の手を
にぎり言葉なくして力しめゆく

大分大 野田清文

合宿の二日三日と進むにつれ
心たがひになごみゆくなり

友を迎へに阿蘇駅に行きし時

熊本大 坂本精児

全国ゆ友等をのせし汽車つけば
おのづとマイクをにぎりしめけり

マイク持ち呼びかけをればとも
どちは笑ひをうかべてヤアと手をあぐ

鹿児島大 有馬守一

我が歌のはづかしきほどの稚さに
いひ添へくるる友のうれしさ

師と共に肩組み合ひて寮歌をば歌へば自づと心伝はる

熊本大落合隆文

友達の素直な言葉におのづから心の開く思ひするか

東京外国語大森田秀二

朗朗たる霊まつる声に聞き入れば心洗はれすがしが思ひす

九州大宝辺矢太郎

先達のみ霊まつらむと共々にくらくなりたる庭にゆきけり

西南学院大占部賢志

祭壇をはらひ清めんとますらをの歌詠む声に涙いできつ

祭壇で御製詠みますその声の胸に迫まりて涙もよほす

先達に思ひをつけむとよみゆける師のみ言葉の胸に迫れり

慰霊祭終りて神酒をいただきてのみほす時のその味のよさ

熊本商科大中園俊郎

五日間共に学びし友どちと今別るるは寂しかりけり

今日よりはこの友どちの暖き心忘れず学ばんと思ふ

壇上に心かたむけ語られし友の御言葉胸にしみいる

国学院大 石井孝一

君が代をひびきわたれと友みなと心あはせて歌ひゆきけり
熊本商科大 井上弘次

まごころと口にいだすは易けれど努むることのかくもむづかし
長崎大 木下文雄

かみしめて言はれし言葉のその裡に我が身を震はす氣迫こもれり
岡山大 中島裕樹

「うらみに報ゆるに徳を以ってす」と言ひし総統の言葉はただに有難きかな
日の本をかく思ひくれし人の居る国との仲は永くあるべし
亜細亞大 富沢君夫

きのふまで見知らぬ友よ今日からは椅子を並べて共に学ばむ
九州大 末次直人

故郷を遠く離れて偲ばるる我が家に一人老いし母親
国際経済大 根岸正幸

はじめて班長をして

熊本大 白 浜 裕

班長会議をおわりて部屋に帰りくれば友等はすでに床につきをり
連日の討議に友等は疲れしか身じろぎもせず寝息たてをり
我もまた寝んとすれば隣より「ごくろうさん」てふ友の声ありき
その友は寝ずに我を待ち居りしかその心尽しの嬉しく思はる

日本経済短期大 光 本 智恵子

我が友の涙声にてうったふるその言の葉に我はうたれぬ

熊本短期大 長 野 直 子

講堂に響きわたりたる君が代の尊きしらべの胸にしみゆく

九州大 畦 森 雅 子

国を思ひ声はりあげてのたまひし師の御言葉に胸うたれたり

福岡女子大 有 馬 節 子

いにしへの人のこころのかくまでに我の心にしみ入りくるとは

成蹊大 開 由 起 子

よろしくとあいさつかはすつかの間に心もなごむ名も知らぬ人と

息せききつてのぼりきたりし我がほほに山頂の風快く吹く
鹿児島大 川 井 治 子

鹿児島大 栗 原 淳 子

とぎれがちに思ひを述ぶる壇上の友のことばに涙流しぬ

上智大 重 松 智 子

全国ゆつどひあひたる友らとの別れの時は近づきにけり

長崎大 松 本 智 子

感想文書き上げんとする班員の一人一人の顔をながむる

大らかの広き心もてこれよりは求めてゆかん敷島の道

日本経済短期大 宮 崎 恵 子

心よりいでし言葉うれしくて我はみつむる友どちの顔を

(この項、九州大学歯学部 吉田哲太郎選)

本合宿で論議の中心となった日中間題はいよいよ收拾すべからざる事態を迎へ、日本の国運は、いまこの一点に絞られてゐる観がある。合宿の当時から今日まで状況はさまざまに変化したのが、本質的な問題はあらたまるべくもない。この合宿でこの問題を直接とりあげていただいた山本先生をはじめ、講師の諸先生方の御講義を、いまこそ熟読玩味していただきたいと思ふ。

○ 今回の合宿では、「青年研究発表」といふことで、今林、奥富の両氏が登壇、合宿教室の中から育ってきた青年の生き方を、それぞれの体験に即しながら語っていただいた。この十八年にわたる歲月、毎年合宿教室をいとなみながら、われわれは何を願ってきたのか、それをこれら青年の言葉の中には非読みとってもらひたいと思ふ。なほ、体験発表ともいふべきものに、「研究」といふ二字を冠したことに對して、奇異の念をいだかれる方があるかもしれないが、それは、研究者自身の体験をぬきにして行はれる現代の学問、殊に精神を扱ふ学問のあり方、研究のあり方に対するわれわれの一つの見解としてうけとっていただきたい。

○ 今年度のカットは正倉院の御物で統一した。大陸の文化を大らかにうけ入れた天平時代の民族の

あふれるやうな情感を偲ぶすがにしていただければ幸である。

○

なほ本レポートから仮名遣はすべて歴史的仮名遣によつた。日本の文化を正しく継承する道は、日本古来の言葉の正しい姿を継承することからはじめなければいけないことを信じたが故である。

○

今年の合宿教室は八月四日から八日まで、雲仙のファミリーホテルで開催、講師には前年度にひきつづいて木内信胤先生の外、文芸評論家の福田恆存先生が七年ぶりに御登壇いただくことになった。六月一日から受付を開始するが参加希望者は七月十日までに東京都中央区銀座七ノ十ノ十八、柳瀬ビル内の社団法人国民文化研究会あて申し込んでいただきたい。

昭和四十八年三月八日

山田輝彦
小柳陽太郎

社団法人 国民文化研究会関係図書目録

A 先師・先輩の遺著

書名	著者・編者	発行年月日	版・頁数	定価
聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業 (増補再版本)	黒上 正一郎	四四・一〇・一五	A ⁵ 三〇四頁版	〒 一四〇〇 1,000円
憂国の 光と影 ―田所広泰遺稿集―	小田村寅二郎編	四五・三・一〇	B ⁶ 五〇一頁版	非売品

B 国文研叢書(新書版)

No.	書名	著者・編者	発行年月日	頁数	定価
1	古事記のいのち	夜久 正雄	四一・三・二五	二四六頁	〒 二八〇 二八五〇円
2	日本精神史鈔 ―親鸞と実朝の系譜―	桑原 暁一	四一・一一・二五	二七九頁	非売品

11	10	9	8	7	6	5	4	3
<p>続 日本精神史鈔 —花山院とその系譜—</p>	<p>欧米名著邦訳(明治)集 文献資料集—</p>	<p>歴史と人生観 —マルクス主義の超克—</p>	<p>日本思想の系譜 —文献資料集(近代その二)</p>	<p>日本思想の系譜 —文献資料集(近代その一)</p>	<p>日本思想の系譜 —文献資料集(近世その二)</p>	<p>日本思想の系譜 —文献資料集(近世その一)</p>	<p>日本思想の系譜 —文献資料集(古代・中世)</p>	<p>弁証法批判の歴史</p>
桑原 暁一	小田村寅二郎編	川井 修治	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	高木 尚一
四五・一二・二五	四五・三・二〇	四三・三・一五	四四・三・二五	四四・三・二五	四三・一〇・一	四三・二・一	四二・三・二五	四二・二・二五
三一〇頁	四八三頁	二八三頁	三八一頁	四〇三頁	四〇九頁	三一七頁	三〇九頁	二四一頁
非売品	〒五〇〇円 〒一四五円	〒三〇〇円 〒一二五円	〒四〇〇円 〒一二五円	〒四二〇円 〒一一五円	〒四二〇円 〒一一五円	〒三二〇円 〒一一五円	〒三二〇円 〒一一五円	非売品

13	短歌のあゆみ ―続「短歌のすすめ」―	山夜 田久 輝正 彦雄	四六・一二・一	三二六頁	三三〇円 二一五円
12	短歌のすすめ	山夜 田久 輝正 彦雄	四六・四・一	三〇九頁	三五〇円 二一五円

C 「合宿教室」レポート

回数	開催地 (人員)	年	書名	主要講師	版・頁数	定価
4	阿蘇 (一六〇)	34	国民同胞感の探求	花田大五郎・中山優 野口恒樹	B6 三六五頁	五〇〇円 二一〇円
3	佐賀 (七二)	33	民族の明日を求めて	勝部真長・木下彪 森部三十郎	新書版 二五〇頁	二〇〇円
(2)	岡山	32	民族復興の根柢を培うもの	木下尚一・石村暢五郎 高木一彪	新書版 一三三頁	一〇〇円
2	福岡 (一二七)	32	民族自立のために	竹山道雄・高山岩男 浅野晃	A5 五三頁	五〇円
1	霧島 (九二)	31	混迷の時代に指標を求めて	広田洋二・日下藤吾 夜久正雄	A5 八八頁	一五〇円

13	12	11	10	9	8	7	6	5
霧島 (三五三)	阿蘇 (三三六)	雲仙 (二四〇)	別府・城島 (二一五)	桜島 (二〇二)	雲仙 (二〇二)	阿蘇 (二一五)	雲仙 (二〇八)	雲仙 (二〇〇)
43	42	41	40	39	38	37	36	35
日本への回帰 — 第四集 —	日本への回帰 — 第三集 —	日本への回帰 — 第二集 —	日本への回帰 — 第一集 —	新しい学風を興すために — 第三集 —	新しい学風を興すために — 第二集 —	新しい学風を興すために — 第一集 —	続々 国民同胞感の探求	続 国民同胞感の探求
木内山 信胤	林房雄・太田 信胤 耕造	福田 恆存・木内 戸川 尚 信胤	岡内 潔・花見 木内 信胤 達二	小林 秀雄・広田 木内 信胤 洋二	竹山 道雄・木内 木下 広居 信胤	福田 恆存・木内 黒岩 一郎 信胤	小林 秀雄・木内 津下 正章 信胤	木内 信胤・花田大五郎 佐藤慎一郎
新書版 三四頁	新書版 三七頁	新書版 三二〇頁	新書版 二九五頁	新書版 二九八頁	新書版 二九八頁	新書版 二四八頁	B6版 三二五頁	B6版 四三三頁
三〇〇円 一一五円	三〇〇円 一一五円	三〇〇円 一一五円	三〇〇円 一一五円	三〇〇円 一一五円	三〇〇円 一一五円	二〇〇円 一一五円	五〇〇円 二一〇円	五六〇円 二一〇円

D 「合宿教室」感想文集（非売品）

（国民同胞感の探求三部作は「理想社」より刊行）

書名	編者	発行年月日	版・頁数
第十四回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	四〇・一〇・二〇	A5版 八〇頁
第十三回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	四一・一〇・一五	A5版 一〇四頁
第十二回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	四二・一一・一五	A5版 一二〇頁
第十一回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	四三・一〇・一〇	A5版 一一八頁
14 阿蘇 (四〇三)	岡下 道雄・木内 信胤	新書版 二九五頁	三〇〇円 一二五円
15 雲仙 (四九一)	小林 秀雄・木内 信胤	新書版 二六五頁	三〇〇円 一二五円
16 霧島 (三〇二)	木内 信胤・戸田 義雄 村松 剛	新書版 三二二頁	三〇〇円 一二五円

日本への回帰 — 第五集 —

日本への回帰 — 第六集 —

日本への回帰 — 第七集 —

第十四回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	四四・一〇・二〇	A5版 一三六頁
第十五回「合宿教室」参加者感想文集 —現代知性への警鐘—	国民文化研究会編	四五・一〇・三〇	A5版 二二八頁
第十六回「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	国民文化研究会編	四六・一一・一〇	A5版 一二六頁
第十七回「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	国民文化研究会編	四七・一〇・三〇	A5版 一六四頁

E 海外派遣レポート（非売品）

書名	編者	発行年月日	版・頁数
日韓・海と河の交流（日韓交流レポート）	浜田 収二郎	四三・六・一	A5版 一二二頁
香港・マニラ・ミンダナオ巡訪団 レポート	川井 修治 田収 二郎	四四・一一・二九	A5版 八〇頁

F その他

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
歌よみに与ふる書・他四編	正岡 子規 (国民文化研究会発行)	新書版 一二二頁	一五〇円 一五五円
天皇と天皇制についての基本的思考	小田村寅二郎・夜久正雄 (斑鳩会発行)	新書版 一〇七頁	(品切)
今上天皇御歌解説 (附) 万葉集論	三井 甲之 (斑鳩会発行)	新書版 一五七頁	二三〇円 二七〇円
明治・大正・昭和 『謹選 詔勅集』	(斑鳩会発行)	新書版 八五頁	二三〇円 二七〇円

G 関係図書

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
新編 日本思想の系譜(上・下) —文献資料集—	小田村寅二郎編 (時事通言社)	A 5版 (上) 八五七頁 (下) 九一二頁	上・下各 三〇〇〇円
日本思想の源流 —歴代天皇を中心に—	小田寅二郎 (日本教文社)	B 6版 三〇五頁	七〇〇円

THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN
 (国文研叢書No. 1 「古事記のそと」の翻譯)

(訳者) G. W. ROBINSON
 THE CENTRE FOR
 EAST ASIAN CULTU-
 RAL STUDIES

B
 二〇八頁版

H 月刊誌

誌名	創刊・号数	版・頁数	定価
月刊 「国民同胞」	昭和三十六年十一月創刊 昭和四十八年三月現在一三七号	B 5 八頁版	年間七〇〇円 〒一二二円

I (分科会) ・教育内容は正促進委員会編著

書名	発行年	版・頁数
現下の学校教育の内容を正すために急務を要する問題点	四十七年十二月	B 5版・二五頁

— 日本への回帰 —
(第 8 集)

昭和四十八年三月二十七日発行 定価 三〇〇円

〒一一五円

編 者

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小 田 村 寅 一 郎

発 行 所

社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇一八柳瀬ビル

振替 東京六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えいたします

